



III 平城宮跡等の調査概要

表29 2016・2017年度 都城発掘調査部(平城地区)発掘調査一覧

調査次数	調査地区	道 路	調査期間	面 積 調査地	担当者	調査要因	掲載頁
(2016年度)							
581次	6AFF-C	平城京左京二条二坊十一坪	2017.11.6~1.20	21m ² 奈良市法華寺町	鈴木智大	住宅建設	212
582次	6BFO-E	平城京左京一条二坊十坪	2017.2.13~3.3	100m ² 奈良市法華寺町	鈴木智大	住宅造成	214
583次	6AFC-G	平城京左京一条二坊十坪	2017.1.30~2.15	39m ² 奈良市法華寺町	鈴木智大	住宅建設	217
(2017年度)							
584次	6ALQ	平城宮東院地区	2017.2.6~5.29	1103m ² 奈良市法華寺町	庄田慎矢 山藤正敏	学術調査	171
585次	6ACD	平城宮第一次大極殿	2017.4.10~7.27	435.5m ² 奈良市佐紀町	山本洋隆	学術調査	198
586次	6SNY	中山瓦窯	2017.4.17~4.20	57.5m ² 奈良市中山町	海野 雄	住宅建設	222
587次	6ALQ	平城宮東院地区	2017.4.24~4.26	60m ² 奈良市法華寺町	国武貞克	住宅建設	196
588次	6AGA	平城京右京一条二坊四坪	2017.6.5~6.15	42m ² 奈良市二条町	山藤正敏	学術建設	230
589次	6BTD	東大寺東塔院	2017.7.25~8.11.10	598.5m ² 奈良市羅城町	芝原次郎	学術調査	224
590次	6BKF	平城京左京三条七坊	2017.7.26	40m ² 奈良市登大路町	岩戸晶子	防災工事	168
591次	6ASB	平城宮北方道路	2017.9.4~9.6	15m ² 奈良市佐紀町	岩戸晶子	住宅建設	168
592次	6ALB	平城宮東北官街地区	2018.2.14~2.27	154m ² 奈良市法華寺町	丹羽崇史	住宅建設	168
593次	6ALQ	平城宮東院地区	2017.10.2~2018.1.31	969m ² 奈良市法華寺町	小田裕樹	学術調査	183
594次	6GSD-P	西大寺旧境内	2017.11.6~11.7	8.4m ² 奈良市西大寺小坊町	鈴木智大	住宅建設	228
595次	6ALQ-II-I	平城宮東院地区	2018.1.22~	1512m ² 奈良市法華寺町	桑田調也	学術調査	168
	6ALD-F-G						
596次	6BFK	法華寺旧境内	2018.1.10~1.18	52.3m ² 奈良市法華寺町	丹羽崇史	住宅建設	168
597次	6BSD	西大寺旧境内	2018.2.20~3.30	155.6m ² 奈良市西大寺小坊町	浦 春子	住宅建設	168

表30 2017年度 都城発掘調査部(平城地区)小規模調査等の概要

調査次数	道 路	調査 の 概 要
590次	平城京左京三条七坊	既存建物中庭部分における屋外スロープ設置と樹木移植にともなう事前調査。調査地は、興福寺旧境内北邊にあたり、興福寺の多くの五重塔の一部、喜多院の敷地があった場所である。現地表下0.2~0.8mを掘削したが、いずれも現代の土成内に収まり、遺構・遺物は確認されなかつた。
591次	平城宮北方道路	個人住宅にともなう発掘調査。南北5m、東西3.6mの調査区を設定した。現地表下0.5~0.7m、標高76.1m~76.5mの地盤(明治時代以前の土成)で遺構面を検出した。小土塹を検出したが、市庭古墳に関わる古墳時代の建築や、奈良時代など古代の遺構と認識しうるものは見受けられなかつた。
592次	平城宮東北官街地区	個人住宅建設にともなう事前発掘調査。調査区は、南北2m、東西7.5mの東区、南北11.8m、東西16.5mのL字形状の調査区からなる西区に分かれる。東区は現地表下0.3~0.4m、標高71.8~9m付近で遺構検出をおこない、南北2m、土塙等の遺構を認めない。西区は現地表下0.2m、標高71.9~72.0m付近で遺構検出をおこない、調査区の一部でさらに掘り下げをおこなつた。
593次	平城宮東院地区	第584次および第593次調査区の東側に重複して南北42m、東西36mの調査区を設定した。新規発掘部分の面積は1122m ² である。現地表下0.7~0.9m、標高68.8~69.9mの整地土上面で遺構検出をおこない、奈良時代の複数時期にわたる掘立柱建物や構造などを検出した。調査は2018年度に繼續調査中である。
594次	法華寺旧境内	個人住宅建設にともなう事前発掘調査。南北25.5m、東西9.5mの調査区を設定した。現地表下0.5~0.6m、標高61.5~61.6m付近において遺構検出をおこない、東西2箇所、南北2箇所、土坑等の遺構を確認した。
595次	西大寺旧境内	共同住宅建設にともなう事前調査。調査区は東西8.5m、南北18.3m。現地表面下0.7~0.8m、標高約749mの地表面で遺構検出をおこなつた。中世の構および西大寺の御宇遺構の可能性のある掘立柱の柱根を確認した。

表31 2017年度 都城発掘調査部(平城地区)現場班編成 卓縦担当者

春	夏	秋	冬
国武 貞克(考古第一)	幸芝 康次郎(考古第一)	庄田 慎矢(考古第一)	浦 春子(考古第一)
幸山藤 正敏(考古第二)	神野 恵(考古第二)	歩小川 祐樹(考古第二)	丹羽 崇史(考古第二)
今井 見樹(考古第三)	岩戸 晶子(考古第三)	馬場 基(史科)	林 正憲(考古第三)
山本 洋隆(史 科)	海野 雄(道 橋)	鈴木 智大(道 橋)	幸桑田 調也(史 科)
乾祐 副課長 渡邉 見宏			福嶋 伸人(道 橋)
		写真担当: 金画調査部写真室	

III - 1 平城宮の調査

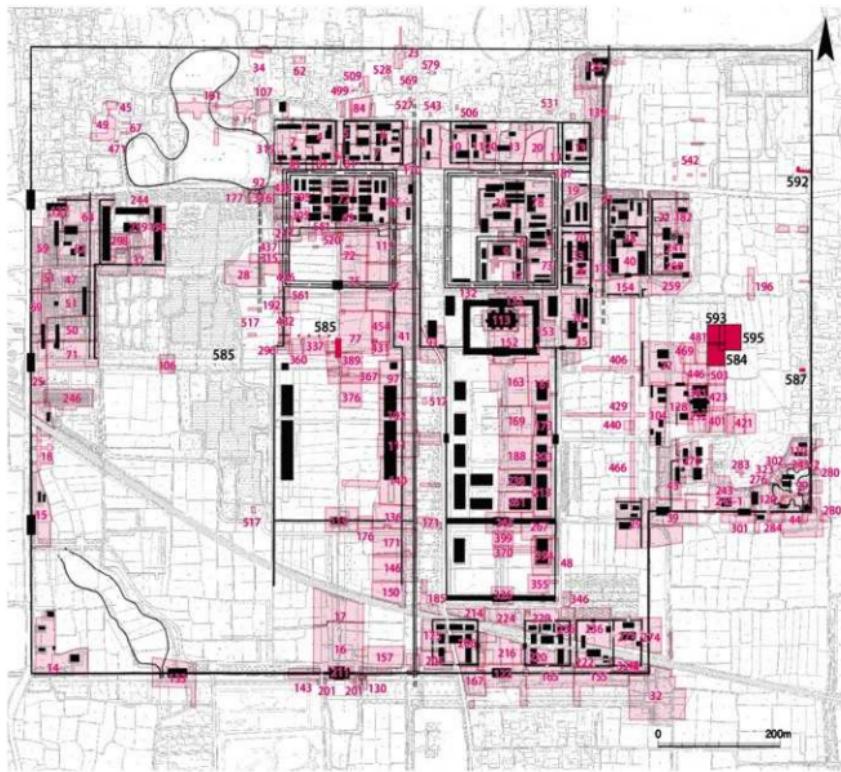


図192 平城宮発掘調査位置図 1:8000

平城宮東院地区の調査

—第584次・第587次・第593次

1 はじめに

調査地は、特別史跡平城宮跡の東の張り出し部南半、東西約250m、南北約350mの範囲である東院地区に位置する(図193)。「続日本紀」などの文献から、東院地区には皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られている。また、神護景雲元年(767)に完成した「東院玉殿」や、宝亀4年(773)に完成した光仁天皇の「楊梅宮」は、この地にあったと考えられている。

東院地区では、これまで南半や西辺を中心に発掘調査が進められてきた。前者では庭園遺構(東院庭園)の存在が、後者では大規模な掘立柱建物群が頻繁に建て替えられていた様子がわかっている。2006年度以降は、東院地区的利用状況を解明するために、西辺を中心に発掘調査を進めてきた。

今回の調査では、東院地区の中核建物群が位置していると推定される中核部から西北辺にかけての遺構の様相をあきらかにし、東院地区全体の空間利用の変遷を解明することを目的として、第584次調査区および第593次調査区を設定した。第584次調査区の調査対象面積は1,103m²(東西29m、南北38mおよび東北隅拡張区東西2m、南北0.5m)であり、新規調査面積は986m²である。第593次調査区の調査対象面積は969m²(東西29m、南北33mおよび東北隅拡張区東西1m、南北12m)であり、新規調査面積は882m²である。

第584次調査区は、2017年2月6日に開始し、2017年5月29日に終了した。第593次調査区は、2017年10月2日に調査を開始、2018年1月31日に終了し、埋め戻さず東隣の第595次調査(来年度に報告予定)において継続して調査にあたった。

また、個人住宅建設にともなう事前調査のため、第584次調査区の東122mの箇所に第587次調査区を設定した。調査対象面積は60m²(東西10m、南北6m)である。調査は、2017年4月24日に開始し、4月26日に終了した。

2 周辺の調査成果

第584・593次調査区の南に位置する第401・423・503

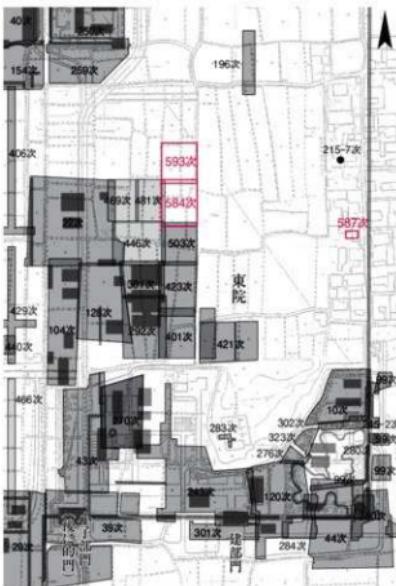


図193 第584・587・593次調査区位置図 1:4000

次調査区では、掘立柱の単廊である回廊SC18936・19600が確認され、その内(東)側には南北棟建物SB19116・18916が、柱筋を描えて同時期に展開することを確認している。これらについて、東側の東院中核部を区画する同時期(東院6期)の一連の建物群と捉えた^{1・2・3)}。こうした区画施設は、これよりも遅い時期でも位置や規模を変えて見つかっていることから、単廊により区画された東院中核部が継続的に利用されていたことが指摘される⁴⁾。なお、区画施設の東側には、複数時期の東西棟の四面廂建物や北廂建物などが見つかっている。

一方、今回の調査区の西・南西に位置する第292・381・446・469次調査区では、大小規模の総柱建物群や比較的小規模な建物が、頻繁に建て替えられながらも、時期を通じて展開することがわかっている^{5・6・7)}。出土土器の種類、量なども鑑みて、東院西辺が東院中核部のバックヤードとして機能していた可能性が示された。また、第481次調査区では、総柱建物が南辺までにとどまり、北部に展開しないことがわかった⁸⁾。加えて、北部西半では壺類の出土が多く見られたことから、西辺南部とは異なり厨や貯蔵施設の存在が推測された。

なお、第587次調査区が位置する東院地区東辺では、

これまで住宅建設とともに小規模な事前調査が少數実施してきた。今回調査区より北方の第215-7次調査区では、奈良時代整地土を検出し、その上面で西廂付南北棟建物と南北塀を検出した⁹⁾。しかし、調査面積が狭小であったことから、その全貌は定かではない。また、他にも小規模な調査区を複数設けてきたものの、顕著な遺構はなく、東辺の様相は未だあきらかではない。

3 第584次調査

基本層序

遺跡の基本層序は、調査区東部で南西から北東に走る田境の東西で堆積状況が大きく異なる。

後世の削平が比較的軽微と思われる田境東側では、表土(10cm)、整備盛土(20cm)、旧耕作土(約30cm)、床土(約15cm)、奈良時代の遺物包含層(5~10cm)と続き、さらに遺構検出面である奈良時代の上層整地土(黄褐色粘質土、5~10cm)、奈良時代の下層整地土(灰褐色粘質土、15~20cm)を確認し、地山(明黄褐色粘土)に至る(図194)。また、調査区東北隅では、上層整地土と下層整地土の間に、暗褐色粘質土からなる中層整地土の堆積が局的に認められた。

削平の激しい田境西側では、表土(約10cm)、旧耕作土・床土(約30cm)、奈良時代の遺物包含層(5cm)と続き、遺構検出面(灰白色粘土混じり明黄褐色粘土)に至る。

各遺構は、奈良時代の遺物包含層の下、田境東側では上層整地土の上面、田境西側では灰白色粘土混じり明黄褐色粘土層の上面で検出した。遺構検出面は、田境東

側で標高66.8mと高く、削平が進んだ田境西側では標高66.4mと、東側に比べて最大40cm程度低くなっている。

検出遺構

今回の調査で検出した遺構のうち、奈良時代の遺構は、掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条、溝5条、石列1条である(図195)。周辺の調査成果をふまえると、東院の遺構は6期に区分でき、今回の調査区の遺構はこのうち1~5期に区分できる⁷⁾。なお、今回の調査区では6期の遺構は確認できなかった。以下では、時期別に各遺構について概説し、つづいて現時点では時期の特定が難しい遺構と奈良時代より前の遺構について記述する。

1期の遺構(奈良時代前半)

南北棟建物SB19515 桁行10間(約29.6m)、梁行2間(約5.9m)の大型の南北棟建物。柱間寸法は、桁行・梁行ともに約2.9m(10尺)等間である。第481・503次調査区で西側柱と南妻柱は既検出であった。今回の調査区では東側柱列と北妻柱を検出し、全体の規模をあきらかにした。柱穴掘方には、東西1~1.2m、南北1.1~1.4mのやや縱長の方形を呈し、抜取は掘方の中央あるいは北寄りに認められる。なお、SB19515の柱穴の深さはいずれも、遺構検出面から1m前後である(図198-A・B・C)。

南北棟建物SB19970 SB19515の東約2.7m、調査区のはば中央で新たに検出した、身舎が桁行10間(約29.6m)、梁行2間(約5.3m)の大型の南北棟掘立柱建物。東側には出が約3.2m(11尺)の廊が付属する。柱間寸法は、桁行が約2.9m(10尺)等間、梁行が約2.6m(9尺)等間である。南妻柱は南の第503次調査区北辺において既検出

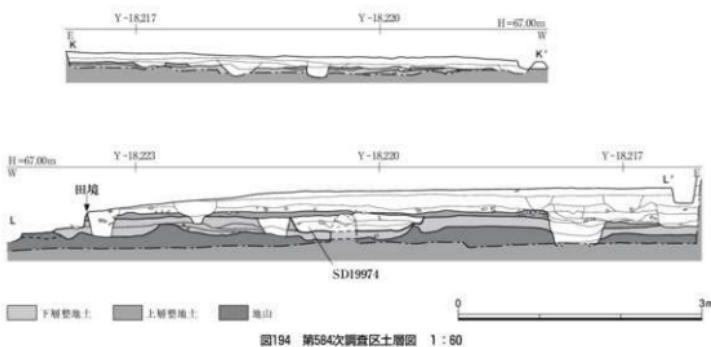


図194 第584次調査区土層図 1:60

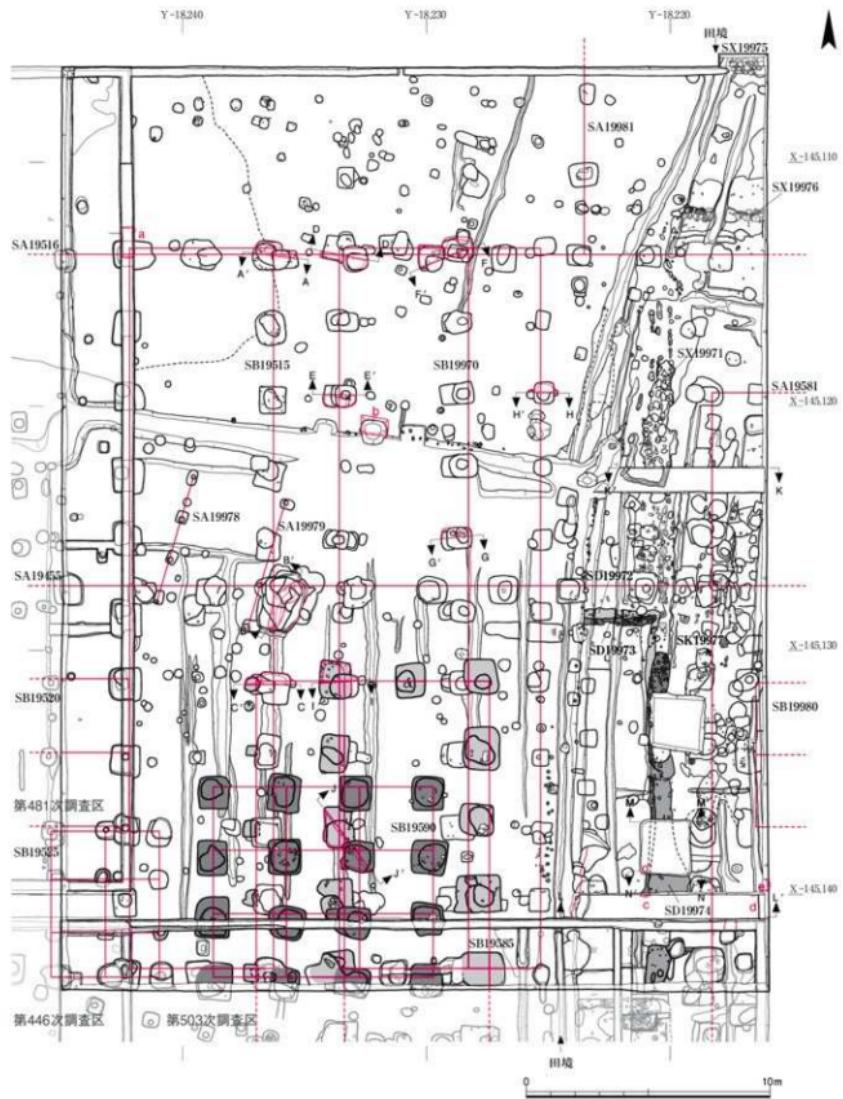


图195 第584次调查区遗物图 1:200

であった。西側柱南半は、4期のSB19585西側柱柱穴と重複している。東西の柱筋がSB19515と揃うこと、柱穴が2期のSA19516・SA19455の柱穴と重複し、それに埋められていることから、SB19515とともに1期に属すると考えられる。検出した柱穴全体の平面形は、東西12~1.5m、南北0.9~1.0mの長方形あるいは長円形を呈している。柱穴は当初、調査で検出できた柱穴輪郭全体の西側に設けたようであるが、後にこの柱穴の東半を埋め、東側にはほぼ同規模の新しい柱穴掘方を掘削し、柱を立て替えたと考えられる。なお、西側柱柱穴は遺構検出面から深さ約30cm程度と浅い一方、東側柱柱穴は深さ約50~60cm、東廻柱穴も深さ約45cmあり、西側柱柱穴よりも深い（図198-D・E・F・G・H）。

南北石列SX19971 調査区東側の奈良時代整地土上で検出した、ほぼ南北に延びる石列（図196）。SB19970東廻の約5.0m東に位置する。幅0.5~0.7mで、約13m分を検出した。北半には石は現存せず、その抜取穴を確認した。石は、30~40cm大の安山岩が主に用いられているが、20cm大の凝灰岩も一部に見られる。南半では据付掘方が確認でき、石列本体から東に0.2m、西に1.1m、全体の幅が約2.0mと広い。据付掘方には、1~2cm大の石や土器がやや多く混じる。この据付掘方が2期に属するSA19455の柱穴と重複し、それに掘り込まれていることから、この石列は1期に属すると考えられる。なお、据付掘方の西肩は、残存する石列の南端から約7.0m南に至るまで確認できた。

2期の遺構（平城遷都（天平17年、745）頃）

南北棟総柱建物SB19525 調査区西南部で検出した桁行3間、梁行2間の掘立柱の南北棟総柱建物。柱間寸法は約2.1m（7尺）等間である。西の第446・481次調査区、南の第503次調査区でも一部を検出しておらず、今回の調査で規模が確定した。

東西廻SA19516・SA19455 西の第446・481次調査区から続き、本調査区東辺までの範囲で、SA19516は16間、SA19455は22間。本調査区では各8間分検出し、さらに東に延びることを確認した。柱間寸法はともに約3.0m（10尺）等間である。なお、SA19516とSA19455の間隔は約13.6m（46尺）を測り、両者の柱筋は揃う。掘方の深さは、遺構検出面から0.9~1.3mである（図198-A・B・D・F）。



図196 南北石列SX19971検出状況（北西から）

3期の遺構（天平勝宝年間（749~757）頃）

溝SD19972 調査区東部、奈良時代整地土上で検出した、L字状に屈曲する溝（図197）。幅0.2~0.4mで、南北8.9m分、東西3.0m分を検出した。北端は、1期の石列SX19971の石材が抜き取られた後に敷かれた整地土層を掘り込んでおり、北端で西に直角に折れ曲がる。また、調査区東南の東西畦南壁でSD19972が認められないことから、南端でも西に屈曲していたと考えられる。

溝SD19973 SD19972と重複する、SD19972より新しい溝（図197）。東西部分は幅0.2~0.4mで約2.8m分を、南北部分は幅約0.2mで約9.3m分を検出した。平瓦が凸面を上にして一列に並べられているのが特徴である。元米はSD19972と同じく、石列南端で西に屈曲し、南端でも西に曲がっていたと考えられる。

南北溝SD19974 SD19973と一部が重複する、SD19973より新しい南北溝（図197）。幅0.7~1.6mで、約13.7m分を検出した。溝内には瓦や土器が多く見られ、とくに南部で幅が広くなる。SD19972・SD19973の南北部分と平行していることから、ほぼ同時期の遺構と考えられる。調査区東南の東西畦南壁ではSD19974のみ確認でき、南の第503次調査区から続くことが判明した（図194F）。

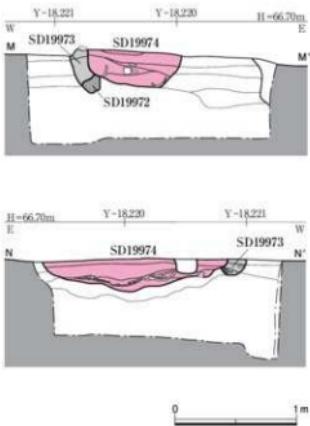


図197 SD19972~19974断面図 1:40

なお、SD19972・19973の南北部分、及び19974は、南の第503次調査区で検出した3期の壇状遺構SX19570と、東辺の位置がほぼ一致する。

4期の遺構（天平宝字年間（757～765）頃）

南北棟建物SB19585 調査区南半中央で検出した身舎が桁行9間、梁行2間の南北棟掘立柱建物。西側には扉が付属する。この西廂は、以前の調査では塀SA19583とされていた。柱間寸法は、桁行、梁行とも約3.0m（10尺）等間である。南の第503次調査区から続き、今回新たに北に3間分と北妻部分を検出したことにより全体の規模を確認した。柱穴掘方は長辺1.4～1.7m、短辺1.2～1.5mととりわけ大きく、埋土に5～10cm大の礫が多く混じる。柱穴の深さは、遺構検出面から0.65～0.9mである（図198-1・J）。

縦柱建物SB19520 調査区西南隅で検出した東西2間、南北2間の掘立柱の縦柱建物。柱間寸法は、桁行・梁行とも約3.0m（10尺）等間である。西の第481次調査区で既検出であったが、今回の調査で全体の規模が確定した。

南北塀SA19581 調査区東辺で検出した大型の南北掘立柱塀。柱間寸法は約3.0m（10尺）等間である。南の第481次調査区で8間分を検出したが、今回の調査で北に7間分延び、そこから東に折れることが判明した。

5期の遺構（天平神龜・神護景雲年間（765～770）頃）

縦柱建物SB19590 調査区西南部で検出した掘立柱の縦柱建物。柱の配置は3間四方であるが、東西方向の柱間寸法が約3.0m（10尺）等間であるのに対して、南北方向が約2.7m（9尺）等間とやや狭いため、建物全体の平面が長方形を呈している。南の第503次調査区で南半を検出しており、今回の調査で全体の規模が確定した。柱穴掘方は、東西1.2～1.4m、南北1.3～1.5mではほぼ正方形を呈する。掘方の深さは、遺構検出面から0.7mである（図198-J）。

時期未確定の遺構

調査区東部の奈良時代整地土が残存している箇所で検出した遺構の中には、時期が特定できないものも含まれている。

建物SB19980 調査区東辺南半で、柱穴3基を検出した。西側にこれと組み合う柱穴が認められないため、東側に展開する東西棟掘立柱建物の西妻部分と考えられる。掘方が一辺1.3～1.5mと大きいのが特徴である。

東西石組溝SX19975 調査区東北隅付近で検出した東西方向の石組溝。残存長約1.4m、幅約65cm。当初は高さ約15cmの南側石列のみ確認できていたが、北側を東西2m、南北0.5m拡張したところ、2石もしくは1石を配置した底石と北側石の抜取を確認した（図199）。また、南側石列から0.7m南の位置で据付掘方を検出した。据付掘方北辺は調査区外であるため確認できなかった。石材には、安山岩の他、凝灰岩、花崗岩、チャートが用いられている。

SX19975は、今回の調査区の東側に統くと考えられるため、遺構全体の規模は不明である。

東西石組溝SX19976 調査区東北隅付近で検出した東西方向の石組溝。残存長約3.3m、幅0.5～0.6m。高さ約10cmの北側石列とその抜取穴を検出したが、南側では側石とその抜取穴はいずれも検出されず、5～10cm大の礫のみ断続的に列をなしている様相であった。また、側石列から1.2m北、0.4m南の位置で、幅約2.2mの据付掘方と思われる掘り込みを検出した。この埋土には直径1～2cm程の石や土器がやや多く含まれる。なお、SX19975とはほぼ東西方向に平行しており、SX19975とSX19976の心向間の距離は約6.0m（20尺）である。石材には、安山岩の他、凝灰岩、花崗岩、チャートが用いられている。

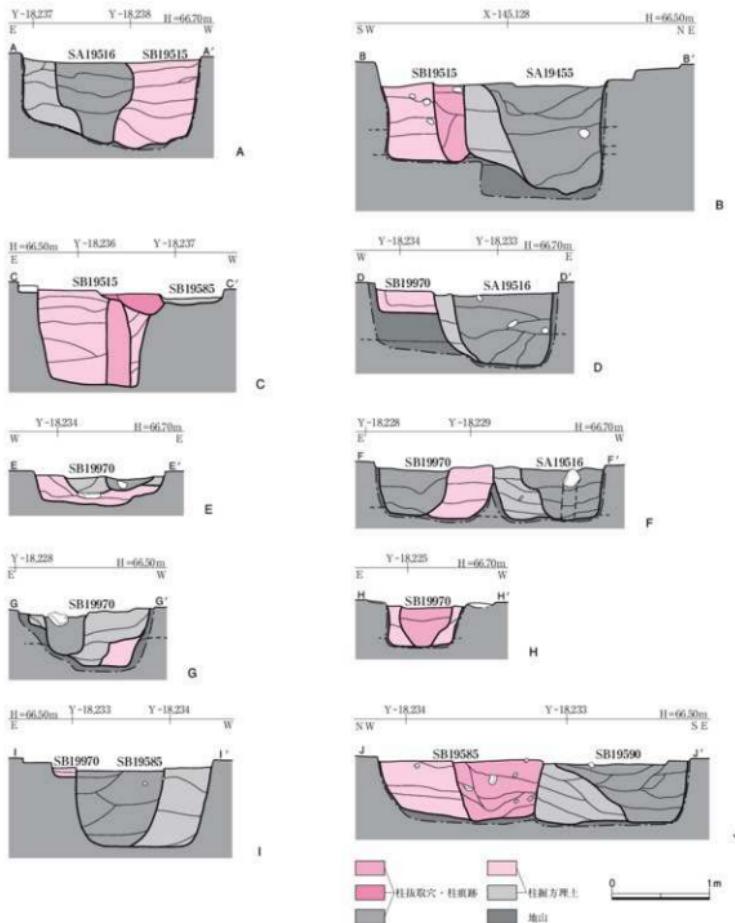


図198 第584次調査区柱穴断面図 1:50

SX19976は、今回の調査区の東側に続くと考えられるため、遺構全体の規模は不明である。

土坑SK19977 調査区東部中央のやや南寄りで検出した小土坑。東西0.7m、南北0.8mであり、南北に長い長円形を呈する。4期の堀SA19581の柱穴の北側を一部壊

していることから、4期以降に掘削されたと考えられる。また、上層整地土から掘り込まれていると思われる。なお、SK19977埋土上層からは、杯Aや椀A・Cなどからなる土師器の供膳具が比較的まとまって出土した。断割調査を実施しておらず、また、この土坑と組み合う他



図199 東西石組溝SX19975検出状況（北東から）

の土坑を確認できていないので、SK19977の時期・性格は不詳である。

奈良時代より前の遺構

斜行堀SA19978 検査区西部中央で検出した、北で約16度東に振れる堀。3間分を検出した。柱間は約1.8m(6尺)。同様の斜行堀は第481・503次調査区でも確認できる。

斜行堀SA19979 検査区西部中央で検出した、北で約16度東に振れる堀。北から2穴目がSB19515の東側柱柱穴により壊されて認められないが、3間分を検出した。柱間は約1.8m(6尺)。SA19978の東約3.8m(13尺)に柱筋を描えて平行する。

出土遺物

土器・土製品 本調査では、整理用コンテナ26箱分の土器が出土した。その多くは遺物包含層出土の土器であり、遺構に伴うものは少ない。小片がほとんどを占め、口径の大半が復元できたものはごく僅かである。奈良時代の土器がほとんどを占めており、古墳時代の土器および中近世の土器・陶磁器も少なからず混じる。奈良時代の土器は、総じて須恵器が多く、土師器が少ない。また、須恵器・土師器とともに、壺・甌類に比して杯・皿類が卓越する。なお、土師器は遺存状態が悪く、表面が剥離し

極めて脆くなっているものがほとんどであり、器面調整の観察が概して容易ではない。以下では、数少ない遺構出土土器を中心に示す(図200)。

1～5は、奈良時代前半(1期)の遺構から出土した土器である。1・2はSB19970出土土器。1は、東側柱掘方から出土した須恵器皿A。器壁が厚いのが特徴である。底部外面と口縁部外面下半にはロクロケズリ調整が施されている。また、口縁部外面下位には、一条の水平沈線状の凹みが廻る。復元口径28.0cm。2は、東側柱掘方から出土した土師器皿A。口縁部は、やや丸みを帯びた平底の底面から、緩やかに曲線を描いて立ち上がる。外面調整はb0手法と思われる。復元口径21.2cm。3～5はSB19515出土土器。3・4は、東側柱抜取穴から出土した須恵器。3は杯B蓋。頂部外面中心にはつまみが付いていたが根元から欠損している。頂部外面にはロクロケズリ調整が施される。口縁部外面には、重ね焼きによる他の須恵器口縁部の剥離痕がわずかに残る。復元口径16.4cm。4は鉢A。口縁端部はやや外傾した平坦面をなす。外面全体には、水平方向にやや幅の広いヘラミガキが断続的に施される。復元口径25.2cm。5は、東側柱掘方から出土した土師器皿A。口縁部は上位で外反し、口縁端部は内面に巻き込んで丸くおさまる。外面調整はb0手法と思われる。復元口径19.4cm。

6～18は、奈良時代後半(2期以降)の遺構から出土した土器である。6はSA19516柱抜取穴から出土した須恵器皿B。口縁部は短いがやや斜め上方にまっすぐ立ち上がる。底部外面外寄りに、やや低い高台が取りつく。復元口径23.4cm。7・8はSB19585柱穴出土土器。7は北妻柱掘方から出土した須恵器杯B蓋。頂部から口縁屈曲部手前にかけて、ロクロケズリ調整が施される。復元口径20.0cm。8は東側柱掘方から出土した土師器皿A。口縁部は、平坦な底部からやや斜め上方に若干内湾気味に伸びた後に外反する。口縁端部は内側に巻き込み丸くおさまる。復元口径20.2cm。9～11はSA19581柱穴から出土した須恵器。9は柱穴掘方から出土した杯B蓋。頂部には、ロクロケズリ調整が施される。復元口径15.4cm。10・11は柱抜取穴から出土した。10は杯A。やや薄手の口縁部は、平底の底部から斜め上方にまっすぐ立ち上がる。口縁端部は内傾する平坦面をなし、外面側斜め上方にわずかに突き出る。復元口径13.8cm。11は杯C。口縁

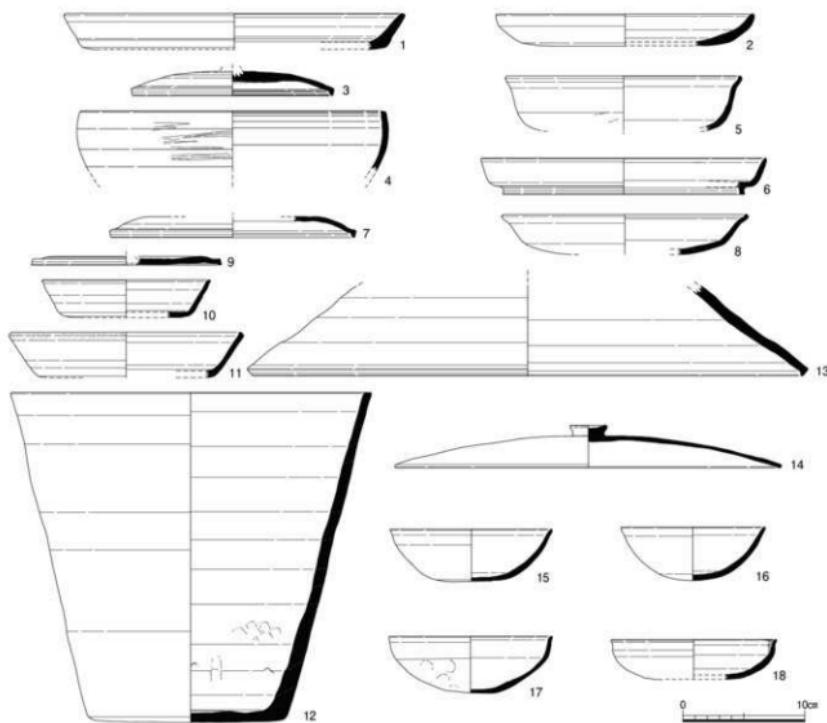


図200 第584次調査出土土器 1:4

端部は内側にやや肥厚し、小さく突き出る。復元口径19.2cm。12・13はSB19590柱抜取穴出土土器。12は西側柱抜取穴から出土した須恵器鉢E。口縁端部はやや内傾する平坦面をなす。口縁部上位にはロクロナデ調整が明顯に残る。復元口径29.6cm。13は東側柱抜取穴から出土した土師器大型蓋。深い笠形を呈すると思われ、なだらかな弧を描きながら斜め下方の口縁に至る。口縁端部は下方や内側に小さく折り曲げる。復元口径46.0cm。14～17はSK19977から出土した土師器である。14は皿B蓋。口縁端部は内側に巻き込んでやや肥厚し、丸くおさまる。頂部中心には、上部が凹面をなすボタン状のつまみが取りつく。復元口径31.8cm。15・16は椀A。口縁直下はやや強めになでられており、口縁部上端がわずかに外

反する。外面調整はe0手法と思われる。15は口径13.3cm、16は復元口径11.8cm。17は椀C。口縁直下はやや強めになでられており、口縁部上端がわずかに外反する。口縁端部は内傾する面をなす。外面調整はe0手法である。口径13.4cm。

18は、調査区南東の奈良時代上層整地土上面から出土した土師器杯C。口縁端部は内傾する面をなす。外面調整はa0手法と思われる。口縁部上端から内面にかけて、一部で煤痕が残ることから、灯明皿と考えられる。復元口径13.6cm。

上記のほか、圓足円面硯の脚柱部小片1点、皿B蓋を用いた転用硯1点が出土した。いずれも遺物包含層からの出土である。

(山藤正敏)

瓦磚類 本調査区で出土した瓦磚類は表32に示した。以下に残存状況のよい資料を図示する(図201)。1は631Ba(II-1期)、2は6282E(III-1期)、3は6151A(IV-2期)、4は6663A(II-2期)、5は6760A(IV-2期)である。出土した軒瓦の時期をみるとII-1期～IV-2期と幅があり、各型式とも出土数が少なく、主体となる軒瓦の組み合わせや建物と所用軒瓦の関係をあきらかにすることはできない。

本調査区の軒瓦の100mあたりの出土比率をみると、軒瓦32点となる。総瓦葺きの建物が並ぶ平城宮第一次大極殿院地区が120点、第二次大極殿院地区が90点、

皮葺き建物が多いと想定される内裏地区でも119点である¹⁰⁾。丸瓦、平瓦の100mあたりの出土比率は、本調査区が丸瓦7.1kg、平瓦32.1kgあるのに対し、総瓦葺きである平城宮朝集殿院南門が丸瓦40.2kg、平瓦100.0kg¹¹⁾、第一次大極殿院西棟が丸瓦45.3kg、平瓦161.8kg¹²⁾である。廃都後の土地利用の違いもあり、概にはいえないが、以上の数値をみると、本調査区に総瓦葺き建物が存在した可能性は低く、檜皮葺きで堂宇の建物を想定することも難しい状況である。

(今井晃樹)

自然科学分析

本調査では検討課題として、東院の基盤となる1)奈良時代の下層整地土およびその下位の地山と認識される堆積層と、2)第584次調査区西北部および第593次調査区西部にみられる砂礫層の堆積環境についての2点が、発掘調査の成果から挙がってきた。いずれも東院地区的造営に関わる問題であると同時に、平城宮造営以前の旧地形が造営にともない、あるいはそれ以前にどのように改変されたのかを解きあかす重要な鍵となる。また地山の改変とその後の地業手法への理解は、平城宮造営プランや土木技術などを実証的に検討するための有意義な知見となるものと考えられる。

課題1とした奈良時代の下層整地土およびその下位の地山は、発掘調査担当者から「虎縞」、「縞々」と呼称され、土色相の変化に合わせ整地土を灰褐色粘土質土、地山を明黄褐色粘土として分層している(図194)。露頭観察からこの土色相の変化は、基質となる明黄褐色の砂質泥層～混雑砂質泥層と灰色～灰褐色混シルト砂層との互層において、基質の層厚が厚くなると地山として、薄くなると整地土として判別されていることがわかった。しかし詳細に露頭観察をおこなうと、2つの層はけっして互層ではなく、基質の中を灰色～灰褐色混シルト砂が段違いに貫通している様相がみられ(図202)、一般的な自然堆積構造とは異なる可能性が出てきた。一方、課題2とした砂礫層の堆積は、その堆積環境について度々議論がおこなわれてきた。露頭観察に基づく地質学的な所見からは、砂礫の堆積構造にいくつかのグループがあり、その堆積環境は自然の營力によるものとそれ以外のものに分かれることができた。しかし2つの異なる營力による堆積層は隣接しており、その区分は複雑な構造を示した。これは旧地形を人が改変する際によく発生する。

表32 第584次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			軒桂瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数
6135	A	1	6663	A	1	時代不明		1
6144	A	1		B	1			
6151	A	1		?	1			
6282	E	1	6664	D	1			
6311	Ba	1		F	1	計		1
巴(近世)		1	6721	?	2	その他		
型式不明(奈良)	II	6760	A	1	平瓦(模印)	1		
時代不明	1		B	1	模印瓦	1		
				3	用途不明道具瓦	1		
				2	磚	3		
計		18	計		14	計		6
	丸瓦		平瓦		磚	難燃瓦		レンガ
重量	70.236kg	317.247kg	10.862kg	0.173kg	0			
点数	880	6754	7	3	0			

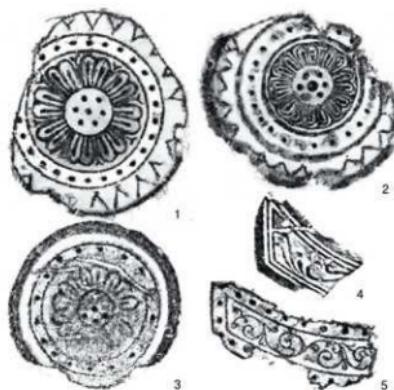


図201 第584次調査出土瓦 1:4

このため系統的に砂礫層を類別化し、その分布や構造を検討することで東院地区の基盤についての理解が深まる可能性が出てきた。

今回は、課題1について新たな知見が得られたため報告する。課題2については引き続き分析をおこない、第593次調査の詳細な検討とあわせ改めて報告をおこなう予定である。

試料と方法 試料は、第584次調査の断面a～eで鉛

表33 採取試料の位置と試料番号一覧

断面番号	壁面	試料番号	断面番号	壁面	試料番号
a-a'	東壁	① ② ③ ④ ⑤	d-d'	東西壁	① ② ③
b-b'	南壁	② ③ ④ ⑤	e-e'	東壁	② ③
c-c'	西壁	② ③			
	南西壁	①			

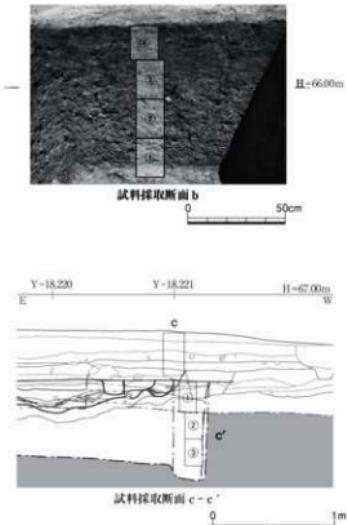


図202 地質切取箇所 (b・c-c')

直方向に採取した地質切取試料を用いる(図195、表33)。本報告では、このうち断面bと断面c-c'の堆積構造について検討する。試料の採取にあたっては、露頭において堆積構造を十分に観察したあと、14×22×4cmのスチロール角型ボックスを用いて堆積層を切り出した。試料は研究所に持ち帰り、層相観察、層相の写真撮影をおこなったあと、フジフィルム社製軟X線撮像装置(μFX-1000)とイメージングプレートを用いて地質構造の撮像をおこなった。イメージングプレートのスキャンにはフジフィルム社製BAS-5000を用いた。

結果 断面bと断面c-c'から採取した地質切取試料の層相観察からは、どちらも基質となる明黄褐色砂質泥層・混雑砂質泥層の中を、灰色～灰褐色混シルト砂が段違いに貫進する。この灰色～灰褐色混シルト砂は、い

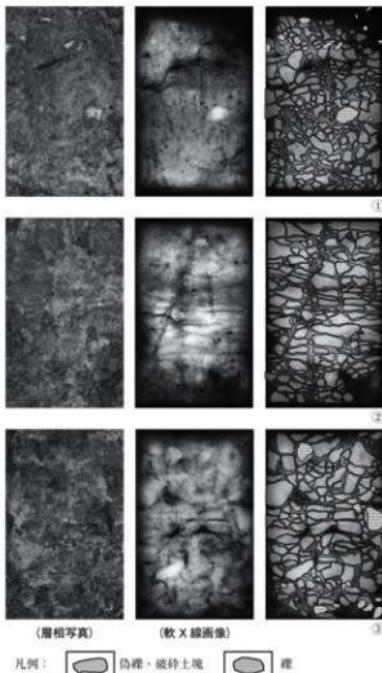


図203 c-c'断面の地質切取試料の堆積構造

ずれも細かくは羽状構造、ロード構造がみられ、液状化にともなう脱水による砂脈であることがわかる。この液状化は地下水位の比較的高い軟弱地盤において、震度5弱以上の大規模な地震などにより発生することが一般的に知られている。さらにこの砂脈が貫進した基質は、砂脈などにより粉碎された土塊を含め、ほぼ偽礫の集積からなっていることがあきらかとなった。すなわち今回報告をおこなう断面からは、いわゆる自然堆積層は見当たらず、整地土がその築造工程を示すだろう盛土構造ごとに液状化によって浮き上がり、分断化されてきたと考

えられる。以下に、堆積構造として本来の構造をよりとどめている断面c-c'から順に断面ごとに得られた堆積構造の見についてまとめた。

断面c-c' (図203) 一部に礫を挟在するものの、基質はほぼ明黄褐色砂質泥層からなる。軟X線像からは、この基質の薄層が何層も堆積していることがわかる(図203②~③)。さらに試料③下部~中部、試料②中部をみると、灰色~灰褐色混シルト砂は一見、基質との互層を形成しているように見える。しかし試料③右側や②中央から左側にかけて砂脈が貫進し、貫進する付近の偽礫は小片に粉碎されていることが観察され、互層構造ではなく段違いな網目状構造を形成していることがわかる。このような構造は、試料全体を観察すると、あらゆるところで発生しており、先ほど示した互層は成立していない。その構造は試料①で顕著である。

これらの結果から、まず地山とした調査区基盤土は、本来上位の奈良時代の下層整地土と一連の堆積物であると考えられる。さらに調査現場での目視観察において互層構造と考えられた構造は、元来は整地構造の一部を成していた可能性もあるが、現状では液状化にともなう砂脈となっていることがわかった。

断面b (図204) 断面c-c'に較べ基質に礫を多く含む。この礫の分布は、不明瞭ではあるが全体の傾向として水平的に並ぶように堆積している。しかし級化もしくは逆級化構造、あるいはトラクションカーベット構造はともなわず、どちらかというと基質土に混在しているようである。基質は断面c-c'で観察されたものよりも小片化し本来の構造は捉えにくい。試料②上部~試料④中部の偽礫の配列には、基質の薄層が累重する様相がわずかに認められる。灰色~灰褐色混シルト砂はこの基質をなす偽礫の間を網目状に貫進しており、液状化によって堆積構造が崩壊している様子が認められる。特に最下部となる試料①では、基質がかなり小片化し液状化体に飲み込まれている様相がみられる。

これらの結果、断面c-c'同様に断面bにおいても、まず地山とした調査区基盤土は、本来上位の奈良時代の下層整地土と一連の堆積物であると考えられる。さらに調査現場での目視観察において互層構造と考えられた構造は、元来は整地構造の一部を成していた可能性もあるが、現状では液状化にともなう砂脈となっていることが

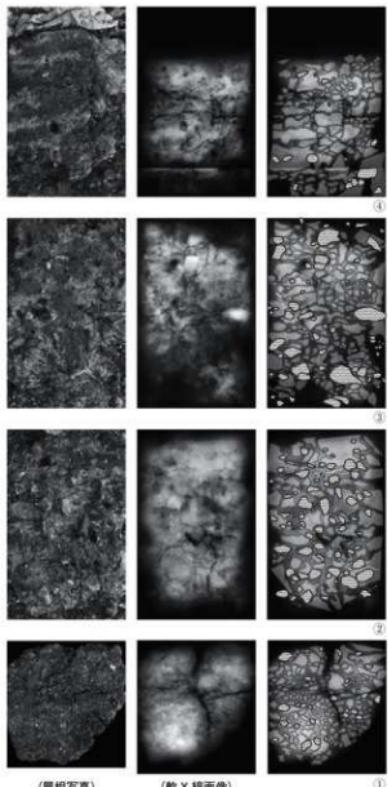


図204 b 断面の地質切取試料の堆積構造(凡例は図203と同じ)

わかった。

地震痕跡としての評価 今回、液状化にともなう砂脈が、発掘調査所見による少なくとも地山および奈良時代の下層整地土を貫通していることが認められた。しかしこれらの砂脈が当時の地表面に達した際に形成する噴砂の形跡は認められていない。このためこの液状化を引き起こした震度5弱以上の大地震は、奈良時代以降に発生したものとまではあきらかとなつたが、それ以上のことは不明である。今後も周辺発掘調査の成果と合わせ検討をおこなっていきたい。
(村田泰輔)

東院1期南北棟建物について

今回の調査では、1期の南北棟掘立柱建物SB19515・SB19970を調査区中央で検出した。これらは、柱間約27m(9尺)の間隔で柱筋を揃えて建てられており、今回の調査で新たに検出した東のSB19970には東廂が付く。このような規模・タイプの建物は、これまでの東院地区西辺の調査ではあまり知られておらず、その性格は不明である。そこで以下では、今回の調査区で見つかった2棟の併存可能性と建築時期差について考察し、平城宮内の同規模の建物をまとめ、今後、同種の建物の機能や性格に迫るための材料としたい。

建物の併存可能性と建築時期差 SB19515・SB19970が併存していた可能性を否定する積極的な証拠は認められない。特に、両建物が柱筋をはば揃えて建てられているということは、両者の併存をむしろ肯定する事実である。また、SB19515の東廂柱列とSB19970の西廂柱列(西側の古い柱穴)の間には9尺という狭い間隔しかないが、2棟が併存した際の軒の出について建築上問題は生じない。したがって、SB19515・SB19970は、少なくともある一時期は併存した蓋然性が高いといえる¹³⁾。

とはいって、SB19515・SB19970の間には建築時期差が想定される。そこで以下では、いずれの建物が先行していたのかについて検討しておきたい。SB19515・SB19970の柱穴は重複関係にないため、遺構の新旧から建築順について議論することは難しい。そこで、周囲の建物にも目を向けて考えてみる。北の第593次調査区で検出した東西棟掘立柱建物SB19999(桁行・梁行10尺等間、後述)の西妻柱列はSB19515の西廂柱列と、また、SB19515の北妻柱はSB19999の南廂柱と柱筋を揃えており、両者は同時期に建てられたと考えられる。一方、

SB19970の梁行は9尺等間であり、その東西廂柱列および妻柱はSB19999の南廂柱と柱筋が揃わない。ところで、SB19970の身舎の柱穴は、西側の古い柱穴掘方を東側の新しい柱穴掘方が壊しており、SB19970は後になつて1尺ほど身舎の柱を東にずらして建て替えられたと考えられる。これにより、SB19970の新しい西廂柱列はSB19999の南廂柱と柱筋が揃うこととなる。以上の状況に鑑み、SB19970はSB19515・SB19999に先行して建てられたと推測することができる。元来存在したSB19970の周間にSB19515・SB19999が新しく建てられた後に、SB19999に西廂柱列だけでも揃えるためにSB19970を建て替えたのではないだろうか。

上記にもとづき、推測される建築順について以下にまとめる。まず、東廂が付かないSB19970が単独で建てられた。次いで、SB19970の西隣に柱筋を揃えてSB19515が建てられ、また、SB19515と柱筋を揃えたSB19999が北に建てられた。このSB19999の南廂柱に西廂柱列を揃えるために、SB19970が1尺ほど東に建て替えられ、それと同時に東廂が取り付けられたと考えられる。なお、最終的にSB19515とSB19970が併存していた蓋然性は高いが、今のところ確証はない。

同規模建物の類例 平城宮跡内におけるこれまでの調査で、桁行9間以上12間以下、梁行2間の南北棟掘立柱建物を23棟検出している(表34)。これらの建物は宮内に広く分布するが、このうち9棟は東院地区で検出しており、他の地区に比べて多いといえる。時期は、奈良時代前半が9棟、奈良時代中頃が3棟、奈良時代後半が10棟、時期不詳が1棟あり、奈良時代の前半と後半いずれの時期にも建てられていたことがわかる。

これらの建物の半数超は桁行が奇数間(9間あるいは11間)であるが、桁行偶数間(10間あるいは12間)の南北棟掘立柱建物も10棟が認められ、このことは偶数間の南北棟掘立柱建物が必ずしも変則的なつくりではなかったことを示している。これらのうち、桁行10間の南北棟掘立柱建物は、今回の調査区で検出したものを含めて7棟である。なお、北方官衙で検出したSB9900Bは、SB9900Aの建て替えであり、両者ともに一部または全部が床張りである。また、今回の調査区で検出したSB19515・SB19970のように、第二次大極殿東外郭のSB6700・SB6701(奈良時代後半)は桁行・梁行ともに約30m(10尺)

等間であり、柱間を揃えて東西に並び建つが、両者の間隔は約6.0m（20尺）と若干広い。さらに、いずれの建物にも廟は付属せず、今回の調査区のSB19515・SB19970とはやや趣が異なる。馬寮からも桁行10間、梁行2間の南北棟掘立柱建物が1棟見つかっているが、桁行9.5尺等間、梁行11尺等間と他類例に比べてやや変則的な寸法である。

次に、南北棟掘立柱建物の立地について考えてみたい。建物の宮内での分布をみると、その多くが官衙地区や居住空間に配置されていることがわかる。とくに、東西に狭隘な地区（東院・北方官衙・内裏外郭・第二次大極殿東外郭）に南北棟建物が多く、有効な空間利用を意図して建てられていたと推測される。また、桁行10間以上の

偶数間の南北棟建物は、東院の他には官衙地区に主に造られている。上記の例外は東区朝堂院の下層東二・三堂建物（SB12930・SB13650）であるが、これらは奈良時代前半に下層朝堂院を構成する建物であり、空間構成上、また機能的にも異なる性格をもつ。

以上、東院1期の南北棟掘立柱建物SB19515・SB19970が一体の建物ではなく、両者の間に建築時期差があった可能性を示した。これらの南北棟建物の機能や性格については、上記の類例に今後の周辺調査区や宮外の成果もあわせ引き続き検討していきたい。（山藤）

表34 平城宮内における南北棟掘立柱建物（桁行9間以上12間以下・梁行2間）

No.	地 区	調査次数	遺構番号	時 期	桁行(間)	梁行(間)	桁行(m)	梁行(m)	間	備 考	文 献
1	東院	481, 503, 584	SB19515	奈良時代前半	10	2	296	5.9	-	桁行・梁行約30m（10尺）等間	「紀要 2012」162頁。 「紀要 2018」。
2	東院	584	SB19970	奈良時代前半	10	2	296	5.3	東 東	桁行約30m（10尺）等間。 梁行約2.7m（9尺）等間。 廻出約33m（11尺）	「紀要 2018」。
3	東院	43, 270	SH5750	奈良時代前半	9	2	-	-	東	桁行10尺等間。 梁行9尺等間。 廻出	「平城 1997- III」15-16頁。
4	東院	104	SB8580	奈良時代中頃	11	2	-	-	東	桁行9尺等間。 梁行10尺等間。 廻出9尺	「昭和52平城報」11-12頁。
5	東院	104	SB8570	奈良時代中頃	8以上	2	-	-	-	桁行・梁行10尺等間	「昭和52平城報」11頁。
6	東院	446, 469	SB19250	奈良時代後半	9	2	-	-	-	桁行・梁行約30m（10尺）。 砂石建物 の可能性	「紀要 2011」164頁。
7	東院	503, 584	SB19585	奈良時代後半	9	2	266	6.0	西	桁行・梁行約30m（10尺）等間	「紀要 2014」133頁。
8	東院	110	SB9072	奈良時代後半	9	2	-	-	-	桁行2尺等間。 梁行7尺等間。 東西棟 建物SB9071の東、氣面大治穴	「平城報告」46頁。
9	東院	43, 270	SB5730	奈良時代後半	9	2	-	-	-	桁行・梁行2尺等間。 梁行9尺等間。 西陽殿	「平城 1997- III」17頁。
10	北方官衙	129	SB9900A	奈良時代前半	10	2	-	-	-	桁行・梁行9尺等間。 廻出9尺。 身寄	「昭和56平城報」5頁。
11	北方官衙	129	SB9900B	奈良時代後半	10	2	-	-	西	西面1/2分のみ体張り。 SB9900Aの建 てた。	「昭和56平城報」6頁。
12	内裏	12	SB650	奈良時代前半	9	2	265	-	-	桁行・梁行10尺等間。 内裏正殿東第二 殿脇	「平城報告」40頁。
13	内裏外郭	13西	SB960	奈良時代前半	11	2	32.45	5.9	-	桁行・梁行2.95m（10尺）等間	「平城報告」40頁。
14	内裏外郭	33	SB4290	奈良時代後半	12	2	-	5.94	-	2.5間南に柱筋を揃えてSB3530が建つ。	「平城宮第28, 29, 33次発掘調査概 観」。
15	内裏外郭	33	SB3530	奈良時代後半	9	2	-	5.94	-	2.5間北に柱筋を揃えてSB4290が建つ。	「平城宮第28, 29, 33次発掘調査概 観」。
16	第二次大極 殿東外郭	70南	SB6700	奈良時代後半	10	2	-	-	-	桁行・梁行約30m（10尺）等間。 6.0m 東:CS8670154間向拠柱を除いて並び建つ。	「平城宮第69・70次発掘調査概報」 7頁。
17	第二次大極 殿東外郭	70南	SB6701	奈良時代後半	10	2	-	-	-	桁行・梁行約30m（10尺）等間。 6.0m 西:CS8670052柱間を揃えて並び建つ。	「平城宮第69・70次発掘調査概報」 7頁。
18	東区朝堂院	173	SB12930	奈良時代前半	12	2	36	6.0	西	桁行・梁行約30m（10尺）等間。 廻 出約30m（10尺）。 東第二堂下刻	「昭和61平城報」4頁。
19	東区朝堂院	203	SB13630	奈良時代前半	12	2	-	-	西	桁行・梁行2尺等間。 東第三堂下刻	「昭和61平城報」21頁。
20	中央区朝堂 院内庭	376	SB18664	時期不詳	9	2	-	-	-	桁行・梁行約22m（8.5尺）	「紀要 2005」90頁。
21	中央区朝堂 院東外郭	185	SB13124	奈良時代前半	9	2	267	6.0	西	桁行8間約3.0m（10尺）等間。 廻 出1.4m約2.7m（9尺）。 梁行約3.0m（10 尺）。 廻出約2.7m（9尺）	「昭和62平城報」7頁。
22	大納戸	4	SB176	奈良時代後半?	9	2	-	-	東西	桁行10尺等間	「平城報告」8頁。
23	馬寮	32	SB1672	奈良時代中頃	10	2	286	6.6	-	桁行9.5尺等間。 梁行11尺等間。 東陰地	「平城報告」37頁。

4 第593次調査

基本層序

地表から表土・整備盛土（厚さ0.1~0.3m）、旧耕作土・床土（0.1~0.4m）、遺物包含層（疊混じり褐色粘質土、約0.1m）が堆積し、調査区北部では砂礫混じりの褐色土、南部で

は褐色粘質土の地山に達する。調査区西南部では、小礫が多く混じる褐色砂質土による奈良時代の整地土が薄く遺存していた。遺構検出は奈良時代の整地土および地山上面でおこなった。遺構面の標高は66.2~66.6mである。

検出遺構

奈良時代の掘立柱建物・塀、溝、井戸などを検出した

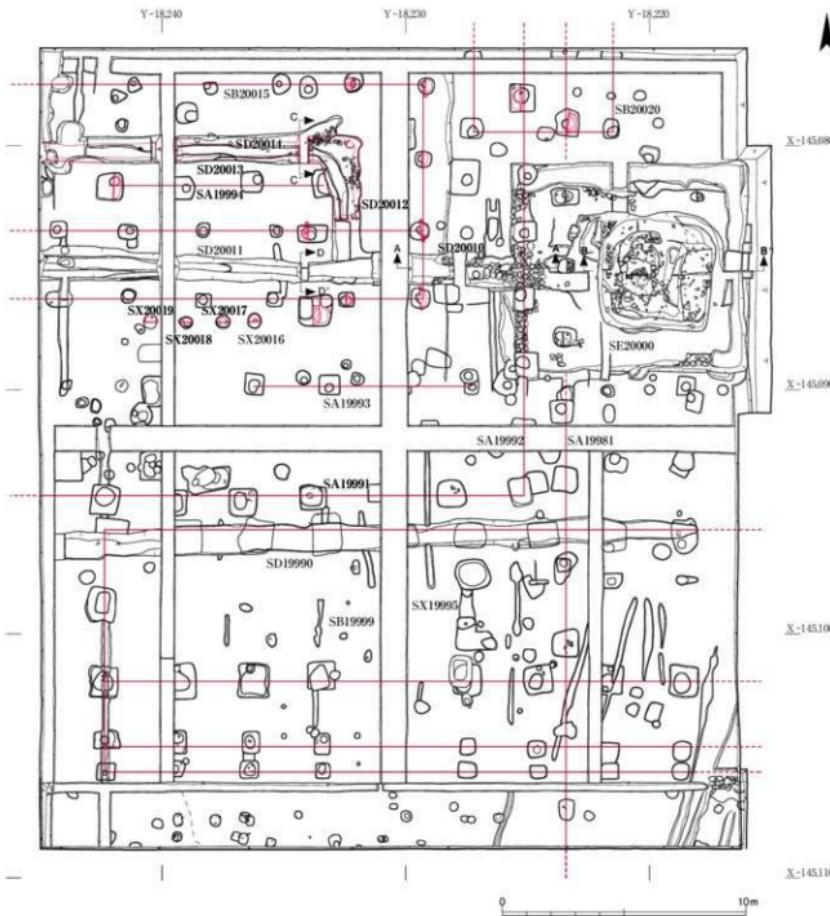


図205 第593次調査区遺構図 1:200

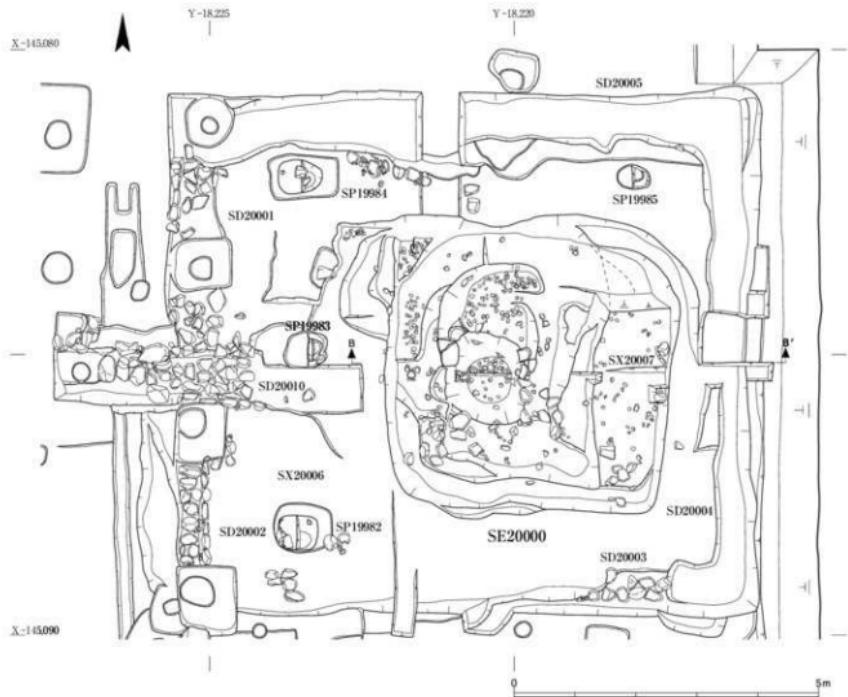


図206 井戸SE20000造構図 1:80

(図205)。これらの造構は数時期に区分できるが、既調査区で検出した造構と連続または重複する造構が少なく、従来の東院地区の調査で把握されてきた6時期の造構区分とは対応が難しいため、各造構の柱配置と重複関係に基づいてA～D期に区分した。A期は奈良時代前半、B～D期は奈良時代後半から末期に位置づけられる。

A期の造構

東西棟建物SB19999 調査区南部で検出した東西9間以上、南北2間の東西棟建物。調査区の東方に続く。一部の柱穴で添床とみられる小穴を確認したことから、床張りの建物であったと考えられる。柱間寸法は約3.0m(10尺)である。身舎の柱掘方は一辺12～14m、深さ0.6～1.0m。身舎南側柱列の南方約2.7m、3.6mに二条の東西柱穴列があり、南面廂と床東など一連の建物を構成する造構とみられる。これらの柱穴は一辺0.7～0.8m、深さ0.3～0.4mで、南の柱穴列がやや深い。一部の柱穴を断ち切った結果、建て替えの可能性が考えられたため、第595次調査で引き継ぎ調査を継続している。

東西堀SA19993 調査区中央部で検出したSB19999と

柱筋を揃える東西堀。3間分を検出した。柱掘方は一辺0.6～0.8m。

東西堀SA19994 調査区西北部で検出したSB19999と柱筋を揃える東西堀。3間分を検出した。後述するSD20012と重複し、SA19994が古い。柱掘方は一辺0.9～1.1m、深さ約0.4mである。

B期の造構

南北堀SA19981 調査区東部で検出した南北堀。調査区東北部では後述するSE20000により壊されており、SE20000の北では1間分、南では7間分を確認した。南端は第584次調査で検出した東西堀SA19516と接続する。掘方は一辺約0.6mと一辺約1.1mの2者があり、不揃いである。また柱間寸法も等間ではなく約3.3m(11尺)と約3.6m(12尺)の2者がある。

C期の造構

井戸SE20000 調査区東北部で検出した大型の井戸(図206)。井戸枠を据えるための掘方と、周囲に石組溝を配する掘方外周の空間から構成される。

井戸枠掘方は一辺約4.6mの平面方形である。後述す

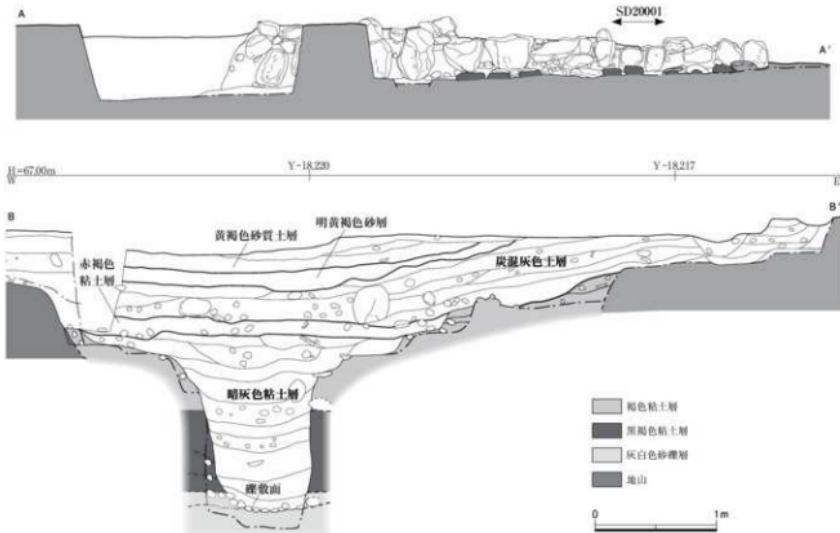


図207 東西溝SD20010B 北壁立面図(上)・井戸SE20000 断面図(下) 1:40

るよう、調査は井戸枠抜取穴のみにとどめたため、掘方の深さは確認していない。抜取穴底面（標高64.2～64.3m）で、径3～10cmの礫を敷いた直径約0.7mの円形を呈する面を検出した（図207下）。この礫敷面が井戸枠据付となる掘方埋土内へと続くこと、礫敷面下位には灰白色砂礫層が少なくとも約10cmは続くことを確認した。灰白色砂礫層からは奈良時代に属する須恵器片が出土した。抜取穴の壁面観察によると、礫敷面の上位には黒褐色粘土が標高65.1m前後まで、褐色粘土が標高65.4m前後まで積まれている。褐色粘土の上面には人頭大の石が据えられており、石の上端は標高65.5～65.6mではほぼ揃う。抜取穴の東では、拳大の礫が混じる褐色粘土を積み、ステップ状に高まる段（SX20007）を検出した。標高約65.7mでは東西幅約0.5m、標高約66.0mでは東西幅約1.0mで掘方東面（標高約66.3m）に達する。SX20007上面では、炭混じりの灰色砂質土を埋土とする径0.2m前後の不整形の小穴を検出した。

井戸枠の抜取穴は掘方中央西寄りで検出した。東西約13m、南北約1.5mの不整円形の平面プランを呈し、西北部が広がる。井戸枠は完全に抜き取られており、関連する木材も出土していない。抜取穴周囲では、東面と南面で上述の人頭大の石を検出したが、西面と北面では石は遺存せず、径0.2～0.5mの複数の凹みを検出した。抜

取穴は礫敷面直上から人頭大の石が据えられた標高65.5m付近まで暗灰色粘土層が堆積し、ここから土器や木簡・木片・檜皮片が出土した。さらに上位では赤褐色系の粘土が厚さ約0.2m、炭・礫石・瓦混じりの土（炭混灰色土）が0.2～0.4m、遺物の僅少な明黄褐色砂質土（明黄褐色砂）が約0.1m、しまりの良い黄褐色砂質土が約0.2m堆積し、掘方全体が埋められている。赤褐色粘土層は抜取穴付近が高まり土饅頭状を呈していた。炭混灰色土層と明黄褐色砂層は東から西に向けて堆積し、黄褐色砂質土層は水平を指向する。

井戸枠掘方の周囲では、東西約9.5m、南北約9.0mの方形の範囲が深さ約0.3m掘り込まれている。掘り込みの四周に石組溝SD20001～20005を巡らせ、西辺中央には後述する東西溝SD20010が接続する。西辺北半の石組溝SD20001は両側石が据えられており、幅約0.5m、深さ約0.1m。SD20002は東側石のみで、幅約0.5m、深さ約0.1m。1カ所のみ側石の代わりに磚が用いられている。南辺のSD20003は側石が抜き取られており、底石が一部残る。東辺・北辺のSD20004・20005は、側石と底石が布掘り状に完全に抜き取られている。また、石組溝と井戸枠掘方との間には、拳大の礫が多く分布し、これを灰黄色砂質土が覆う（SX20006）。調査時の観察では、灰黄色砂質土は水はけがよく、乾燥するとよくしまる特徴が

認められた。井戸枠掘方の北面では上面が平坦な人頭大の石列を検出した。石の上端は標高約66.6mである。SX20006上面では4基の穴(SP19982~19985)を検出した。径0.5~0.7mの不整円形を呈し、深さ0.2~0.4mで、黄褐色土で埋める。

以下、SE20000の構造を復元する。井戸枠抜取穴底面で検出した礫敷面が、本来の井戸枠底面に相当すると考えられる。礫敷面より下位の灰色砂礫層から奈良時代の須恵器が出土したことから、灰色砂礫層は地山ではなく掘方理土にあたり、掘方底面から礫敷面まで砂礫層を構築した後、井戸枠を据えたと考えられる。抜取穴底面の礫敷面が直径約0.7mの円形を呈していたことから、井戸枠は外径約0.7mの削抜式であった可能性が高い。抜取穴の観察から、井戸枠は北西方向に抜き取ったと考えられる。井戸枠周囲で検出した上端が揃う人頭大の石が井戸枠の基礎となっていた可能性がある。抜取穴西面と北面の複数の凹みはこれらの石の抜取痕跡であろう。井戸枠の東にはステップ状の段SX20007が構築されており、東から井戸枠に接近するための施設であったとみられる。SX20007上面で検出した不整形の小穴は、本来石敷が施されており、その抜取穴の可能性がある。

井戸枠周囲にはSD20001~20005を配し、これらの水はSD20010に流れる。石組溝と井戸枠掘方の間の空間SX20006は、拳大の小礫の上に灰黄色砂質土による整地が施されている。井戸枠掘方北面に遺存する石列からみて、SX20006は全体に石敷が施されていた可能性が考えられる。SP19982~19984はB期の南北塙SA19981と柱筋が揃うが、規模・形状と埋土が異なることから別遺構と判断する。これらの穴を礫石据付穴とみて南北約6m、東西約5.4mの礫石建ちの井戸屋形が存在し、井戸枠の抜き取りとともに撤去されたものと解釈する。この場合、東南隅の据付穴が確認できていないが、井戸屋形の解体や石組溝の抜き取りがおこなわれた際に失われたものと考える。

以上をふまえてSE20000の構築・廃絶過程を復元する。井戸の構築は、①東西9.0m、南北9.5mの範囲を約0.3m掘り下げる、②一辺4.6m四方を井戸枠本体の掘方として掘り下げる、③掘方底面に砂礫層を構築する、④掘方中央西寄りに外径約0.7mの削抜式の井戸枠を設置する、⑤粘土を主体に井戸枠周囲を標高約65.1m前後まで

埋め戻す、⑥井戸枠周囲に人頭大の石組を設置し井戸枠の基礎とする、⑦井戸枠・井戸枠の東側にSX20007を構築する、⑧掘方の外周空間に石組溝SD20001~20005と東西溝SD20010を設置し、整地を施してSX20006の空間を設ける(井戸屋形の設置もこの段階とみられる)、⑨井戸の完成・使用開始、という過程が復元できる。

また、井戸廃絶は、①井戸屋形・井戸枠の撤去により井戸枠の抜き取りのための作業スペースを確保した後、②井戸枠を北西方向に抜き取る、③抜取穴を暗灰色系の粘土を主体に埋め戻す、④抜取穴直上部分に赤褐色系の粘土で整地を施す、⑤東から炭・礫・石・瓦混じりの從泥灰色土、遺物の僅少な明黄褐色砂質土を入れる、⑥しまりの良い黄褐色砂質土で水平を指向して整地を施す、という過程が復元できる。

東西溝SD20010 SE20000の西辺中央付近から西へ直線的に延びる。幅約1.2m、長さ約8.5m。調査区中央部で東西溝SD20011とL字形に屈曲するSD20012・20013に分岐する。2時期の変遷があり、当初は深さ0.2~0.5mの素掘溝(SD20010A)だが、東端から西へ約4.6mの範囲はSD20010Aの堆積層である灰黄褐色砂層上に橙褐色粘土を貼って嵩上げし、側石と底石で護岸する(SD20010B)(図207上)。SD20010Bは幅0.5~0.6m、深さ0.2~0.4mである。側石はSD20001との合流点までは小ぶりの石を用い、以西は人頭大の石を立てて用いる。底石は1~3石で最東端の底石上面の標高は66.25m、最西端の標高は66.16m。南の側石は抜き取られている。

東西溝SD20011 幅0.8~1.0m、深さ0.5~0.6mの東西素掘溝(図208右)。SD20010の西に続き、調査区の西方へと続く。灰黄色砂層が堆積し、褐色砂質土・灰黄色砂質土により一時に埋められている。埋立土より多量の土器が出土した。

溝SD20012・20013 SD20010から北へ分岐する幅約1.2mの素掘溝。地山である砂礫混じりの褐色土を掘り込み、溝の断面形状は箱形を呈する(図208左)。南北方向のSD20012は約5.0mで西に折れ東西方向のSD20013となる。底面は北へ緩やかに下るが、X-145.083付近を境に北側では底面の洗掘が目立つ。SD20013は深さ0.6~0.8mで調査区の西方へと続く。SD20012・20013はSD20011と同様、灰黄色砂層が堆積し、褐色砂質土・灰黄色砂質土により一時に埋められている。埋立土より

多量の土器が出土し、特に屈曲部付近を中心に土器に加えて丸瓦と平瓦が集中して出土した（図209）。なお、SD20012・20013とSD20010は埋め立て後、幅0.6m、深さ0.2~0.3mの素掘溝（SD20014）が掘られており、ここからは近世の陶器・土師器が出土した。

東西棟建物SD20015 調査区西北部で検出した東西6間以上、南北3間の南廂付東西棟建物。調査区の西方へと続く。柱間距離は身合が約3.0m（10尺）等間で、廂の出が約2.7m（9尺）である。柱穴は一辺0.6~0.8m、深さ約0.4m。SD20013が棟通りの中心を、SD20011が廂の中心を通ることから、SD20011~20013と一体で設けられた覆屋と考えられる。

D期の遺構

東西溝SD19990 調査区中央部で検出した東西素掘溝。調査区の西方へと続く。西でやや南に振れる。後世の削平が著しく幅約1.0m、深さ0.1~0.2m、長さ約27.0m分を確認した。

東西廡SA19991 調査区中央部で検出した東西廡。6間分を検出し、東端はSA19992と接続する。西で南にやや振れており、SD19990と平行する。柱間距離は2.7~3.3m（9~11尺）である。柱穴は一辺0.8~1.2m、深さ約0.6m。
南北廡SA19992 調査区東北部で検出した南北廡。6間分を検出し、調査区の北方へと続く。SE20000西辺の石組溝SD20001・20002を壊す。柱間距離は2.7~3.3m（9~11尺）である。柱穴は一辺0.8~1.1m、深さ約0.6m。

時期不明の遺構

建物SB20020 調査区東北部で検出した東西2間、南北2間以上の建物。柱間距離は2.7~3.0m（9~10尺）。調査区外北方に続く。柱穴は一辺0.6~0.9m。

小穴SX20016~20019 調査区西北部で検出した東西4基の小穴列。いずれも径約0.6m、深さ約0.2mで、埋土は炭・灰が混じる灰褐色砂質土で土師器壺片などが出土した。SB20015の東から3間目の柱間にSX20016・20017が、4間目の柱間にSX20018・20019がそれぞれ位置するようだが、SB20015との関係はあきらかでない。

柱穴列SX19995 調査区南部中央で検出した南北に並ぶ2基の柱穴。北の柱穴は東西1.3m、南北1.5mの長楕円形を呈し、南の柱穴東西1.5m、南北0.8mで長方形を呈する。2基の柱穴間の距離は約2.7mで、幅0.5mの溝で接続する。この溝の中間にあたる底面で径約0.4m、

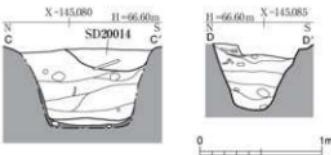


図208 東西溝SD20011(右)・SD20013(左)断面図 1:40



図209 SD20012・SD20013遺物出土状況（北西から）

深さ約0.1mの小穴を検出した。当初、SB19999の間仕切りの柱穴と想定したが、断割の結果SB19999の柱穴よりも深く、規模が大きいため別時期の遺構と判断した。

出土遺物

土器 第593次調査では整理用コンテナ93箱分の土器・土製品が出土した。調査区南部では出土量が少ないのに対し、調査区北部では東西溝SD20011とL字状に屈曲する溝SD20012・20013を中心に奈良時代後半頃の土師器・須恵器が多く出土した。これらの土器は現在整理中であり、SD20011~20013の埋め立てにともなう土器と組成について概要を報告する（図210・211）。

SD20011~20013の埋立土はSD20011では3層、SD20012・20013では2層に分けて取り上げたが、各層間で接合する土器も多く、あまり時間をおかずして埋められたものと考えられる。

SD20011~20013からは、土師器杯A、杯B、杯C、杯E、杯蓋、椀A、椀C、皿A、高杯A、盤A、壺A、壺C、壺D、高杯、盤A、壺A蓋、壺A、壺E、壺A、壺B、皿F、鉢F、鉢D、高杯、盤A、壺A蓋、壺A、壺E、壺A、壺B、

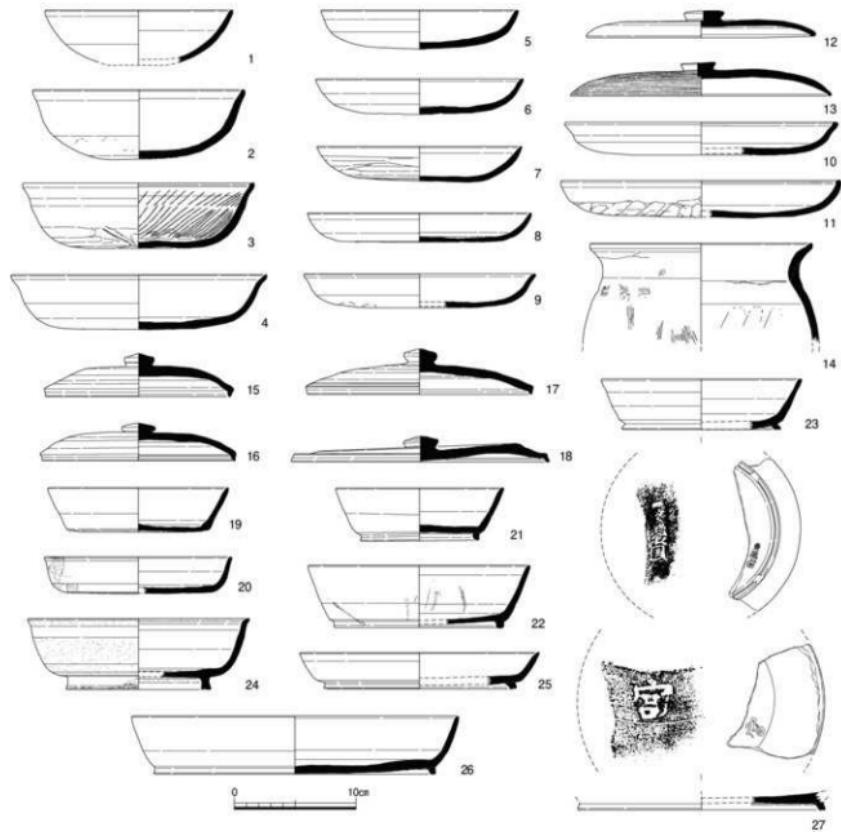


図210 第583次調査出土土器(1) 1:4 (拓本は1:2)

甕Cなどが出土した。このほか、暗文須恵器や焼成が軟質で素地が淡褐色を呈する椀・壺片、接合された土師器片が出土した。

図210に食器類と小型調理具を図示した。1~14は土師器。1は椀A。内外面が磨滅しており、調整は不明。2~4は杯A。2は器高が高く、椀形に近い。椀Xの可能性もある。器壁が厚く、胎土も砂粒が多く混じる粗製の作りである。3は内面に二段放射暗文を施し、外面をb手法で調整する。底部外面に焼成前の凹みがあり、こ

れに対応して底部内面が盛り上がり、歪みが生じている。4は器高がやや浅く、口縁部が外方に開く形態で、端部の巻き込みが緩い。内面の磨滅が著しく、暗文の有無は確認できない。5・6は杯C。口縁端部内面に内傾する面をもつ。器形が皿形化しており、皿Aとほぼ同形態である。7~11は皿A。7は器高がやや深く、平底の底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部外面直下までヘラケズリを施すc手法である。8は口縁端部を丸くおさめる。9は口縁端部が

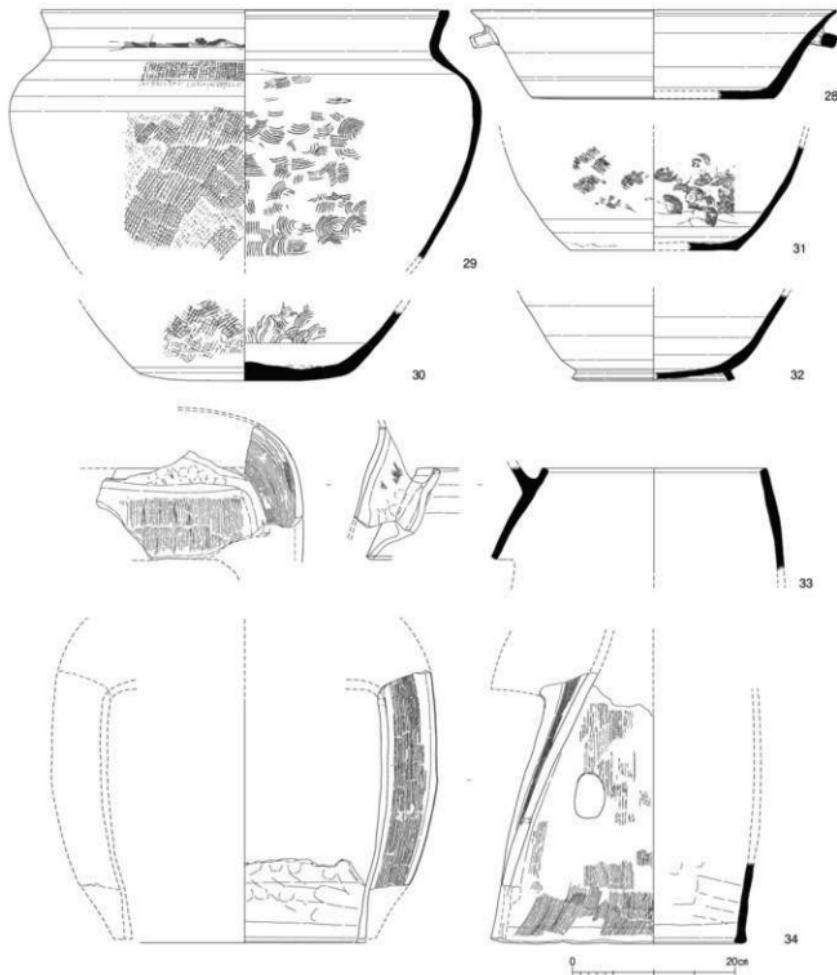


図211 第593次調査出土土器(2) 1:6

小さく外反する。10は口縁部を強く横ナデし、口縁端部を肥厚させる。内外面が磨滅しており、調整は不明。11はb0手法で調整し、口縁部と底部の境に分割ヘラケズリを施した後、底部に一方向のヘラケズリを施す。底部

外面に「×」状の焼成後ヘラ描きを施す。12・13は杯蓋。扁平な形態で、頂部にボタン状のつまみを貼り付ける。土師器杯蓋には板状のつまみをもつものもある。14は小型の壺A。胴部の張りが弱い形態で、口縁部がくの字状

に外反し、端部を丸くおさめる。内面には薄い膜状のコケが付着し、外面はススが付着する。

15~27は須恵器。15~18は杯B蓋。15・16は頂部が平坦で緩やかに口縁部が降る。17は頂部から緩やかに口縁部が降る。18は平坦な頂部から口縁部が屈曲する。軟質の焼成である。19・20は杯A。口径はほぼ同じだが器高と形態が異なる。19は平坦な底部から口縁部が外方に直線的に立ち上がる。焼成が軟質で白色を呈する。20は平坦な底部から口縁部が立ち上がり、端部を丸くおさめる。21~23は杯B。法量の大・小が認められる。21・22は焼成が軟質で灰白色を呈する。ともに高台を底部外縁近くに貼り付ける。23は底部外面に「美濃國」の焼成前刻印がある。老洞古窯跡群で分類されたA-II-2類にあたる¹⁰⁾。24は杯F。底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は外反する。25~27は皿B。25は器高が低く、口縁部が外方に開く。焼成がやや軟質である。26は緩やかに口縁部が立ち上がる。焼成が軟質で黒灰色を呈する。27は底部外面に「宮」の焼成前刻印がある。平城第172次調査SD2700出土資料¹¹⁾と同印とみられる。

次に、大型貯蔵具・調理具を図21に示した。28は須恵器盤A。平底の底部から外反気味に口縁部が立ち上がる。断面が方形の把手を貼り付ける。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。29は壺C。復元口径は50.6cm。外面に格子叩き、内面には同心円状の当て具痕跡が認められる。頸部外面に有機質の付着物があり、紐などを括り付けていた可能性が考えられる。破片から胴部上位を復元できるが、底部の破片はみられない。30~32は壺の底部片である。30は平底の底部から丸みをもって体部が立ち上がる。31は外面に斜め方向の叩き調整と内面には当て具痕跡が残る。平底の底部と体部の境に稜をもつ。32は脚部を貼り付ける。33・34は土師器壺。33は廂部と焚口部上面。廂部は貼り付けにより、刷毛目調整を施す。胎土に赤褐色粒子や白色微砂を含む。復元口径は27.6cm。34は廂下部と基部の破片である。基部は復元基部径31.7cmで、幅4~5cmの粘土紐を輪積みして円筒を作る。外面を縱方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施し、廂部はハケ目調整である。側面に長楕円形の円孔を切り出す。SD2001~20013からは少なくとも大・小6個体以上の壺片が出土している。

SD20011~20013出土土器は土師器壺Aや外面c手法

で調整する杯A・皿Aの存在から奈良時代後半に位置づけられる。これは、同時に廃絶したとみられる井戸SE20000暗灰粘土層から出土した木簡の紀年（後述）とも矛盾しない。

また、SD20011~20013出土土器群は特徴的な土器組成を示す。整理期間の制約上、破片計測法を用いて暫定的に組成比を算出した。土師器（N=1699片）と須恵器（N=1454片）ではやや土師器が多い。土師器では食器類が約6割に対して、壺・甌など煮炊具類が約4割を占めており、須恵器でも食器類が約6割に対して、盤類と壺・甌などの貯蔵具類が約4割を占める。これらは、平城宮内で一般的な土師器食器類が多く出土する傾向に対し、須恵器食器類や須恵器盤・壺と土師器壺・甌が高率で出土する点で特徴的な土器組成である。

さらに、3・23など奈良時代前半に属する土器が一部含まれる点や傷ついた土器がみられる点も特徴である。各溝出土土器は出土状況から廃棄の同時性が認められることから、奈良時代前半から長期にわたって使用・保管された食器も含めて、溝の廃絶時に一括して廃棄されたものと考えられる。このほか、転用硯や墨書き土器が少ない点も特徴といえる。

以上から、溝周辺では食器類に加えて、調理具・貯蔵具が使用・保管されており、溝の廃絶にあたり一括して廃棄されたものと考えられる。出土土器の様相からは溝周辺に食事・調理に関わる施設が存在していた可能性が高いと考えられる。

（小田）

瓦磚類 本調査区より出土した瓦磚類は表35に示した。井戸SE20000付近（井戸およびその上層の包含層等も含む南北9m×東西12mの範囲）から出土した瓦の出土量および調査区全体の出土量に対する比率をみると、軒丸瓦23点（60%）、軒平瓦28点（82%）、丸瓦80.3kg（44%）、平瓦327.4kg（52%）となり、瓦が井戸付近に集中している。井戸付近の軒丸瓦は6133Ka、6282Ba・Ca・G・H、6291Ab、6308A・B、6313A、軒平瓦は6663A・B、6664D、6682A、6689A、6691A、6721D・E・G・H、6732Aであり、出土数からみて6308A・B-6663A・B（II-2期）と6282-6721（III-1期）が主要な組合せであった可能性が高い。このほか、鬼瓦I Aが2点、施釉磚5点も井戸付近から出土した。以上から、井戸に縦瓦葺きの井戸屋形が存在したか、あるいは未調査の井戸の東方に瓦



図212 第593次調査出土瓦類集計表

型式	種	点数	軒丸瓦			軒平瓦			その他の		
			型式	種	点数	種類	点数	種類	点数	種類	点数
6133	Ka	1	6663	A	7	平瓦	1	(斜格子タキ)	1		
	?	1		B	1	溝切平瓦	1				
6282	Ba	1		?	2	鬼瓦1A	2				
	Ca	2	6664	D	1	翼牛2B	1				
	G	2	6682	A	1	用途不明道具瓦	3				
	Ha	1	6685	A	1	搏	4				
	H	1	6689	A	1	(縁軸)	2				
	I	1	6691	A	1	(施釉)	3				
6291	Ab	1	6721	D	1	凝灰岩	2				
6308	A	3		E	1						
	B	2		G	2						
	?	1		H	3						
6313	A	1		?	5						
型式不明			6726	D	1						
(金瓦)		19	6732	A	1						
時代不明		7				近世	1				
						型式不明 (金瓦)	5				
						時代不明	6				
			計	44	計	41	計	19			
			丸瓦		平瓦		搏		凝灰岩		レンガ
重量			183.009kg		628.135kg		12.015kg		13.404kg		0
点数			2084		10001		32		9		0

葺きの建物があった可能性が考えられる。今後の調査に期待したい。

井戸付近から出土した施釉磚はすべて粒度の細かい白色の胎土で、釉は剥離してほとんど残らない。このうち1点は平手面に深さ2cmほどの窪みをもつ特殊な形状で、厚みは5.0cmある(図212・213)。類似の資料はこれまで東院地区(第22・39・110・128・401・423次)から複数点出土しており、これらを参考にすると、全体は長方形で、窪みのない平手面、長手面、小口面に施釉し、窪みのある平手面には施釉していないことから、窪みのある平手面を底面として使用したと考える。(今井晃樹)

石器 ナイフ形石器が2点出土した(図214)。いずれもサスカイト製の国府型ナイフ形石器。1は、右側縁

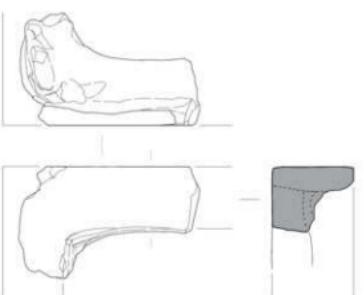


図213 第593次調査出土施釉磚 1:3

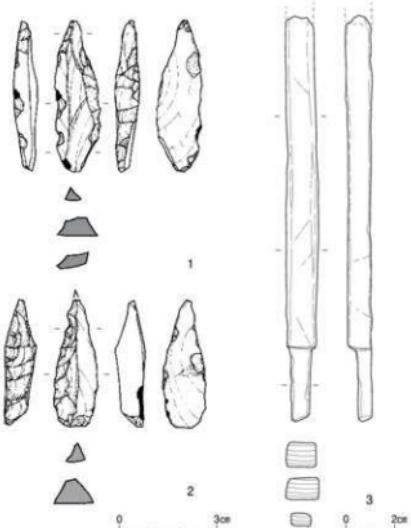


図214 第593次調査出土石器・木製品

のみにプランティングが認められ、下端のみ背面側からの打撃による。長さ4.68cm、幅1.38cm、厚さ0.69cm、重量4.3g。2は、左側縁のみに腹面側からプランティングが施される。下辺に自然面を残す。長さ3.90cm、幅1.34cm、厚さ0.90cm、重量4.4g。1は第584次調査区SA19516柱抜取穴、2は第593次調査区SD20014の理土から出土しており、原位置から遊離している。(芝原次郎)

木製品 井戸SE20000から加工痕のある木片などが多

数出土した(図214)が、同遺構から採取した土壌の洗浄作業が現在進行中であるため、今後さらに増加するものとみられる。3は籠形とみられる針葉樹材の木製品であるが、茎部の作り出しが片面のみの加工にとどまっている。未完成の可能性がある。

(庄田慎矢)

木簡 井戸SE20000抜取穴(暗灰色粘土層)から4点出土した。①は紀伊国安諱(在田)郡からの荷札木簡。下部欠損のため品名などは不明。②も荷札木簡。裏面の年紀は、「字三年」は確実で、「字」前の文字の残画は「寶」の下半分として矛盾はない。以上から、本木簡は天平宝字三年(759)の荷札木簡と考えられる。③は文書

④	③	②	①
□	□ 貨 為 定 □ 美 濃 國 □ 拾 類 カ	□ 貨 字 年 三 年 □ 戸 主 物 部 入 □	紀伊 安 諱 郡 井 戸 主 物 部 入 □
(167) · 24 · 3	(164) · 27 · 5	(105) · 26 · 3	(94) · (16) · 4
019	081	081	081



図215 第593次調査出土木簡(赤外線画像は1:2)

木簡もしくは習書木簡。裏面は美濃国に関する何らかの内容を記す文章らしいが、詳細は不明。表面は貝を含む文字を習書するか。なお、美濃国は称徳天皇の大嘗祭の際の悠紀国である。④は詳細不明。「類」は瓜などの果实の他、堅塩を数える際などに用いられる。(馬場 基)

井戸SE20000と関連遺構について

SE20000は周囲に石組溝が付属する大規模なもので、派生するSD20010~20013とSB20015が一体となり計画的に設置されている。平城宮内では、これまで東院地区のほか内裏地区や造酒司地区などで似たような構造の大規模な井戸を検出している(表36)。SE20000は付属施設を含めると、内裏地区のSE7900に匹敵する宮内最大級の規模である。

井戸の構造をみると、大きな方形掘方を湧水層まで掘り下げた後に、砂礫を敷き込んで湧水の浄化を目的とした透水層を構築したとみられる。透水層の上には粘土層を構築するが、これは井戸枠の裏込土になると同時に、湧水を井戸枠に導く意図があったと考えられる。このような井戸枠掘方に疊や砂層による透水層を構築し、上位に水を通さない粘土層を積む状況は、石神遺跡SE800¹⁶⁾、飛鳥京跡SE8061¹⁷⁾、飛鳥池跡SE42¹⁸⁾、平城宮内裏SE7900の事例でも確認することができ、平安宮内酒殿の井戸も同様である¹⁹⁾。清浄な水を安定的に得るために宮都中枢部の井戸に採用された工夫であったと位置づけられる。さらに、SE20000は井戸枠が掘方の西に偏り、東側には段状のSX20007が構築されることから、SE20000の正面は東となり、井戸から汲んだ清浄な

表36 平城宮内の大型井戸

No	地 区	調査次数	遺構番号	規 模 (井戸枠掘方)	井戸枠	井戸枠規模	付属構造	排水・配水施設	時 期	文 獣	
1	内裏	78次	SE7900A・B	9.4m × 11.5m, (~深3.5~3.8m)	横板組	上段：一辺約16~17m, 下段：外径1.65m 内径1.3m	玉石敷・縄敷、 石組溝・排水溝	石組溝・排水溝	奈良時代前半 ~末	『平城報告XIII』	
2	造酒司	22次北	SE3049	8.3m × 8.0m	横板組	一辺約2.8m	縄敷・素掘溝、 井戸形状	素掘溝	奈良時代前半 後期~末	『年報 1965』	
3	造酒司	22次北	SE3046	5.4m × 3.0m	横板組	東西5.4m × 南北3.0m	井戸形状	素掘溝	奈良時代前半 ~末	『年報 1965』	
4	造酒司	241次	SE15800	7.0m × 6.5m	横板組	上段：方形井桁、 下段：引込抜き	上段：一辺約1.54~1.60m, 下段：幅1.4m	玉石敷・石組溝、 井戸形状	石組溝・覆屋	奈良時代前半 後期~末	『1993平城概報』
5	東院	22次南	SE3230	9.0m × 12m (約5m × 約7m)	横板組	一辺2.1m	玉石敷・石組溝	石組溝	不 明	『年報 1965』	
6	東院	128次	SE9600A・B	一辺5.2mから 7.0mに造り替え (~辺約3 m)	横板組	一辺3.35m	縄敷・石組溝	石組溝	奈良時代後半	『年報 1981』、『昭和50平城概報』	
7	東院	243次	SE16030	6m × 9m (~辺約5 m)	版板組	径1.3m	玉石敷・石組溝、 井戸形状	石組溝	奈良時代後半~ 平安時代初期	『1993平城概報』	
8	東院	593次	SE20000	9.5m × 9.0m (~辺約4.6m)	削り抜き式	径6.7m	縄敷・石組溝、 井戸形状	石組溝・覆屋	奈良時代後半	本報告	

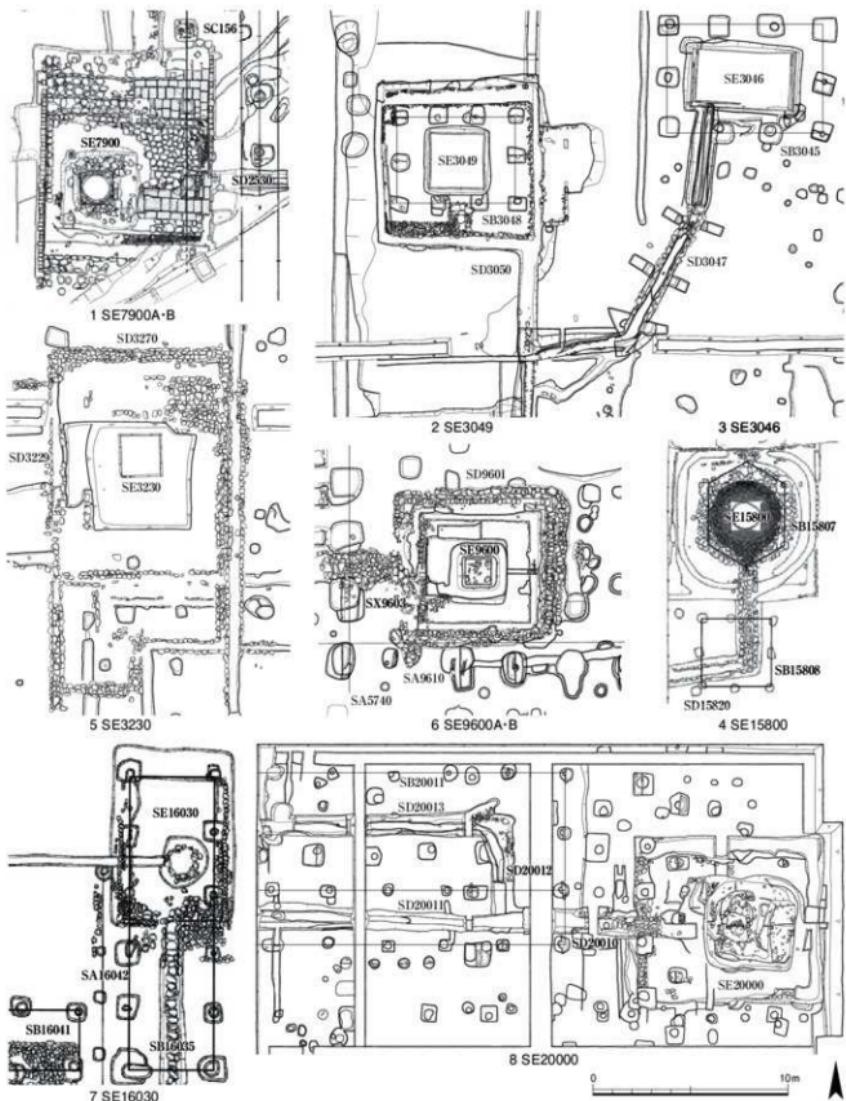


図216 平城宮内大型井戸集成図 1:250

水は主に東方へ運び出されていたと考えられる。また、SE20000は平城宮内で調査された井戸の中では残りが悪い点も特徴である。井戸枠および周囲の石敷・石組溝の抜き取りと丁寧な埋め戻し状況からみて、SE20000の廃絶後に空間利用が大きく変化したと考えられる。

また、SE20000から西に続くSD20010や分岐するSD20011～20013と覆屋SB20015の存在からは、井戸の水を計画的に溝へ配水し、利用していたことがうかがえる。このときSD20010には井戸屋形の雨落溝を兼ねたとみられる四周の石組溝の水も流入する構造であり、井戸の水に加えて雨水の利用も意図していたことがわかる。さらに、SD20010は石組溝に造り替えるものの、SB20015内にあたるSD20011・20012・20013は素掘りで護岸施設を持たない。これは地山に砂礫が多く混じることもあるが、激しい流水ではなく滞水状態を保って利用されていたためと解釈でき、SB20015内では溝の水を利用した活動をおこなっていたと考えられる。

SD20011～20013からは、多量の土器が出土しており、組成分析から杯や皿などの食器類に加えて須恵器盤・甕、土師器甕・竈などの調理具や貯蔵具が多くみられる点が特徴である。溝周辺に調理や食器類の保管をおこなった空間が存在しており、廃絶とともに溝内に一括して廃棄されたものと考えられる。

以上から、SE20000は東院中枢部において清浄な水を確保するための井戸であり、関連遺構を井戸の水を効率的に利用する洗い場に類する施設であったと位置づける。出土遺物からみて調査区周辺は、奈良時代後半の東院中枢部における食膳を準備する厨に関連する空間であり、SE20000と関連遺構もその一部を構成していたと考えられる。今後の周辺の調査により調理・配膳や食糧品・食器類を収納管理する諸施設に関わる遺構の検出が期待される。

(小田)

5 遺構変遷

以下では、第584次・593次調査区で検出した各遺構の変遷を整理する(図217)。

1期 調査区南半に、東西の柱筋を描えた長大な南北棟建物SB19515・19970が、おそらく時間差をともなって建てられる。また、SB19970の東廂から5.0m東に、南北に長い石列SX19971が建物にはば平行して造られる。

SX19971の東側には東院地区中枢部が広がっていたことが推定されるので、これと関連した構造物とも考えられる。調査区北半ではA期の東西棟建物SB19999が建つ。SB19515と柱筋が描うことから両者は併存し、L字形の空間を構成していたとみられる。一方、SB19999とSB19970は併存していたと判断されるが、柱筋は描わない。SB19999の北方には2条の東西廻SA19943・19944が存在する。

2期 調査区南半に東西廻SA19516・19455が平行して造られたことで、空間構成が大きく変化する。これらの廻はさらに東の中枢部へ続いている。また、SA19516東寄りには、B期の南北廻SA19981が接続し、SA19516以北の空間を東西に分割する。調査区南部には、廻で区画された広い空間が存在するが、西南隅の小規模な純柱建物SB19525以外に建物は見当たらない。

3期 調査区東南部に、溝SD19972・19973・19974をともなう特殊な遺構が造られる。この遺構の東辺は、南方の壇状遺構SX19570の東辺とはほぼ一致しているため、この壇状遺構に類する遺構が南北に並んでいた可能性が考えられる。なお、これらの遺構は、さらに南の回廊SC19112・19113に囲まれた、中枢部と推測される区画の北方外側に位置している。調査区北半では、この時期から5期までの段階でC期とした井戸SE20000とそこから派生する溝と建物が造営されたとみられるが、厳密な構築時期は特定できない。

4期 調査区東南辺では、南北廻SA19581が南方の東西廻SA19336との接続部から北に延び、調査区南半北部で東に曲がり、今回調査区からみて東側の空間を区画する。

一方、今回の調査区南半を含む南北廻SA19581の西側の空間には、東西廻SA19336を南限、南北廻SA19581を東限とする規格性の高い空間が形成される。内部には、南北棟建物SB19585と西方の南北棟建物SB19350を東西の両端として、両棟の北辺と南辺を結んだ長方形の範囲内に複数の建物が柱筋を描いて建てられる。複数の建物が計画的に配置されるようになる。

5期 調査区南端に純柱建物SB19590が造られる。調査区北部北半では、SE20000と関連遺構がこの時期に確実に存在する。このほかに同時期の遺構はみつかっておらず、調査区中央部では建物が希薄なことがわかった。

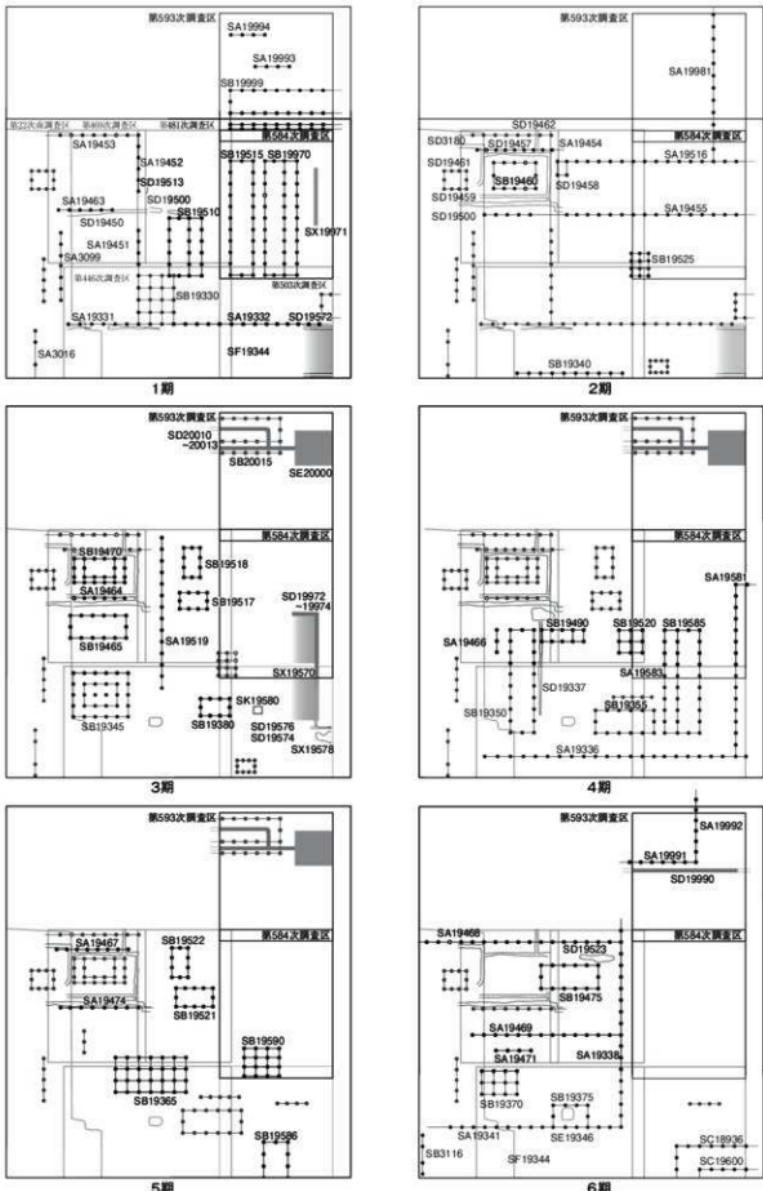


図217 遺構変遷図

6 期 今回の調査区南半では建物が認められない。調査区北半ではSE20000と関連遺構が発見しており、井戸枠や石組溝を抜き取った後に丁寧な整地が施されている。東西溝SD19990が掘られ、平行する東西塀SA19991と共に接続する南北塀SA19992により区画を設けている。なお、SA19991は第481次調査区および第459次調査区で検出した東西塀SA19468から約14.6m北に位置しており、これは第446次調査区で検出した6期の東西通路SF19344とはほぼ同規模である。東院6期中枢施設の西には掘立柱塀による南北160尺の区画が南北に整然と並ぶ様相があきらかになっているが、同様の区画が中枢施設の北方にも展開することが予想される。
(小田・山藤)

6 小 結

第584次・593次調査で得られた主な成果は以下のとおりである。

第584次調査 第584次調査区では、西の第481次調査区および南の第503次調査区から続く掘立柱建物5棟と掘立柱塀3条の延長部分を検出し、建物の全体規模が確定した。このように、既往の調査で一部検出されていた建物と塀の全体規模が確定したこと、大型の南北塀と南の東西塀に区切られた中枢部より西側では、南北棟建物を東西に配する長方形の空間において、複数の建物が計画的に配置されていたことが判明した。

調査区西部から中心では、以前の調査でその一部がすでに確認されていた南北棟建物の東隣に、新たな南北棟建物を確認した。これらの建物は柱筋が揃っていることから同時期に並立していた可能性も考えられるが、確実な証拠は得ていない。なお、各建物を構成する柱穴の規模・平面形・深さが相互に異なり、また、東側の建物の柱のやり替えも確認されるなど、両建物の建築時期の時間差を肯定しうる証拠も認められた。

調査区東部の整地上では、相互に隣接する3本の溝を検出した。これらは、特殊な遺構の存在を示唆している。これらの溝の東辺は南の第503次調査区で確認された3期の壇状遺構の東辺と位置がほぼ揃い、南北に連なる2つの特殊な遺構群の存在が考えられる。

これまでの調査により、東院地区西辺では純柱建物が多く検出されており、他方、本調査区の東側には回廊に囲まれた中枢部が広がっていたことが推測される。これ

に対して、本調査区が位置する、西辺と中枢部の間の空間では、奈良時代を通じて南北棟建物や小規模な建物が建てられる傾向があることがわかつた。

なお、調査区の一部ではあるが堆積構造について検討することにより、これまで地山と認識されてきた整地土下の堆積土層(明黄褐色粘土)は、人為的な改変を受けた整地土であり、さらに平城宮廃絶後に地震動による液状化被害を受けていたことがあきらかとなった。今後は東院地区や周辺の分析データをさらに蓄積していくことで、堆積環境を面的に検討し、平城宮・京跡に関わる人為的な改変の様相をあきらかにする一助としていくことが望まれる。

(山藤・村田)

第593次調査 奈良時代前半の大型の東西棟建物SB19999を検出した。東西9間以上の大型の南廂付き東西棟建物で、床張りの構造とみられる。柱筋の検討から、第584次調査区検出の南北棟建物SB19515と一連の空間を構成していたとみられる。建物は調査区外東方へ続いており、全体像の解明は今後の課題である。

また、奈良時代後半の大規模な井戸SE20000と関連遺構を検出した。SE20000は平城宮内では内裏地区で見つかっている井戸に匹敵する規模である。SE20000からはSD20010~20013が派生し、覆屋SE20015を設けるなど、井戸の水を計画的に利用していた様子がうかがえる。これらの遺構の状況と出土遺物の内容からみて、第593次調査区周辺は東院中枢部の厨に関連する空間であったと考えられる。

(小田)

7 第587次調査

基本層序

調査区西半部では、黒褐色粘質土(擾乱土層)が25~30cm程度の厚さで堆積し、それを除去した黄白色粘質土(地山)の上面の標高約67.1mで、遺構を検出した。調査区東半部では、擾乱土層が地表下約1.1mまで堆積し、遺構は検出されなかった。

検出遺構

調査区西北隅において掘立柱建物1棟を検出した。

掘立柱建物SB20021 衍行2間以上、梁行2間以上の掘立柱建物。柱間寸法は約3.0m(10尺)等間である。柱穴掘方は南北0.7~1.0m、東西0.85~1.0mである。調査区北端にかかる柱穴の底面からは平らな石が検出され

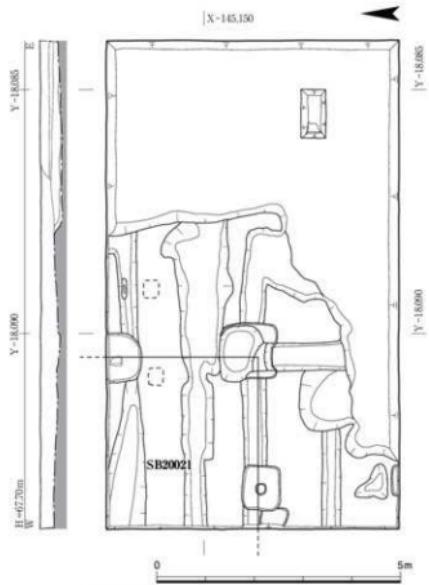


図218 第587次調査遺構図・北壁土層図 1:100



図219 第587次調査区全景（北西から）

盤と考えられる。柱穴内とその周辺から時代を特定できる遺物は出土していないが、規模と構造等から奈良時代と推定される。

このほかに、2基の柱穴を検出した。調査区南にかかる柱穴はSB20021の柱穴から約30m(10尺)であるため、廟の柱穴の可能性もあるが、攢乱のため不明である。

出土遺物

本調査区からは、土器類・瓦類の小片が少量のみ出土した。

まとめ

発掘調査事例が少なく、様相が不分明であった東院東辺において、古代と推定される掘立柱建物を1棟検出した。東院東辺の実態解明のために、今後も周辺の調査をすすめる必要がある。

(国武貞克)

註

- 「東院地区的調査 - 第401次」『紀要 2007』。
- 「東院地区的調査 - 第421・423次」『紀要 2008』。
- 「東院地区的調査 - 第503次」『紀要 2014』。

- 前掲註2。
- 「東院地区的調査 - 第292次・第293-10次」『年報 1999-Ⅲ』。
- 「東院地区的調査 - 第381次」『紀要 2006』。
- 「東院地区的調査 - 第446・469次」『紀要 2011』。
- 「東院地区的調査 - 第481次」『紀要 2012』。
- 「平城宮跡・平城京跡の発掘調査」『年報 1991』。
- 「左京二条二坊十一坪の調査 - 第279次」『年報 1997-Ⅲ』。
- 「第二次朝集殿南門の調査 - 第326次」『紀要 2003』。
- 「第一次大極殿西楼の調査 - 第337次」『紀要 2003』。
- 2棟の同規模建物が並び建つという、いわゆる「双堂」形式の建物が想起される（海野聰「双建塔の再検討」『佛教藝術』320、2012）。しかし、今回調査区での南北2棟建物SB18515・19970が連接していたという証拠は認められないと、「双堂」形式の建物とは現状では理解していない。
- 岐阜市教育委員会「老洞古窯跡群発掘調査報告書」1981。
- 巽淳一郎「記号・文字・印を刻した須恵器の集成」2000。
- 「藤原概報15」。
- 奈良県教育委員会「飛鳥京跡I」1971。
- 「年報 1998-Ⅱ」。
- 京都市埋蔵文化財研究所「平安宮内酒殿・鉴所・侍從所跡」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』1997、西山良平氏・家原圭太氏のご教示による。

平城宮第一次大極殿院周辺の調査

—第585次

1 はじめに

本調査は国土交通省による平城宮第一次大極殿院（以下、大極殿院）復原整備事業にともなう発掘調査であり、A～Kの計11トレントを設定した（図220）。A～Jトレントは、地下に配管を埋設する予定ルート上のうち、未発掘部分の遺構面の標高を確認するために設定したものである。Kトレントは、過去の調査（第77・389次調査）では農業用水路の存在により未発掘となっていた箇所の調査のために設定したトレントであり、大極殿院南門基壇の掘込地業の構造や階段改修の詳細の解明などを主な目的とした。調査面積は合計426.5m²、調査は2017年4月10日に開始し、7月27日に終了した。

以下、各トレントを大極殿院より西側の1区（A～Dトレント）、大極殿院西面回廊付近の2区（E・Fトレント）、同内庭部の3区（G～Jトレント）、同南門付近の4区（Kトレント）に区分し、記述をおこなう（図220）。

なお、これまでの発掘調査の成果により、大極殿院地区の遺構はI～III期の大きく3時期に区分されている。また、I期はさらに4時期に細分される¹⁾。

I期：奈良時代前半。

I-1期…平城宮造営当初。

I-2期…南面回廊を改修し、南門の東西に樓閣を増築する時期。

I-3期…恭仁宮へ遷都した時期。

I-4期…恭仁宮より遷都した時期。

II期：奈良時代後半。

III期：平安時代初期。

今回の報告でも、上記の時期区分を踏襲する。

2 基本層序

各区の基本層序は以下のとおりである。

1区 A～Dトレントいずれも、上から整備盛土（60～100cm）・耕作土（1層、10～20cm）・床土（複数層、計40～70cm）を経て遺構面（H=67.00～67.20m）に至る。遺構面は、奈良時代の整地土層とみられる均質でしまりが強い灰白色粘土層の上面である。

2区 調査地は大極殿院西面回廊の基壇復原整備箇所にあたるが、基壇の復原整備以前には排水用のU字溝が敷設されていたため、未発掘であった。そのため、整備盛土（最大60cm）やU字溝の据付・抜取埋土（最大120cm）を除去すると、遺物包含層（灰色または褐色の混疊土、約5cm）を経て遺構面に至る。遺構面は褐色～明黄褐色の粘質土（部分的に礫を含む）で、西面回廊基壇土とみられる。遺構面の標高は67.50～67.80mで、東側が高く、西に向かって緩やかに傾斜し低くなる。なお、Fトレント北壁の土層観察では西面回廊の下層に大規模な造成土層および地山を確認した。

3区 大極殿院内庭部にあたり、上から整備盛土（30～50cm）・耕作土（10～20cm）・床土（5～30cm）を経て遺構面（標高67.60～68.00m）に至る。遺構面は径3cm前後の円礫を多量に含む砂質土または粘質土層の上面で、I～4期の礫敷面（SH6603C）に相当するとみられる。大極殿院中軸に近い東ほど遺構面の標高は高く、西に向かって緩やかに低くなる。

4区 Kトレントは大部分が既往の調査区（第77・389次調査）²⁾の範囲内に位置し、また調査前には大極殿院南門の基壇が盛土により整備・表示されていた。そのため、整備盛土・旧調査区埋戻土の直下が遺構面となる。ただし、旧調査時には農業用水路が敷設されていたため未発掘となっていた箇所（東西幅3.5～4.5m）については、水路の据付掘方（埋土は砂石詰めの粘質土）の両脇に耕作土（最大60cm）や床土（最大30cm）が認められる。

遺構面は、南門基壇部分では黄褐色砂質土（南門基壇土）層の上面であり、その北側（大極殿院内庭部）および南側（中央区朝堂院内庭部）では奈良時代の礫敷面とみられる混疊土層の上面となる。標高は、大極殿院内庭部および南門基壇部分が67.80～68.00m、中央区朝堂院内庭部が67.20～67.40mとなる。なお、南門基壇部分の下層では、南門基壇積土や敷粗柴層などを確認した。

3 検出遺構

1区

いずれのトレントでも顕著な遺構は認められなかったが、奈良時代の整地土層とみられる灰白色粘土層を検出した。標高は、東側のA・Bトレントが67.00m、西側のC・Dトレントが67.20mである。



図220 第585次調査区位図 1:2500

2 区

西面回廊SC13400 E・F両トレチにおいて、大極殿院西面回廊SC13400の一部を検出した。基壇土は褐色～明黄褐色の粘質土を主体とし、部分的に礫を含む。廃絶後に削平を受けているとみられ、礫石の据付・抜取痕跡などは確認できなかった。

Fトレチ調査区北壁での土層観察では、西面回廊SC13400の基壇に掘込地業がともなうことを確認した(図221・222)。現状で、深さは40～50cm、東端部の座標はY-18.934付近である。なお、第432次調査区の北半以北ではSC13400の東雨落溝SD13401を検出しているが³⁾、その中軸の座標はY-18.933ほどであり、今回確認した掘込地業の東端よりわずかに東側に位置する。そのため、SC13400の掘込地業は基壇の東西幅より狭い範囲にとどまる可能性がある。掘込地業内の積土はやや粘質のある橙褐色土を主体とし、それより東側(大極殿院内部)には整地土とみられる黄白色土や暗褐色土が堆積する。

また、基壇掘込地業の下層に、暗灰色～暗青灰色の粘土層が約70cmの厚さで展開することを確認した(図221・222)。この粘土層(特に上半)は地山と見紛うほど均質であるが、標高67.00～67.20mの地点から瓦片2点および土師器1点が出土したため、人為的な造成土層とみられる。大極殿院の造営に際し、この付近一帯に平坦面を構築するための造成土であろう。その下には、地山の暗青灰色粘土および青灰色砂が堆積する。

南北溝SD20026 西面回廊SC13400のすぐ東側で約2m分を検出した、幅60～90cmの南北溝。中軸の座標はY-18.933付近で、第432次調査区の北半以北で検出した西面回廊SC13400の東雨落溝SD13401のそれとはほぼ揃う⁴⁾。ただし、SD20026は深さ5cmほどのごく浅い素掘溝であり、東肩の見切石や溝底の敷石などをともなうSD13401とは様相が大きく異なる。SD13401の石材などが抜き取られたとのわずかな痕跡である可能性も否定はできないが、現状では两者を同一遺構とみなすのは難しい。

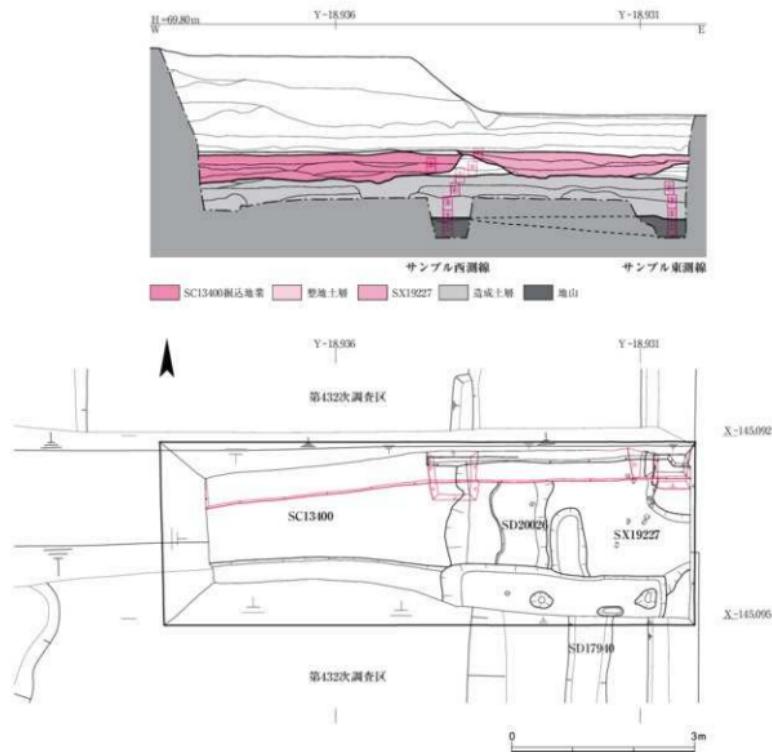


図221 第585次調査Fトレンチ遺構図・北壁土層図 1:80



図222 Fトレンチ北壁土層堆積状況(南東から)

矩形遺構SX19227 第432次調査で検出した矩形の段差。今回の調査では東西約3.8m、南北約2.5m分を検出した。西面回廊SC13400基壇の掘込地業内の積土やその下層の整地土層を掘り込んでいるが、時期や性格は未詳。第454次調査において、大極殿院東南隅付近のほぼ対称位置に類似の遺構SK19310が存在することが指摘され、大雨などにより地面が緩んだ箇所の土を入れ直した土地改良の痕跡などである可能性が示唆されている⁵⁾。

3 区

広場SH6603C G～J各トレンチの全域で、径3cm前後の円礫を多量に含む砂質土または粘質土層を検出した。I～4期の広場(疊敷面)SH6603Cに相当すると考え



図223 SH6603A～C検出状況（北東から）



図224 確敷面SX20040（奥）と瓦礫（北から）

られる。標高は、Gトレンチが67.60m、Hトレンチが67.60～67.80m、Iトレンチが67.80～67.85m、Jトレンチが68.00mほどで、傾斜は緩やかながら西側ほど低く、大極殿院の中軸に向かって高くなる。

4 区

4区のKトレンチは、調査区内が、①大極殿院内庭部、②南門基壇部分、③中央区朝堂院内庭部、と南北に大きく3分される（図225）。遺構検出面の標高は、①・②が67.80～68.00m、③が67.20～67.40mであり、①・②と③との間に大きな段差がある。

広場SH6603A～C ①において、I期（当該箇所が大極殿院内庭部であった時期）の確敷面SH6603を3時期分（A～C）確認した。今回の調査では、基本的にこのうちの最上層SH6603C（I-4期相当）まで掘削し、遺構検出をおこなった。一方、第77次調査区ではその下層のSH6603B（I-2期相当）まで掘り下げており、さらに下層のSH6603A（I-1期相当）も部分的に検出している（図223・225・228）⁶⁾。

各時期の舗装に用いられている礫は、いずれも円礫を主体とする。ただし、SH6603A・Bの礫は径10～15cmであるのに対し、SH6603Cの礫は径3cmほどであり、著しく様相が異なる。

確敷面SX20040 ①の新規掘削箇所（旧水路の東西両脇部分）で検出した最上層の確敷面で、直下には瓦礫が展開する（図224、I-4期の確敷面SH6603Cはこの瓦礫の下層に位置する）。この瓦礫は大極殿院（南門）廃絶にともない形成されたとみられるため、その直上に位置するSX20040は奈良時代後半のII期の確敷面である可能性が

高い。ただし、時期の特定に至るような遺物は出土しておらず、平安時代初頭のIII期、または中世以降に降る可能性も否定はできない。後述する③で検出した確敷面SX20041と一連の可能性も想定される。用いられている礫は径5～10cmほどの円礫を主体とし、SH6603A・BとSH6603Cとの中间的な様相を呈する。

南門SB7801 ②において、大極殿院南門SB7801の基壇土などを検出した。①と標高がほぼ揃うことから南門廃絶時に大規模な削平を受けているとみられ、礫石の据付・抜取痕跡などは確認されなかった。

第77次調査で実施した断面観察により、南門基壇が掘込地業をともなうこと、掘込地業内の積土を含む広義の南門基壇土が大きく3層から構成されることを確認した（図226）。掘込地業は、北面階段北端想定位置の直下から南面階段南端想定位置の北側約70cmの位置まで、南北約17.8mに渡り施される。深さは40～70cmほどを測るが、北端3m強の部分のみは他より20cmほど深く掘り込まれ、径20cm前後の円礫が詰め込まれる。また、南肩部分にも同様に円礫が詰め込まれている。

基壇土は、大きくは上から黄褐色土層・黒灰色土層・青灰色土層の3層からなる（図229）。場所により若干異なるが、いずれも厚さは20～30cmほどである。青灰色土・黒灰色土が掘込地業内の積土で、最上層の黄褐色土が狭義の基壇土となる。ただし、掘込地業を完全に埋め切らないうちに黄褐色土を積み始めており、黄褐色土層の下半は掘込地業内に含まれる。基壇土のしまりはそれほど強くなく、特に黒灰色土層・青灰色土層の積土単位は10

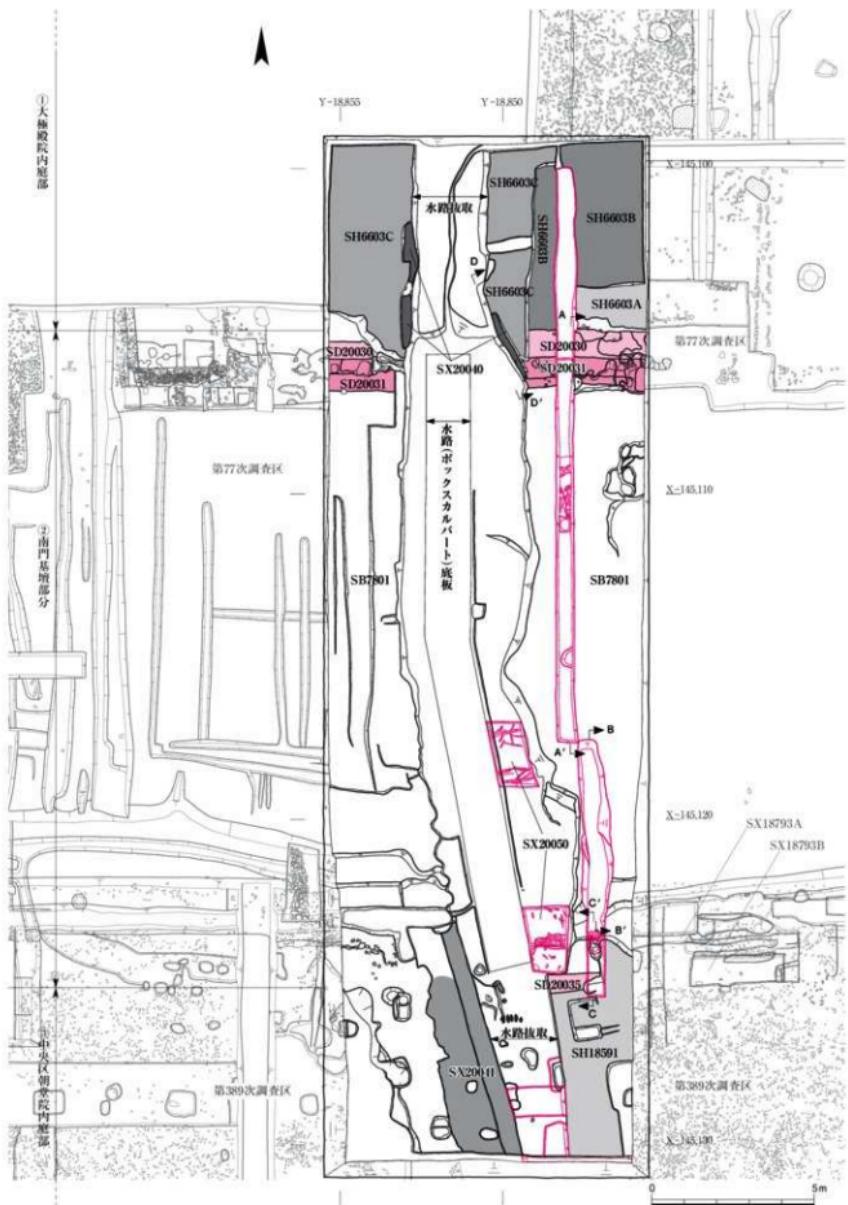
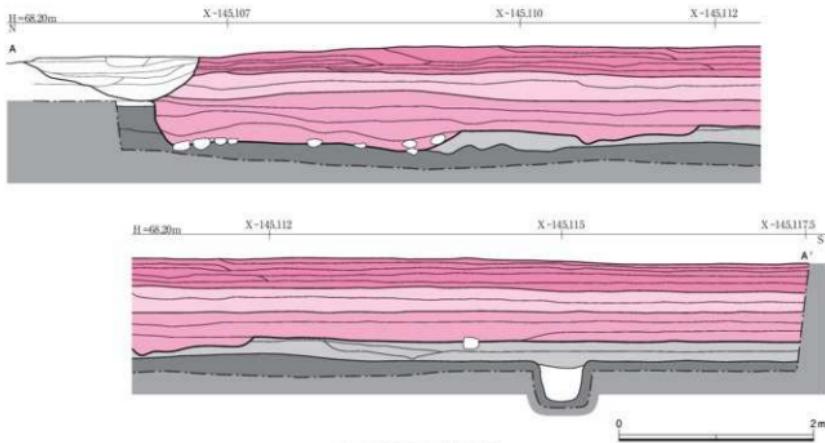
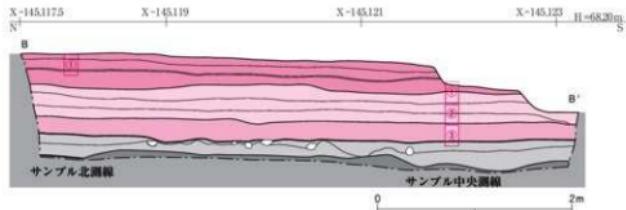


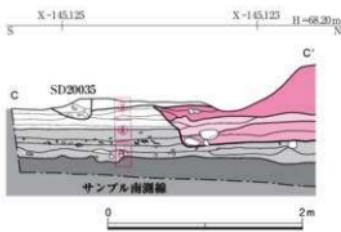
図225 第555次調査Kトレーンチ構造図 1:150



A. 南門基壇北半東壁断面図



B. 南門基壇南半東壁断面図



C. 南門基壇南端部西壁断面図

[■] 黄褐色土層 [■] 黑灰色土層 [■] 青灰色土層（以上、南門基壇土） [■] 埋粗余層（SX20050） [■] 地山

図226 南門SB7801基壇部分南北方向断面図 1:50



図227 SD20030-20031検出状況(北東から)

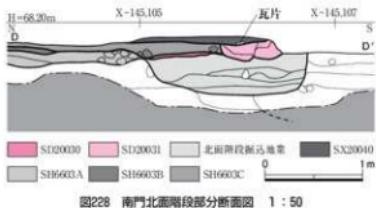


図228 南門北面階段部分断面図 1:50

cm前後とやや厚い。最上層の黄褐色土層は、黒灰色土層・青灰色土層よりは細かい単位(5cm前後)で積まれている。東西溝SD20030・20031 ①・②境界付近において検出した2条の東西溝(図227)。埋土には凝灰岩の細片や粉末が多く混じり、互いに接しながら調査区を東西に横断する。いずれも幅は0.9mほどだが、SD20030西半(水路以西)は0.5mほどとやや狹まる。断面観察により、SD20030はI-4期の礫敷面SH6603Cに覆われること、SD20031はそのSH6603Cを掘り込み、かつII期の礫敷面の可能性があるSX20040(およびその直下の瓦罐)に覆われることが判明した(図228⁷⁾。以上の土層状況や検出位置、埋土の様相などから、北側のSD20030が南門創建時の北面階段外装材の抜取痕跡、南側のSD20031がその後に付け替えた北面階段外装材の抜取痕跡と考えられる。SD20030の直上にSH6603B由来とみられる径10~15cmの円窪が認められることから、北面階段はI-1期からI-2期に移行する際(東西棲増設時)に改修されたとみられる。

特にSD20031内には大型の凝灰岩切石が多く含まれ、階段外装材に由来する可能性が高い。ただし、いずれも



図229 基壇土および敷粗粒層(SX20030)の堆積状況(西から)

南門廃絶時に一度引き抜かれた材が投棄されたもので、原位置は保っていないとみられる。

このSD20030・20031の下層では、小規模な掘込地業状の遺構を確認した(図228)。南門基壇全体の掘込地業をおこなった後、特に北面階段部分については再度掘削し、地盤改良を施したものであろう。

東西溝SD20035 ②・③境界付近において検出した幅約50cm、深さ5~15cmの東西溝。埋土には白色の凝灰岩片が非常に多く含まれ、その位置からも、南門南面階段の抜取痕跡と考えられる。ただし遺存状態は悪く、水路以東で約15m分を検出したのみである(図225・226C・230)。本来はSD20030・20031と同様に調査区を東西に横断していたと考えられるが、水路以西の部分は削平を受けているとみられ、残存しない。

第389次調査では、階段地覆石とみられる凝灰岩破片やその据付溝・抜取溝からなる上層南面階段SX18793Bを検出している⁸⁾。今回検出したSD20035は、その位置から、このSX18793Bに対応する可能性がある。

なお、北面階段部分の下層で検出した階段設置にともなうとみられる掘込地業状の遺構は、南面階段部分の下層には認められなかった(図226C)。

広場SH18591 ③の水路以東で検出した、径5~10cmの円窪を主体とする礫敷面(図230)。南門南面階段の抜取とみられるSD20035がこの礫敷面を掘り込んでいることから、I期・中央区朝堂院内庭部の広場SH18591の一部であると考えられる。

礫敷面SX20041 ③の水路以西で検出した、径5~10cmの円窪を主体とする礫敷面。遺物がほとんど出土して



図230 SH20035・SH18591 棚出状況(南東から)



図231 敷粗朧層SX20050候出状況(南から)

おらず、またこれを掘り込む遺構なども存在しないため時期の特定は難しいが、(1) SH18591と一体をなすⅠ期・中央区朝堂院内底部の礫敷面、(2) Ⅱ期・南門廃絶後の礫敷面、(3) Ⅲ期または中世以降の礫敷面、などの可能性が想定される。(2) または(3) の場合は、前述のSX20040と一緒になる可能性もある。

敷粗朧層SX20050 大極殿院南門SB7801の下層に展開する。厚さ15~30cmの敷粗朧層(図225・226・229・231)。南門SB7801の掘込地業に掘り込まれていることから、SB7801に先行する遺構であることがわかる。この敷粗朧層SX20050は、場所により遺存状況は異なるが、概ね3層の有機物層から構成される。最下層の有機物層の上に比較的太い枝や丸太が並べられるが、枝同士を編み込むなどの明瞭な構造は認められない。今回の調査区では、南北19m弱を確認したが、北は南門掘込地業の北端付近の掘込が深まる部分で途切れて大極殿院内底部(①)までは広がらないことを確認したものの、南は調査区南端以南まで展開すると思われ、全体の規模や範囲は不明である。

(山本祥隆)

4 出土遺物

土器 本調査では、整理用コンテナ1箱分の土器が出土した。これらのうち多くは、Kトレンチから出土した土器である。杯Bが少なからず見られ、飛鳥時代末から奈良時代初の土器が大多数を占めると考えられる。この他に、古墳時代の土器および中世・近代の土器・陶磁器が混じる。土器の多くは小片のため時期判別が難しい。以下では、比較的残りの良い土器を示す(図232)。

1~3は南門基壇南半の断面調査の際に出土した須恵器である。1は、黒灰色土層出土の奈良時代の杯B蓋。口縁部は緩やかな弧を描いて伸びる。外面には連続的にロクロナデを施す。口縁端部は小さく下方に折れ曲がり、わずかに外反する。復元口径20cm。2・3は、敷粗朧層SX20050から出土した、飛鳥時代末から奈良時代初の須恵器。2は杯Bの高台、やや高い高台外縁が斜め下方に顯著に突出し、外側に踏ん張る。高台端部は、わずかに窪む内傾する面を持つ。3は壺C。口縁部は緩やかに外反し、上端外面は強いロクロナデが施された面をなす。

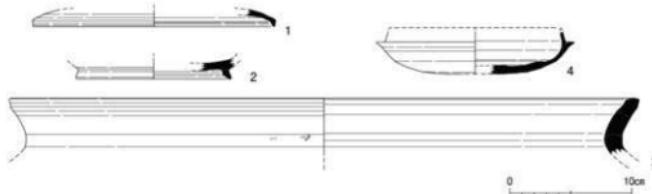


図232 第585次調査(Kトレンチ)出土土器 1:4

す。口縁端部は平坦面をなす。復元口径51.6cm。4は、水路抜取の底面の断面調査の際に整地土から出土した、古墳時代後期の須恵器杯H。ほぼ平たい丸底の底部から緩やかな弧を描いて立ち上がり、蓋受け部がやや上方に鋭く突き出す。口縁部はやや内傾してまっすぐ立ち上がる。口縁端部は欠損する。外面底部にはロクロケズリ調整が施される。MT85型式と考えられ、6世紀後半に比定される。復元最大径16.2cm。

(山藤正敏)

瓦磚類 本調査で出土した瓦磚類を表37に示した。軒瓦はすべて細片で、奈良時代の軒丸瓦はGトレーニングから1点、Kトレーニングから3点出土。軒平瓦6643Cと6644CはすべてFトレーニング、6644KはHトレーニングから出土した。凝灰岩はすべてKトレーニングから出土した。凝灰岩は南門の基壇あるいは階段の外装材であったと考えられる。図233はSD20031から出土した凝灰岩の切石である。b面以外はすべて加工面が残存している。a面とc面の間は幅43cm(約1.5尺)、c面の長さは51cm以上、d面の厚さは19cm以上となる。a面とd面は平坦に仕上げているが、c面とe面には整跡が残る。使用時には少なくともc面とe面は基壇あるいは階段の積土と接するように据

表37 第585次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他			
型式	種 点数	型式	種 点数	種類	点数		
G(近代)	1	6643	C	1	面付瓦	5	
垂草官式	1	6644	C	4	要付瓦	3	
型式不明	3		K	1	磚	1	
			?	2	土管	1	
				中世	1	凝灰岩	12
				近世	1		
				型式不明	1		
				時代不明	3		
計		計		計			
丸瓦		平瓦		磚			
重量	29853kg	199914kg	3491kg	65498kg	0		
点数	538	4807	6	60	0		

えたと考えられるが、具体的な使用部位は不明である。

(今井晃樹)

5 自然科学分析

本調査では、1) Fトレーニングで検出した西面回廊基壇土の掘込地業および整地土層、さらにその下層の造成土層の堆積構造の検討、2) Kトレーニングで検出した南門基壇部分の堆積構造と築造時期の検討、という大きく2つ

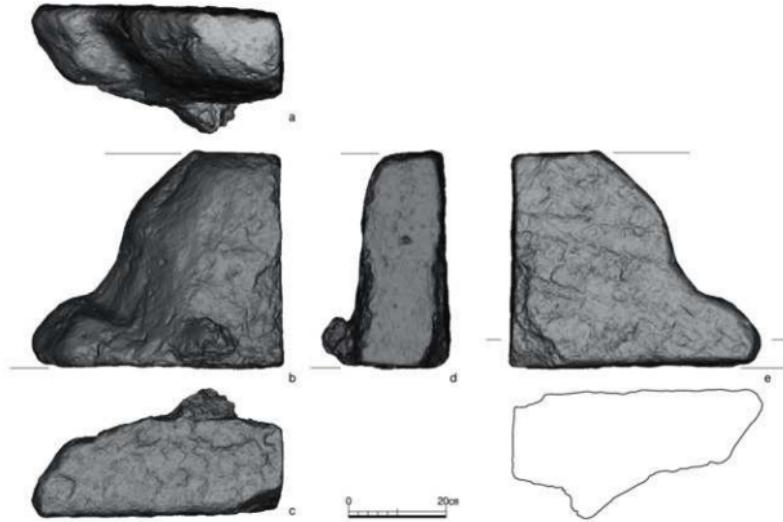


図233 SD20031出土凝灰岩切石 1:10

の課題が挙がった。

Fトレーナーでは、西面回廊の掘込地業の下層にいわゆる“地山”と判断されがちな暗灰～暗青灰色泥層が堆積する。しかし、本調査において層中に瓦片や土器片が挟在することが確認され、造成土層としての知見が得られ

た。さらにその下層には、確実に自然堆積層として認識される暗灰～暗青灰色砂泥互層が基盤層として堆積していた。この造成土層は大極殿院造営に向けた平坦面構築のための基礎地業として想定されるが、その工事規模は大がかりなものであり、それとともに土量規模もかな

表38 放射性炭素年代測定および層年校正の結果

試料番号 (測定番号)	採取地点	層名	試料別	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	層年較正用 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を層年代に較正した年代範囲	
							1σ 層年代範囲	2σ 層年代範囲
NH585-AMS1 (PLD-35689)	F トレーナー 北壁	地山層	有機質 土壤	-24.70 ± 0.26	3577 \pm 23	3575 \pm 25	1950-1893 cal BC (68.2%)	1918-1995 cal BC (5.9%) 1881-1881 cal BC (89.5%)
NH585-AMS2 (PLD-35690)	F トレーナー 北壁	造成土層	有機質 土壤	-24.75 ± 0.25	3004 \pm 22	3005 \pm 20	1277-1213 cal BC (68.2%)	1375-1356 cal BC (3.9%) 1301-1189 cal BC (84.5%) 1180-1160 cal BC (3.2%) 1145-1130 cal BC (3.8%)
NH585-AMS3 (PLD-35691)	F トレーナー 北壁	造成土層	有機質 土壤	-24.10 ± 0.26	2692 \pm 22	2690 \pm 20	891-880 cal BC (10.4%) 845-810 cal BC (57.8%)	897-807 cal BC (95.4%)
NH585-AMS4 (PLD-35695)	K トレーナー	黒色土層	木片	-27.93 ± 0.25	1290 \pm 20	1290 \pm 20	678-711 cal AD (41.5%) 745-764 cal AD (26.7%)	667-726 cal AD (60.0%) 738-769 cal AD (35.4%)

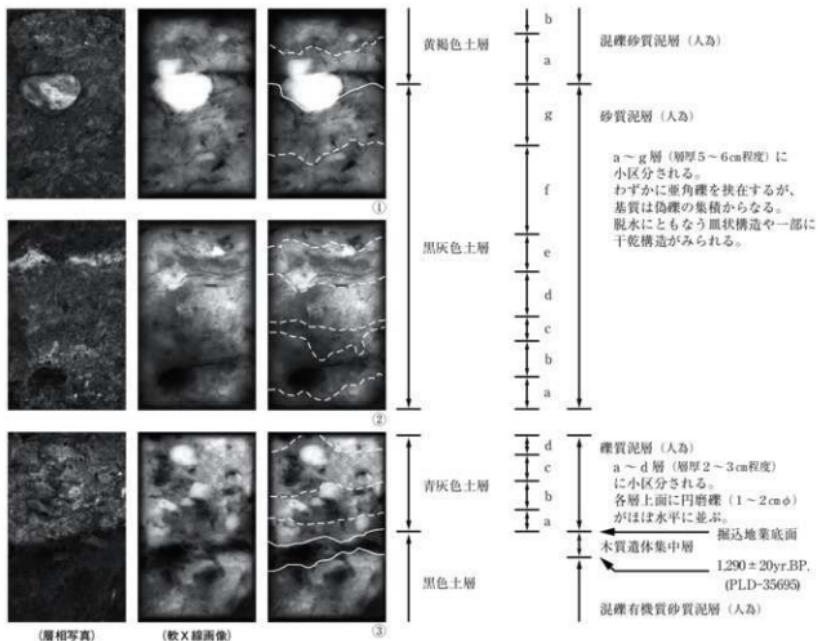
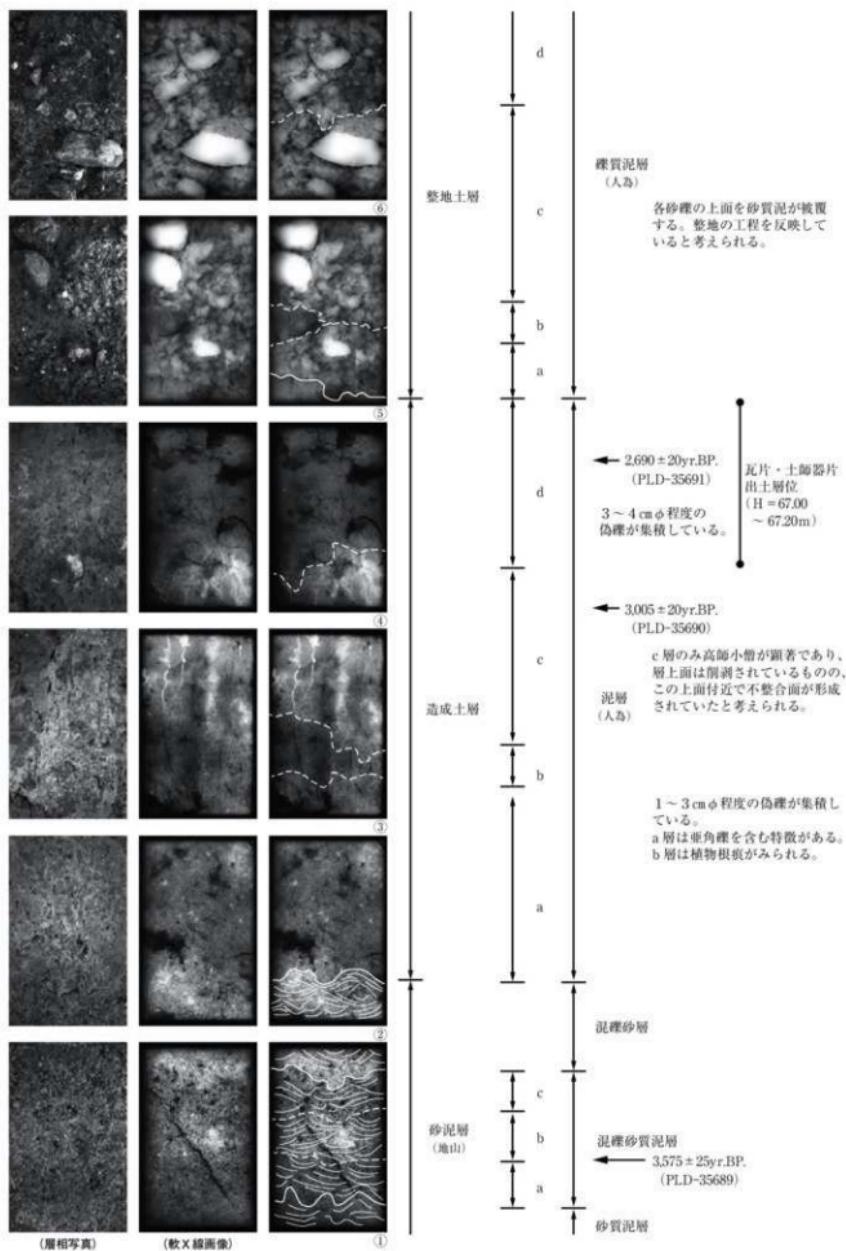


図234 K トレーナー サンプル中央測線の堆積構造と放射性炭素年代



り大きなものとなることが推測される。そこで、改めてこれらの造成土層や整地土層の特性について検討を加えることとした。

Kトレンチにおいても、南門基壇が掘込地業をともなうこと、掘込地業内の積土を含む広義の基壇土が下位より青灰色土層・黒灰色土層・黄褐色土層の3層から構成されることが、発掘調査からあきらかとなった。今回は、これら各層の構造や築造時期について検討を加えた。

試料と方法 以上の課題をあきらかにするために、Fトレンチでは、自然堆積として認識できる基盤層から層位的に連続するように下位より試料①～⑦の採取をおこなった(国22上・235)。このうち試料⑦については、挟在する礫の粒径や密度が大きく試料調整が困難であったため、今回の分析からは除外した。またKトレンチでは、青灰色土層から層位的に連続するように上位より試料①～⑤の採取をおこなった(国22Bおよび国234)。

その結果、Fトレンチ最下部を除き、ほぼ礫、偽礫を基質とした堆積が認められた。偽礫は地層の中に本物の礫のように紛れ込んだ未固結状の堆積物のことを指す。作土や土木工事といった人為による土壤攪乱の際に形成しやすく、人為形成層を捉える指標の一つである。以下にトレンチ別に結果を示す。

Fトレンチ 堆積層序は発掘調査所見と概ね調和的であり、下位より地山層とする暗灰～暗青灰色砂質互層、造成土層とする暗灰～暗青灰色砂質泥層、さらに整地土層とする褐色～明黃褐色礫質泥層が堆積する。基盤となる砂泥互層は、ラミナの切り合いから下位より砂質泥層、混礫砂質泥層、混礫砂層に分層でき、混砂砂質泥層はさらにa～cに分かれるが、基本的に下部にトラクション構造を持ち上位に向かってクロスラミナ、平滑ラミナがそれぞれ発達する流れ堆積物である。上位の造成土層は、おおよそφ2～4cm程度の偽礫の集積によって形成されている。a～dに区分されるが、a～c層の上面はやや硬化した面があり、盛土をしていく際の工程が反映されている可能性がある。またc層は高師小僧の貫進が顕著であり、この上面で植生の繁茂が可能な一時的な地上面があった可能性がある。この造成土と地山層は層相としてやや類似する。そこでこの地山層の堆積時期を検討するとともに、これらの土壤が上位の造成土に混在する可能性を検証するため、(株)パレオ・ラボに

委託し土壤自体に放射性炭素年代測定をおこなった(表38)。測定対象を絞らないため、様々な由来の放射性炭素を計測することになるが、実質的には挟在する花粉の量がもっとも多く、土壤再利用の傾向を捉える上では双方の土壤を簡便に比較しやすく、効果的である。その結果、地山層より 3.575 ± 25 yr.BP.、造成土層より 3.005 ± 20 yr.BP.、 2.690 ± 20 yr.BP.の年代が得られた。造成土が発掘の成果と堆積構造分析の結果から人為によるものである結論からすると、造成土の年代は大きく古く、この地山土を調整して利用した可能性は高い。その上位の整地土は、偽礫が引き延ばされたような土壤と礫が混在しており、造成土で作土されたような土壤に礫を混ぜ込むような地業がなされた可能性がある。

Kトレンチ 堆積層序は発掘調査所見と概ね調和的であり、下位より青灰色土層とする礫質泥層、黒灰色土層とする砂質泥層、黄褐色土層とする混礫砂質泥層の順に堆積する。全体としては礫、偽礫を基質とした人為堆積が認められた。青灰色土層は3cm程度ごとに円周礫を敷き、黒灰色土層は5～6cmごとに脱水凝固させたような灰色の偽礫を挟み、版築ほど精巧ではないものの一定の地業をおこなっている。黄褐色土層の底部には礫を敷き、その上に偽礫混在土を敷いて平滑面を形成するような堆積構造がみられる。また黒色泥層上面の木質遺体の放射性炭素の年代値は、 1.290 ± 20 yr.BP.となり7世紀末～8世紀初頭の値を示し、大極殿院造宮にともなうものであると考えられる。

(村田泰輔)

6 まとめ

最後に、本調査の主な成果をまとめる。

各トレンチにおいて遺構面の標高を確認

今回検査したA～Kトレンチのすべてにおいて、奈良時代の遺構面を検出し、その標高を確認した。

大極殿院中軸付近のJ・Kトレンチでは遺構面の標高が68.00mで、そこから西に向かって緩やかに低くなり、西面回廊部分のE・Fトレンチでは67.50～67.80mとなる。院外西側のC・Dトレンチでは遺構面の標高が67.20m、同A・Bトレンチでは67.00mと、さらに低い。

また、Kトレンチ③中央区朝堂院内庭部の遺構面の標高は67.20～67.40mで、①大極殿院内庭部や②南門基壇部分と比較すると60～80cm低くなることも判明した。現

状で②・③間に高低差が認められるため、Ⅱ期以降もこの段差が完全には解消されず遺存していたと考えられる。さらに、南門基壇は削平されているため、本来の基壇上面と朝堂院内庭部との比高はさらに大きい。

以上は、奈良時代当時の地形の状況などを考察するための重要なデータとなる。

西面回廊基壇の掘込地業と下層の造成土層を確認

2区・Fトレーニング調査区北壁の土層観察により、大極殿院西面回廊の基壇に深さ40~50cmの掘込地業がともなうことを確認した。これまで、西面回廊については掘込地業をともなわないとの所見が報告されていたが¹⁰⁾、少なくとも南端付近の一部には掘込地業が施されていたことが判明した。これは、大極殿院回廊造営の具体相をあきらかにするための重要な知見となる。

また、基壇掘込地業の下層に展開する暗灰色~暗青灰色の粘土層は地山と見紛うほど均質であるが、土器片と瓦片が少量出土したことや土壤分析の成果から、大極殿院の造営にともなう造成土層であることが判明した。今後は宮内の他の地点でも、このような可能性を念頭に置きつつ調査を進めていく必要があろう。

南門の造営や改造の実態に関する新知見

4区・Kトレーニングにおいて、大極殿院南門SB7801の掘込地業や基壇積土の様相、また北面階段・南面階段の構造などを確認した。

南門SB7801の基壇について、掘込地業の存在とその掘削の様相、積土の単位や積み方の特徴などがあきらかになった。掘込地業は南北長約17.8m、深さ40~70cm（ただし北端3m強の部分のみは深さ80~90cm）を測り、北端の深掘り部分および南肩部分には径20cm前後の円窓が詰め込まれる。掘込地業内の積土を含む広義の基壇土は大きく3層（上から黄褐色土層・黒灰色土層・青灰色土層）からなり、下層の青灰色土層・黒灰色土層および最上層の黄褐色土層の下半が掘込地業内の積土である。黄褐色土層の上半が狭義の基壇土となり、現状では厚さ20~40cmほどの遺存する。

北面階段については、前後2時期分の抜取痕跡（SD20030・20031）を確認したことにより、南門存続中に少なくとも1回の改修がなされていたことが判明した。また、北面階段の下層では階段設置にともなうとみられる掘込地業を検出したのに対し、南面階段には同様の掘

込地業が存在しないことを確認し、両者の施工状況や構造の相違をあきらかにした。

なお、北面階段について、第77次調査などの既往の調査ではⅠ期の礫敷面SH6603A~Cそれぞれにともなう地覆石抜取等の痕跡が遺存し、造営後2回の改修があった可能性が指摘されていたが¹⁰⁾、本調査では1回分の改修痕跡のみを確認し、改修の時期はⅠ-1・2期移行時と判断した。

南面階段についても、第389次調査では地覆石とみられる凝灰岩破片やその据付・抜取溝からなる上層階段SX18793Bを検出し、さらに主として断面調査による断面観察からSX18793Bのすぐ北側に下層南面階段の痕跡SX18793Aを確認したことから、Ⅰ期中に1回の改修がなされた可能性が指摘されていた¹¹⁾。本調査で検出し、南面階段の抜取痕跡と判断した東西溝SD20035は、その位置からSX18793Bに対応する可能性が考えられる。一方、SX18793Aに対応する構造は見出されず（図226C）、本調査では改修の痕跡は確認されなかった。

以上は、既往の調査所見とは異なる内容も多く含み、大極殿院南門の造営の実相、およびその構造や時期的変遷を究明するために欠かせない新知見といえる。

以上が本調査の主な成果である。特に大極殿院南門SB7801や西面回廊SC13400について、既往の調査所見と異なる知見を得られたことは大きな成果といえよう。ただし、それらを大極殿院全体の理解のなかにどのように位置づけるかは、今後も検討を続ける必要がある。

（山本）

註

- 1)『平城報告Ⅸ』。
- 2)前掲註1および『平城報告XII』。
- 3)「第一次大極殿院回廊の調査－第431・432・436・437・438次」『紀要2009』。
- 4)前掲註3。
- 5)「第一次大極殿院広場の調査－第454次」『紀要2010』。
- 6)前掲註2。
- 7)図228は、実際には北西~南東方向の断面であったものを、南北方向に投影して実測・作図した。
- 8)『中央区朝堂院の調査－第389次』『紀要2006』、前掲註1。
- 9)前掲註1および註2。
- 10)前掲註2。
- 11)前掲註8。

III - 2 平城京と寺院等の調査

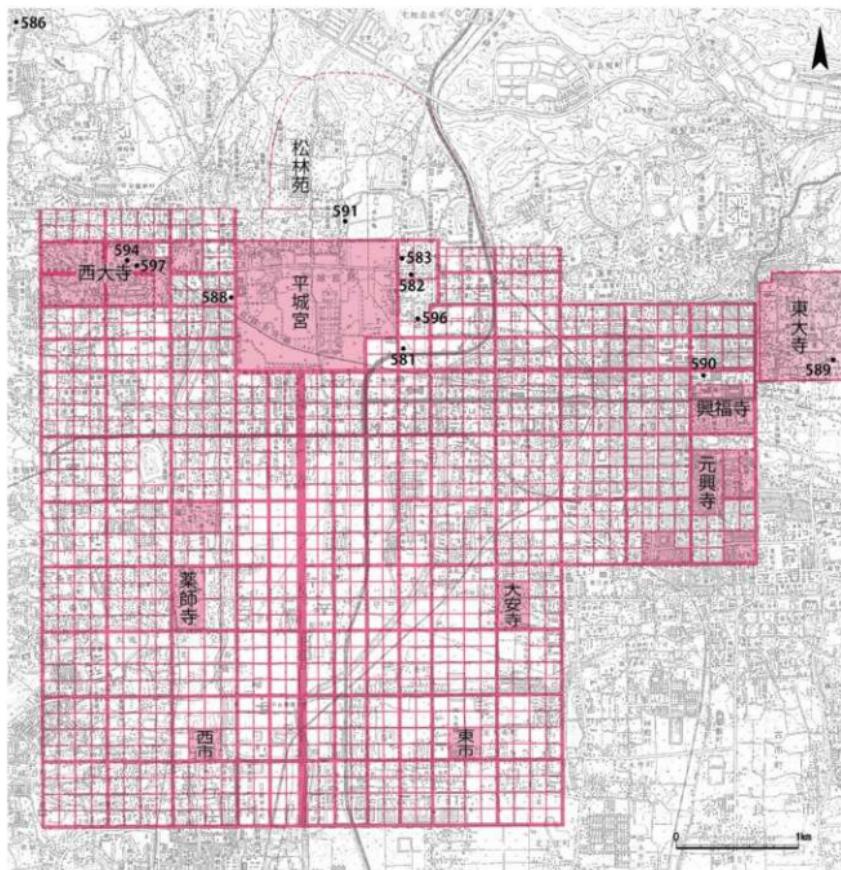


図236 平城京発掘調査位置図 1:40000

平城京左京二条二坊十一坪の調査

—第581次

1はじめに

本調査は、奈良市法華寺町における集合住宅の建設工事にともなう発掘調査である。東西3.0m、南北7.0m、面積21m²の調査区を設定した(図237)。調査期間は、2017年1月16日から1月20日である。左京二条二坊十一坪の南部に位置する。同じ坪の北部における既往調査(平城第279・282-16・563次調査)では、坪の中軸に並び建つ東西棟建物と、その東西に建つ南北棟建物をはじめ、数時期の変遷をもつ比較的規模の大きな奈良時代の掘立柱建物群を検出しており、本調査区では坪の南部の状況の解明が課題であった。

2基本層序

基本層序は、地表から、駐車場舗装(約10cm)、駐車場盛土(約90cm)、耕作土(約10cm)、床土(約60cm)、黄褐色粘質土(遺物包含層、数cm~30cm)、黒褐色土(整地土、調査区東辺にわずかに確認できる)、地山(上から、黄褐色粗砂、灰白色粘土、灰色粘土、緑灰色シルト、暗緑灰色粗砂、暗青灰色シルト)。包含層・整地土・地山のいずれも、本調査区北方の調査(第563次調査)で確認したものとよく似ている。

遺構検出は、調査区東辺にわずかに残る整地土および地山の上面でおこなった。遺物包含層である黄褐色粘質土が、後述する調査区西部で検出した南北溝状遺構SD11065の上面で落ち込むことから、遺構検出面の標高は調査区東部で約60.1m、西部で約59.9mと、西方ほど低い。

3検出遺構

柱列3条、柱穴5基、小穴1基、くぼみ状遺構1基、南北溝状遺構1条を検出した。

南北柱列SA11055 南北1間の柱列、柱間約1.5m(5尺)。調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は、一辺0.4m四方で、深さは不明。

南北柱列SA11056 南北1間の柱列、柱間約1.5m(5尺)。調査区外の四方へ展開する可能性がある。掘方は、一辺0.4m四方で、深さは不明。

南北柱列SA11057 南北1間の柱列。柱間約3.0m(10

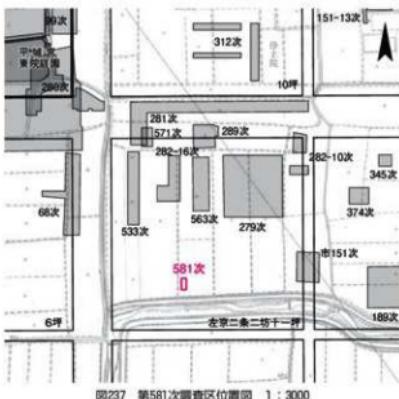


図237 第581次調査区位置図 1:3000

尺)。調査区外の四方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.8m以上で、深さは約1.1m。掘方に、幅約20cm、厚さ約2cmの薄い礎板を据えている。掘方および抜取穴の埋土から藤原宮式軒丸瓦や奈良時代の土師器および須恵器の壺や杯などが出土した。

柱穴SP11058 調査区南東部で検出した方形平面を持つ穴で、柱穴と考えられる。柱列として調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.8m以上で、深さは約0.6m。

柱穴SP11059 調査区南西部で検出した柱穴。調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.5m以上で、深さは約0.3m。

柱穴SP11060 調査区南西部で検出した柱穴。調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は、一辺1m以上で、深さは約0.6m。抜取穴から径10cm、長さ17cmの木材が倒れた状態で出土した。腐食がはげしいため確認を得難いが、柱根や床束など柱材であった可能性が考えられる。抜取穴から奈良時代の土師器壺が出土した。

柱穴SP11061 調査区南東部で検出した柱穴。調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.5m以上で、深さは約1.0m。

柱穴SP11062 調査区北辺部で検出した柱穴。調査区外の東・西・北方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.4m以上で、深さは約0.2m以上。

小穴SP11063 調査区北西部で検出した小穴。調査区外の東・西・北方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.4m以上で、深さは不明。

くぼみ状遺構SX11064 調査区西辺中部で検出したくぼみ状遺構。調査区外の東・西・南方に続く。掘方は一辺1.1m以上で、深さは約0.2mと比較的浅い。



図238 第581次調査区全景(北西から)

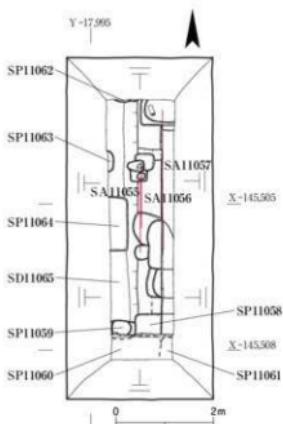


図239 第581次調査区遺構図 1:100

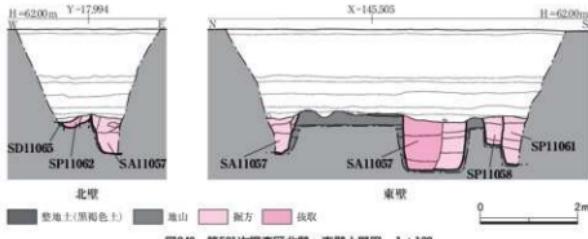


図240 第581次調査区北壁・東壁土層図 1:100

南北溝状遺構SD11065 調査区西半で検出した南北溝状遺構。調査区外の西・南・北方に展開する。幅は0.5~1.1m以上で、深さは0.1~0.4m。南ほど広く、深い。埋土は比較的均質な黒色粘土で、重複する遺構がこの溝の底面で検出されていることからみて、他の検出遺構よりも新しく、また検出した東肩がゆるやかなことから、周辺の遺構群が廃絶した後の沼状堆積である可能性が考えられる。奈良時代後半の猿投産須恵器杯B蓋などが出土した。
(鈴木智大)

6272B、1点は型式不明である。6272Bの1点は南北柱列SX11057から、もう1点の6272Bと型式不明の1点は黄褐色粘土から出土した。また時代不明の軒丸瓦1点が出土した。丸瓦は計2.5kg、平瓦は計4.7kg出土した。ほかに瓦や磚などは出土していない。
(今井晃樹)

5 遺構変遷

奈良時代後半と考えられるSD11065は遺構の重複関係から、他の検出遺構よりも新しい。また柱列はSA11055→SA11056→SA11057と、柱穴はSP11058→SP11059→SP11060→SP11061と変遷する。この他の検出遺構も多くの近接することから、実際はより細かな変遷が想定されるが、調査区が狭小なため順序はあきらかでない。

4 出土遺物

遺構埋土および遺物包含層から土器類および瓦磚類および燃えさしなどが出土した。

土器類 奈良時代の須恵器、土師器が圧倒的に多く、とくに土師器甕の出土が目立つが、出土量は全体でコンテナ1箱程度と少ない。特筆すべき遺物としては、遺物包含層から圓足円面窓の脚台部が1点出土した。
(狩野 恵)

瓦磚類 藤原宮式軒丸瓦が3点出土した。うち2点は

本調査では比較的狭い調査面積ながらも、数多くの遺構を検出した。左京二条二坊十一坪の南部においても、同坪の北部で検出していた遺構群と同等の遺構群が展開する可能性が高いことがあきらかになった。
(鈴木)

平城京左京一条二坊十坪の調査

—第582次・第583次

1 第582次調査

本調査は、奈良市法華寺町における分譲住宅の建設とともに発掘調査である。当初、南北16.0m、東西6.0mの調査区を設定し、のちに東辺南部を東西2.0m、南北2.0m拡張し、合計100m²を調査した(図241)。調査期間は2017年1月30日から2月15日である。当該地は、法華寺旧境内の北方、平城宮の東方に隣接する左京一条二坊十坪の東南隅に位置すると想定される。本調査区の西方で実施した調査では、一条条間路北側溝と考えられる東西溝の北岸を検出している(第293-7次)。また、調査区の南東方や西方で実施した調査(第82-8次および第82-9次)で、底面に湿地状の堆積がある東西溝状落込の北岸を、調査区南西方の調査(第151-19次)では、似た様相の南岸を検出しており、一連の遺構と想定していた(『昭和58年平城概報』)。

基本層序

基本層序は、地表から近現代造成土(約50cm)、床土(約30cm)があり、その下は南半部は橙褐色砂質土(後述、東西溝状落込SX11075埋土上層)となり、北半は橙褐色粘質土(整地土、約5cm)、黄褐色シルト(地山)となる。遺構検出は、南半部は橙褐色砂質土の上面(標高約70.5m)で、北半部は橙褐色粘質土もしくは黄褐色シルトの上面(標高約70.4m)でおこなった。

検出遺構

東西溝状落込SX11075 調査区南半で検出した落込。長さ5.0m以上、幅9.0m以上、深さ2.3m以上。底面は、調査区外の南方へさらに落ち込む。埋土は概ね4層(上から、橙褐色砂質土、橙灰色砂質土、黒色砂質土、焦茶色土)に分けられる。最上層はよくしまった橙褐色砂質土で、上面は奈良時代の遺構検出面となる。橙灰色砂質土および黒色砂質土も埋立土で、後者から大型の自然木が出土した。こげ茶色土は腐植土が主体で、やはり大型の自然木が出土した。底面に数cmとわずかながら砂が堆積する。埋立および構築の時期は、埋土上面で検出した遺構よりも前であるが、いずれの土層からも土器や瓦の出土はなく、時期は確定し難い。第82-8・9次、第151-19次で検出した落込と一連の遺構と考えられ、南北約30m、

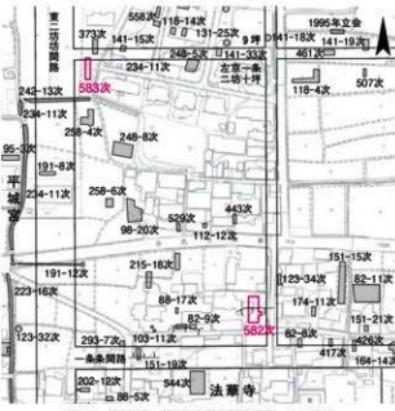


図241 第582次・第583次調査区位置図 1:3000

東西100m以上に渡る。平城京造営時の埋立てと推測する。古墳の周濠の可能性もある。

柱穴SP11076・11077 調査区南部、上述の東西溝状落込の上面で検出した柱穴。両者の間隔は、約1.8m(6尺)である。東方延長部の有無を確認するため、調査区を拡張したが、顯著な遺構はなかった。SP11076からは近世の土器師皿および土釜片が、SP11077からは瓦質土器が出土した。

土坑SK11078 調査区南西部で検出した土坑。深さ約0.2m。奈良時代の土器師壺や須恵器などが出土した。

土坑SK11079 調査区北西部で検出した土坑。深さ約0.1m。中心部に炭化物が集中する。なお、第293-7次など既往調査でも炭化物を含む遺構を検出しており、冶金に関連する施設が周間にあった可能性を示唆する。室町時代および江戸時代の土器が出土した。

土坑SK11080 調査区北東部で検出した円形土坑。奈良時代の遺物のほか、瓦質土器や巴文瓦など中世・近世の遺物が多量に出土した。深さ1.0m以上で掘り下げを止めたため、底面は確認できなかった。江戸時代の瓦質土器や土釜などが出土した。

高まりSX11081 調査区北辺で検出した整地土の高まり。調査区外の北方へ続く。このうち東半は前述の土坑SK11080埋立後に構築されており、段差はさらにその後の耕作による可能性もある。

出土遺物

遺構理土および床土から、土器、陶磁器、瓦磚類、寛永通宝1点、自然木4点が出土した。
(鈴木智大)



図242 第582次調査区全貌（南東から）



図243 東西溝状落込SX11075（南東から）

土器・陶磁器 整理用コンテナ5箱分の土器、陶磁器が出土した。中世から近世にかけての土師器、瓦質土器、土釜、染付などが中心であるが、少量ながら奈良時代の土師器、須恵器も出土した。
（神野 恵）

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類を表に示した（表39）。遺構にともなう軒瓦は以下のとおりである。土坑SK1080からは奈良時代の6721Gb、6760B、施釉磚（釉薬はすべて剥離）とともに鎌倉時代の軒平瓦、近世の巴文軒丸瓦が出土、土坑SK11078からは近世の軒平瓦が5点出土している。
（今井晃樹）



図244 第582次調査区遺構図 1:150

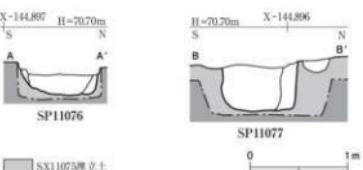


図245 第582次調査区柱穴断面図 1:50

表39 第582次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		軒横瓦	
型式	種	点数	種	点数	種類
巴（中世）	I	6667	A	1	近世
（近世）	4	6721	Gb	1	
型式不明（奈良）	1	6760	B	1	
			難介	1	
			近世	6	
			近代（刻印）	2	
					計
					1
その他					
平瓦（近世・刻印）					1
（近世・カキ印）					1
割翼瓦（近世）					1
鳥食（近世）					1
角残破付目板瓦					1
用途不明遮瓦					5
磚（奈良・施釉）					1
花崗岩（礫石？）					1
計	6	計	12	計	12
丸瓦		平瓦		凝灰岩	
重量	25.188kg	79.935kg	22.6kg	6.075kg	0
点数	135	796	2	2	0

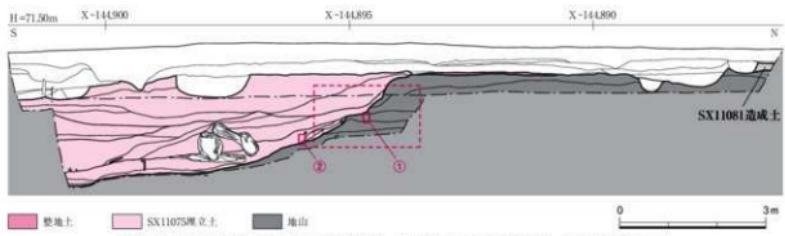


図246 第582次調査区西壁土壌図と試料採取位置 1:100 (図中番号は図247に対応、赤点線は図248に対応。)

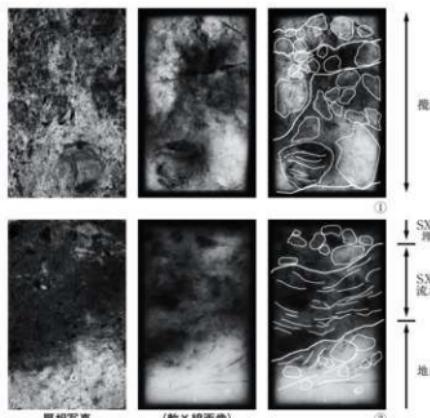


図247 東西溝状落込SX11075にともなう堆積構造
(試料採取層位は図246に対応)

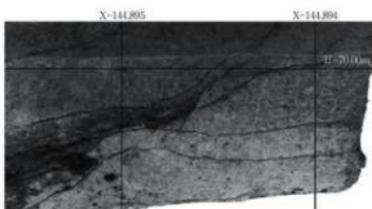


図248 SX11075北側のひびわれ
(オルソ面像は山口敬志作成)

に疊のように紛れ込んだ未固結状の堆積物を指す。作土や土木工事といった人為による土壤攪乱の際に形成しやすく、人為形成層を捉える指標の一つである。ただし偽疊の形成は、人為以外にも河岸や斜面を構成する堆積物の浸食や剥落による土塊の堆積もあるため、偽疊の含まれる層全体の堆積システムを十分に検討する必要がある。また同様の土塊形態には、植物の根抱えにより形成される土壤團粒などがあるが、この場合、粒径は数mmから2cm程度になることから、本報告で観察される土塊には当てはまらない。試料①についてみると、偽疊の形状は角錐状を有しているものが多く、粒径は2~5cm程度の比較的大きなものが多い。円磨や引き延ばしたような変形形状がみられないことから、浸食や運搬といった水の作用の影響は小さく、偽疊の初期形状を維持しているものが多いことが推定される。一方、谷部壁面を調整するような作土や土締めにともなう加重変形もみられず、人為性も示唆されない。そこで改めて層相の確認をおこなった(図248)。SX11075の谷は段丘状を成しており、試料①採取箇所付近は1段目にあたる。この1段目の肩に羽状構造およびロード構造がみられ、その北側には毛細状の砂脈の貫進がみられる。これらの構造は震度5弱以上の大地震の際

地質学的検討

露頭観察から、東西溝状落込構造SX11075の埋土は、その底部に数cm程度堆積する砂層を除き一般的な水成堆積物が認められず、いわゆる自然堆積と認識されるのは未分解の植物遺存体を多く挟む埋土最下層の焦茶色土のみであった。溝状落込構造の規模が比較的大きく、大規模な埋立作業が推察されることから、改めてSX11075の埋土および基盤層の特性をあきらかにするため、詳細な堆積構造の検討をおこなった。検討試料は、露頭において堆積構造の十分な観察の後、地山と認識されるSX11075の中段の肩付近(試料①)と、地山を一部にかけるようにSX11075埋土(試料②)を採取した¹⁾(図246)。

解析結果を図247に示す²⁾。まず全体として層の構成がほぼ偽疊からなる特徴がみられた。偽疊とは地層の中

に、地下水位の比較的高い軟弱地盤で発生しやすい、液状化にともなう一連の地質構造として認識されている。このため試料①に認められる偽縫は、この地震動にともなう地質の破壊を示すいわゆる地震痕跡である可能性が高い。砂脈の吹き出し（噴砂）は、SX11075によって切られており、地震の発生時期はSX11075埋立以前とわかる。試料②の地山にも1~2cm程度の偽縫がみられるが、土塊はラミナ構造を構成する一部になっており、浸食によって形成されたマッドクラストとして認識され、自然堆積と考えられる。この構造は直上のSX11075埋め立て土底に堆積する流水構造に顕著にみられる。この層に挟在する偽縫は5mm~2cm程度、流下方向に引き延ばされるような形状をもち、マッドクラストとして典型的である。この層の上位には同程度の粒径の偽縫が、堆積構造をともなはず堆積している。SX11075の埋め立ては、この時期から本格化した可能性がある。（村田泰輔）

まとめ

坪の南東隅に想定される本調査区は、近現代における削平が多かったものの、奈良時代に測る可能性がある土坑や中近世の柱穴や土坑などを検出した。

また、調査区南半では、周辺の調査区で検出していた東西溝状落込の北岸を確認し、全長が100m以上におよぶことがあきらかになった。平城京遷都より前のこの地域の様相や平城京造営期の土木工事を考える上で、貴重な成果といえよう。（鈴木）

2 第583次調査

本調査は、奈良市法華寺町における個人住宅の建設にともなう発掘調査である。当初、東西3.0m、南北10.0mの調査区を設定し、のちに南方に3.0m拡張し、合計39mを調査した（図241）。調査期間は2017年1月30日から2月15日である。

当該地は、法華寺旧境内の北方、平城宮の東方に隣接する左京一条二坊十坪の西北隅に位置すると想定される。しかしながら、周辺地域における畦畔の乱れや、既往の調査（第248~5次・第373次など）で一条条間北小路に関連すると断定できる遺構が検出されていないことから、坪の北辺については不明確であった。

基本層序

基本層序は地表から、宅地造成土（約30cm）、床上（約



図240 第583次調査区全景（北東から）

30cm）、茶褐色土・灰褐色土（遺物包含層、約20cm）、黒褐色土（炭化物・遺物多含、約10cm）となり、その下は、北部は黒色土（炭化物・奈良時代前初頭から前半の土器など遺物多含、約5cm）、黄褐色土（整地土、約40cm）、緑灰色土（地山）、南部は黄色土（整地土）、緑灰色土（地山）と続く。遺構検出は、黒褐色土および黄褐色土の上面（標高約72.2m）でおこなった。

検出遺構

東西溝SD11090 調査区の中部で検出した東西素掘溝。幅約4.0m、深さ約0.7m、南岸の立ち上がりは緩やか。埋土は大きく5層にわかれ、埴堀・羽口・鉄滓・銅滓・炉壁片・炭化物などを多く含み、冶金に関連する廃棄物と考えられる。最上層から圓足円面鏡2点が出土したほか、漆付着土器や転用硯が多く出土した。全体的に土師器高环および漆付着土器が多く出土した。またこれらのなかには、後述する土坑SK11095付近の黒褐色土から出土した須恵器・土師器と接合関係にあるものが含まれていた。

東西溝SD11091 東西溝SD11090の南肩で検出した東西素掘溝。幅約1.2m、深さ約0.5mで、断面形状は台形を呈する。埋土は、大きく2層に分かれ、下層から漆付

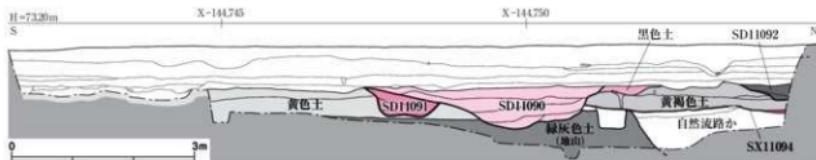


図250 第583次調査区西壁土層図 1:80

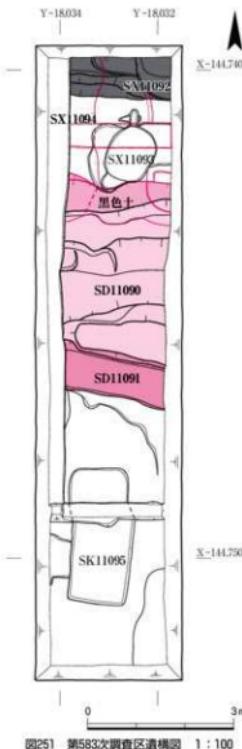


図251 第583次調査区西壁土層図 1:100

着土器と転用器が多く出土した。前述のSD11090の最上層と同じ傾向を示しており、両造構は一連の工程で埋め立てられたと推測できる。

くぼみSX11092 調査区北辺で検出したくぼみ。一条条間北小路南側溝の可能性を考えて調査したが、完掘したところ、くぼみが連なる様相となった。詳細な性格は不明である。奈良時代の土師器や須恵器などが出土した。

くぼみSX11093 くぼみSX11092の南で検出したくぼみ。坪の北辺を区画する東西塀の柱穴となる可能性を考えて調査したが、整地土上面の浅いくぼみであった。奈良時代の土師器および須恵器などが出土した。



図252 SD11091(左)・SD11090(右) 西から

炭層SX11094 調査区の北西部において、黄褐色土の下層で検出した。東で岸状に立ち上がる。奈良時代前半の須恵器が出土した。

土坑SK11095 調査区の南部、黄色土上面で検出した長方形土坑。幅約1.2m、長さ約2.7m、深さ約0.3m。埋土は炭化物を多く含み、風字硯、奈良時代前半の須恵器および土師器が出土した。
(鈴木)

出土遺物

道構理土および整地土などから、土器・土製品、瓦磚類、冶金関連遺物などが出土した。

土器・土製品 整理用コンテナ10箱分の土器、土製品が出土した。ほとんどが奈良時代のものである。SD11091および黒色土からは奈良時代初頭から前半期の土師器杯A、須恵器杯A、杯B、杯B蓋、鉢Aなどが出土地した。その中には、漆付着土器や転用硯も一定量含まれる。SD11090からは奈良時代後半の土器が比較的多く出土した。土師器は碗A(1)、杯A(2・3)、皿A(4~6)、高杯(7)、壺などがあり、高杯やや多い特徴がある。須恵器は杯A(8)、杯B(9~13)、杯B蓋(11~13)のほか、長頸壺の蓋(10)や、正置焼成の圓底円面硯も1点(14)出土している。SK11095から硯面が使用によって摩滅した風字硯(15)と高杯の脚部の上端を転用した紡錘車(16)が出土した。
(神野)

瓦磚類 出土した瓦は、軒丸瓦3点、軒平瓦1点、丸瓦25kg、平瓦4.1kgである。軒丸瓦は奈良時代の630IC 1点のほか、奈良時代の瓦が1点、近世の瓦が1点、軒平瓦は藤原宮式の6641Cが1点出土した。
(今井)

冶金関連遺物 東西溝SD11090・SD11091および炭層SX11094から出土した。坩堝片、轆の羽口片、炉壁片、

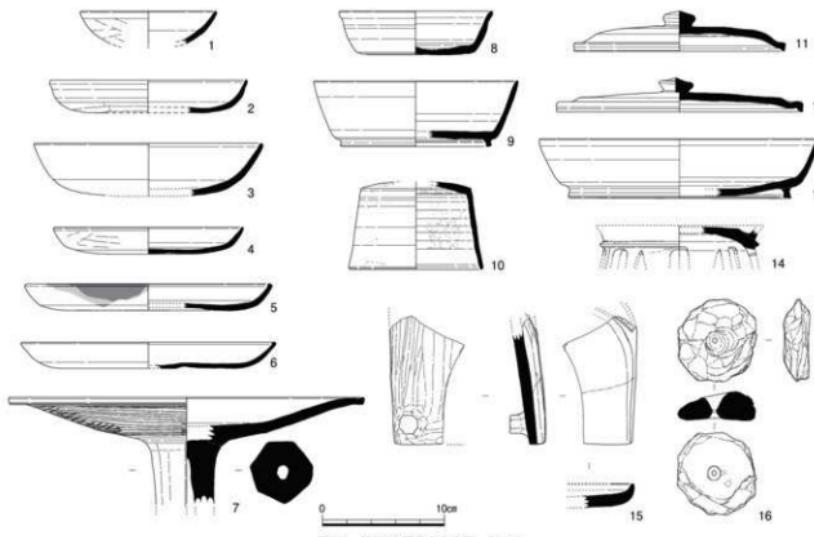


図253 第583次調査出土器 1:4

銅鋤、鉄鋤（輪形を含む）、粒状鋤、鍛造剥片、鋳型片、被焼漆などからなり、出土遺構による組成の差は見られない。特筆すべき遺物に、粒状金（図254-1）と溶銅（図254-2）がある。前者は直径2.3mm、厚さ1.4mm、重量67mgで、蛍光X線分析により金であることを確認した。平面形はややつぶれた円形で、片面が比較的平滑であるのに対し反対側の面は凹凸が著しい。鋳造の際に生じた湯玉か、何らかの装飾品の部分の可能性がある。希少品である金が廃棄的な脈絡で検出された珍しい事例といえる。後者は長さ6.8cm、幅5.6cm、厚さ6mm、重量31.2gで、蛍光X線分析によりヒ素を含む青銅であることを確認した。形態からは銅金具が被焼・溶解した破片の可能性も排除できないが、全体的な表面の特徴を重視し、鋳造の際に生じた余分な湯が固化したものと判断した。端部に一部切断・研磨痕が確認されるため、青銅素材として使用された残片が廃棄されたものと考えられる。総じて、これらの冶金関連遺物は金・銅・鉄、そして鋳造および鍛造と関連するものを幅広く含んでいる。調査区周辺における冶金関連活動を復元する上で重要な発見といえる。

（庄田慎矢）

まとめ

当初、一条条間北小路の南側溝が想定された調査区北邊では、くぼみが連なる様相を検出した。道路側溝と断定できる状況ではないが、南側溝に関連する可能性が残る。一方、調査区中部以南では、炭化物を多く含む整地土

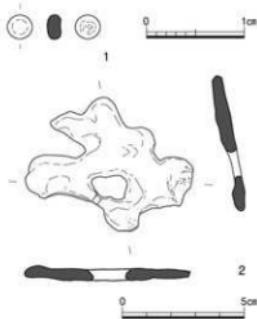


図254 東西溝SD11091出土冶金関連遺物

を確認し、土坑や東西溝の埋土からも冶金に関連する遺物が極めて多く出土した。また遺構面が焼けて硬化するような状態ではないことから、本調査区は、近傍に所在した冶金関連施設の廃棄に関連する一角と想定される。平城宮の東方、法華寺の北方の区画の利用状況を考える上で重要である。

（鈴木）

註

- 1) 試料の採取にあたっては、14×22×4cmのスチロール角型ボックスを用いて堆積層を切り出した。
- 2) 切り出した試料は研究所に持ち帰り、層相観察、層相の写真撮影をおこなったあと、フジフィルム社製X線撮像装置(μFX-1000)とイメージングプレートを用いて地質構造の撮像をおこなった。イメージングプレートのスキャナにはフジフィルム社製BAS-5000を用いた。

平城京右京一条二坊四坪の調査

—第588次

1はじめに

本調査は、奈文研本庁舎建設とともに確認調査である。本庁舎への配管工事に先立ち、遺構の現存状況を確認すべく東西6m、南北7m、面積42m²を調査した。調査期間は2017年6月5日から6月15日である。

奈文研本庁舎地区の建物部分については、2014年度に約3600m²におよぶ発掘調査（第530次調査）をおこない、一条南大路や西一坊大路などの遺構を検出した。これを受け、新庁舎の大幅な計画変更をおこない、2015年度に追加の発掘調査（第546次調査、第560次調査）を実施した。本調査区は、第546次調査区北辺西端および第560次調査区東北端と一部重複する位置にある。

2 基本層序

基本層序は、現地表から、表土（約10cm）、搅乱土（約65cm）、水田床土（約15cm）、旧耕土（約10cm）、橙灰褐色砂質土（遺物包含層、約10cm）、黄灰白色粘土（平安時代整地土、約5cm）、暗灰色もしくは黒褐色粘土（奈良時代整地土、約20cm）、黄白色粘土・黒褐色粘土（地山）である。

3 検出遺構

平安時代の遺構

柱穴および小穴を14基を検出した（図255・258）。遺構検出面の標高は68.9～69.0mである。柱穴および小穴の平面形は方形と円形があり、いずれも直径0.2～0.4m程



図255 第588次調査区全景（南東から）

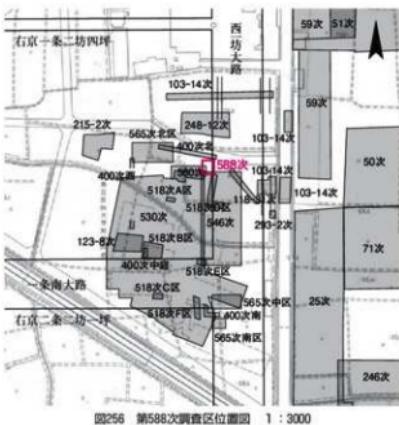


図256 第588次調査区位図 1:3000

度、深さ0.05～0.3m程度である。埋土には灰褐色砂質土が多く見られた。このうちSP3451～3453は、それぞれ調査区南の第546次調査で検出したSB3252～3254を構成する柱穴の可能性がある。

柱穴SP3451 調査区東辺で検出した一辺0.3m、深さ0.42mの不定形の柱穴（図257）。

柱穴SP3452 調査区中央部で検出した一辺0.3m、深さ0.62mの円形の柱穴。

柱穴SP3453 調査区西部で検出した一辺0.3m、深さ0.43mの方形の柱穴。

奈良時代の遺構

東西溝1条、小穴2基を検出した。遺構検出面の標高は約68.9mである。

東西溝SD3454 調査区東半中央部で検出した東西溝。幅約1.1m、長さ約2.4m分を検出した（図258・259）。調査区中央部でとぎれており、西には続かない。深さは、今



図257 柱穴SP3451断面（北から）

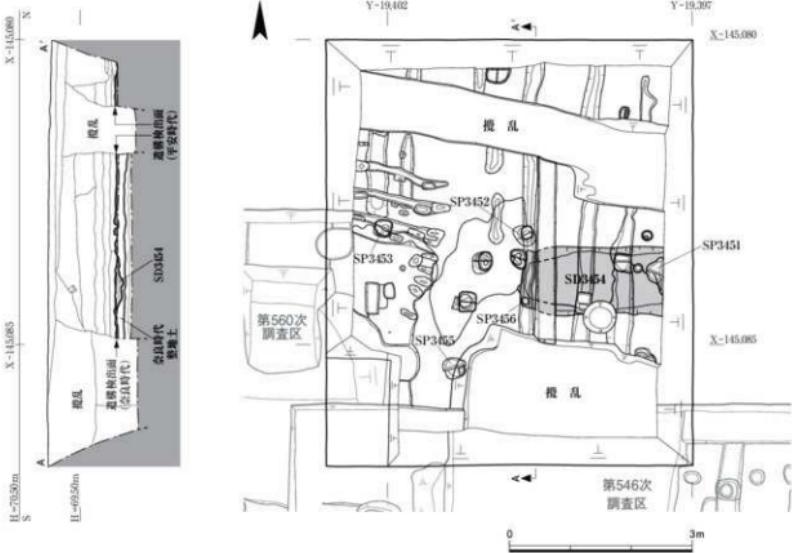


図258 第588次遺構図・土層図 1:80

回検出した部分の東端で0.25m、西端付近で0.1mであり、東に向かって傾斜している。溝内には特徴的な橙褐色紗質土が堆積しており、埋土内から奈良時代と思われる土師器片が少量出土した。

小穴SP3455 調査区南西部で検出した小穴。平面円形を呈し、直徑約0.3m、深さ約0.15mである。

小穴SP3456 調査区中央部で検出した小穴。直徑約0.2m、深さ約0.1mで、東西溝SD3454底面で検出した。



図258 SD3454堆積状況(西から)

4 出土遺物

出土遺物は、須恵器・土師器・黒色土器の細片および丸瓦・平瓦の細片のみ少量出土した。

5 まとめ

今回の調査では、平安時代の柱穴及び小穴14基と奈良時代の東西溝1条および小穴2基を検出した。平安時代の柱穴3基は、調査区南の第546次調査で部分的に確認した建物SB3252~3254の柱穴と一連である可能性がある。奈良時代の東西溝SD3454は、坪内の排水施設と考えられ、東に向かって傾斜している。このことから、調査区東2mに位置する西坊大路の西側溝に流れ込んでいたと推測できる。築地の痕跡は確認できていないが、その部分の暗渠の可能性があろう。坪内の土地利用を考える上で貴重な所見を得ることができた。

なお、検出したすべての遺構を保存するため、施工はこれらの遺構を避けるかたちでおこなわれた。

(山藤正敏)

中山瓦窯の調査

—第586次

1はじめに

本調査は、史跡奈良山瓦窯跡の中山瓦窯跡西方隣接地における住宅の新築工事にともなう保存目的の発掘調査である(図260)。調査区は建替住宅の敷地内において、建物の建設位置を含む南北6m、東西9mの計54m²の範囲を設定した。調査区東端にて、灰原が調査区外東方に延びることを確認したため、南北3.5mの幅で、東側に1m拡張した。調査面積の合計は57.5m²。調査期間は2017年4月17日から20日まである。地表下約15cmまで擾乱を除去し、遺構は地表面で検出した。なお本調査は遺構面と遺構の広がりの確認を主目的としており、遺構および擾乱の掘削は最小限にとどめた。調査区西半はほぼ擾乱および近現代の盛土で、調査区の東半分で奈良時代の遺構を検出した(図261)。

2 基本層序

調査区の東方及び北方は丘陵であるが、切土によって現状の調査地は平坦である。基本層序は、地表から表土(約5cm)、擾乱土(約15cm)、地山(明黄褐色シルト)の順で、南半の一部に整地が広がっており、地山は緩やかに南に向かって下がる。

3 検出遺構

調査区東部から南部に広がる灰原を検出した。また調査区の一部および断面での確認にとまるが、調査区東端で窯体、南北に並ぶ瓦列1条、瓦窯の床土、調査区東部で瓦窯にともなう排水溝などを検出した(図262)。

瓦窯SY370 調査区東部において平面・断面で部分的に検出した瓦窯。焚口部の窯体および窯体の据付、床面、灰原SX371A・Bを確認した(図263)。窯体は2回分を検出しておらず、新しいものは高さ約10cm、幅約15cmで、南北約1.2m分を確認した。その据付は幅約30cm、深さ約15cmで、平面および断面で確認した。また断面において窯体および窯体の据付の下部に深さ15cm以上の床面を確認した。古い窯体は高さ約30cm、幅約25cmで新しい窯体の据付に一部壊される。

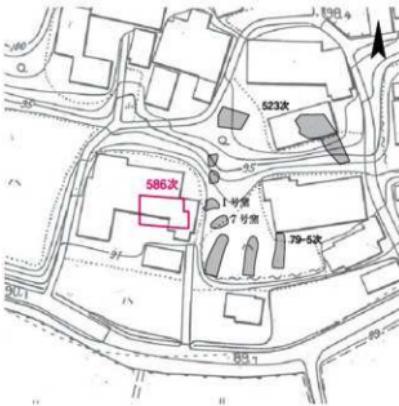


図260 第586次調査区位置図 1:1000



図261 第586次調査区全景(北から)

なおSY370の前面(西方)に位置する南北瓦列SX372・南北溝SD374~377は瓦窯SY370にともなうもので、瓦窯の前面に設けられた排水溝とみられる。

灰原SX371A・B SX371Bは調査区の南部から東南部にかけて平面で検出した灰原(図262・264)。断面で確認した厚さは約5~12cm。SX371Aは調査区南部中央付近と東南部の断面で確認した灰原で、厚さは10cm以上。SX371A・Bの間に2時期分の整地(以下、上層整地・下層整地とする)を確認した。

南北瓦列SX372 窯体の西方の瓦列で溝状に南北に並び、幅約30cmで約3.4m分を検出した。灰原SX371Bと重複する部分ではSX372が灰原SX371の上に位置する。断面を確認できていないが、ごく浅い溝とみられ、北端は削平、南端は擾乱により壊されている。

東西溝SD373 東端がSX372に接続する幅約25cmの東西溝。西端は擾乱により壊される。約0.5m分を検出した。

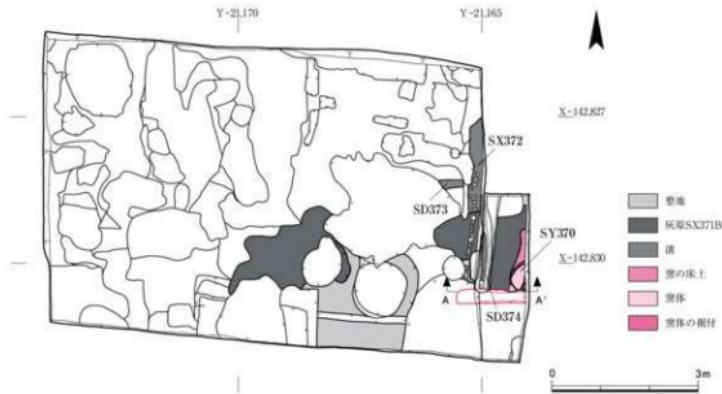


図262 第586次調査区遺構図 1:100

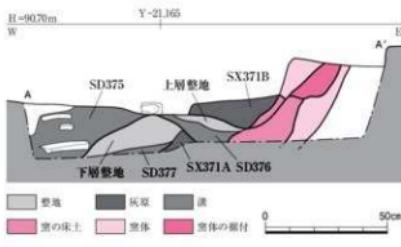


図263 SY370断面図 1:20



図264 調査区東部の窯体・灰原(南西から)

南北溝SD374 調査区東南部の平面で確認した南北溝。幅約30cm、深さ約5cmで、約2m分を検出し、南端部に焼土の塊が遺存する。

南北溝SD375 調査区東南部の断面で確認した南北溝。幅約30cm、深さ約20cm以上で下層の整地より掘り込む(図263)。

南北溝SD376 調査区東南部の断面で確認した南北溝。幅約50cm以上、深さ約20cm以上で下層の整地より掘り込まれ、上層の整地に覆われる(図263)。

南北溝SD377 調査区東南部の断面で確認した南北溝。幅約25cm以上、深さ約5cm以上で下層の整地に覆われる(図263)。

4 出土遺物

奈良時代の瓦を主体とした丸瓦・平瓦、磚および奈良時代の土器器・須恵器片が少量出土した。(岩戸晶子)

5まとめ

本調査により中山瓦窯の遺構が西方に展開することがあきらかになった。今回検出した瓦窯SY370の窯体は、中山瓦窯の1号窯の南壁の端部にあたる可能性があり¹⁾、南北の瓦列SX372は瓦窯の前面に設けられた排水溝の底部と考えられる。灰原SX371Aも一部、攪乱で途切れているが、窯体から一連で統いており、1号窯と一連の遺構と推察される。また平面および断面で少なくとも2基の窯体、2回の整地、2時期分の灰原SX371A・B、4条の南北の排水溝SD374・375・376・377を検出しており、焚口部の改修が複数回おこなわれたことがわかる。本調査では部分的な検出にとどまつたが、SY370およびその他の瓦窯の改修を含めた総合的な検討については今後の発掘調査に期待したい。(海野)

註

1) 平城第79-5次で検出した1号窯の延長線上からや位置が南方にずれるため、7号窯の可能性も考えうる。

東大寺東塔院の調査

—第589次

1 はじめに

東大寺では、「東大寺境内整備基本構想」にもとづき、2014年度から「東大寺境内史跡整備第一期計画」として、境内整備事業を開始した。その一環として、東大寺、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿原考古）および奈文研により、史跡東大寺旧境内発掘調査団を組織し、2015年度以降、境内史跡整備事業に係る調査として東塔院跡の発掘調査をおこなってきた。2015・2016年度には、おもに東塔基壇の発掘調査をおこない、奈良時代の創建塔と鎌倉時代の再建塔の両基壇および塔の規模や構造に関するデータを得たほか、平安時代の大規模な改修の痕跡も確認した¹⁾。今回の調査は、東塔を取り巻く回廊および門の規模や構造の解明を目的とし、東大寺旧境内第172次調査（奈文研平城第589次）として実施した。

今回の調査では、5～7区の3か所の調査区を設定した（図265）。5区では南門のはば全城と南面回廊の一部を対象とし、創建、再建基壇と基境外周の様相把握を目的とした。6区では東塔院東門の位置と遺存状況の確認、7区では西門の位置と遺存状況の確認のほか、東塔基壇西辺の遺存状況の確認を目的とした。調査面積は合計598.5m²（5区：438.5m²、6区：74m²、7区：86m²）で、調査期間は2017年7月19日～11月22日である。

2 東塔院の沿革

東塔院は、大仏殿院の南東に位置し、七重塔とそれを閉む回廊などからなる。『東大寺要録』や正倉院文書などによると、塔は天平宝字8年（764）頃に完成していたとみられ、回廊の造営もほぼ同時に進行していたようである。治承4年（1180）、平重衡の南都焼討により、東塔院は東大寺の他の堂宇とともに灰燼に帰す。その後、大勧進重源により東塔院の再興が企図されるが、その完成を見ずに重源は入滅する。再興事業は第二代大勧進の榮西、さらに第三代行勇へと引き継がれ、1220年代に塔は一応の完成をみたようである（『百鍊抄』・『明月記』）。これにやや遅れて回廊も再建されたと目される。しかし、この再建の塔も康安2年（1362）に雷火によって焼失し

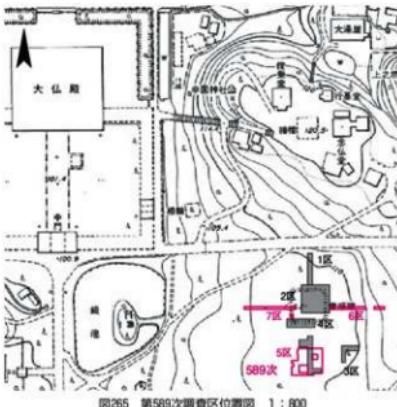


図265 第589次調査区位図 1:800

た（『嘉元記』）。

調査前の東塔院跡は、塔基壇の高まりの周囲が既ね平坦であるのに対し、その外側は塔基壇をコの字状に取り囲むように東方で標高がやや高く、西方は緩やかに下る地形であった。南門周辺の現地表は、塔基壇南辺と比べて約50cm高い平坦面をなす。なお、2016年度の調査では、南門の南北雨落溝と想定される溝を検出し、梁行規模を約14mと想定した。

3 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、南門および南面回廊、東門と西門基壇、東塔基壇である。このうち、東門と西門では、ともに基壇と考えられる土とその周囲の瓦溜を確認したほか、西門東面では瓦溜の下に石敷が遺存することを確認した。これらは東西両門に関わる遺構である可能性が高いが、詳細は今後の調査に期したい。以下では、南門および南面回廊とそれに付随する遺構について詳述する。図266に5区の遺構平面図を示す。

再建南門 5区において、再建南門の礎石抜取穴を、樹木により調査できなかった部分を除いてすべて検出した。礎石は残存しない。再建南門は桁行3間、梁行2間の東西棟礎石建物である。規模は桁行約12.9m（中央間15尺、両脇間14尺）、梁行約7.2m（12尺等間）。軒の出は南北ともに約3.6m（12尺）と推定される。東西には南面回廊が取り付く。それぞれの礎石抜取穴の平面規模は1.3～1.6



図266 第589次調査5区遺構図 1:150

m、深さは検出面から30~40cm。ロ二、ハ一には根石が残る。

再建南面回廊 南門との取り付け部分を東西で1間分ずつ検出した(東2の礎石列は調査区東壁の断面観察による)。南門と同様に抜取穴を検出した。礎石は残存しない。南面回廊は複廊で、梁行は約6m(20尺)。柱間寸法は桁行、

梁行とも約3m(10尺)等間と推定され、軒の出は南北ともに約2.7m(9尺)と推定される。それぞれの礎石抜取穴の平面規模は1.1~1.4m、深さ30~50cmで、南門よりもやや小さいが深い傾向がある。東イ1には根石が残る。

南門、南面回廊基壇上面には鎌倉時代の瓦を含む、再建建物廃絶後の堆積層を確認した。これにより礎石の据

付掘方は土層断面のみでの検出にとどめた。

再建南門・南面回廊基壇 南門および南面回廊の基壇は一体で造られる。両基壇は、南門と南面回廊との東西の取り付き部分で屈曲部を捉えたものの、基壇外装は南門南面の一部に痕跡をとどめるのみであり、規模の正確な数値は示しない。基壇高は北雨落溝の底面から最大で約1.2m、南雨落溝の底面からは約0.5mであるが、後述するように南門東半の南雨落溝は再建直後には存在していないと考えられ、基壇南辺はかさ上げされたとみなし。なお、現在は南門、南面回廊の両基壇上面がほぼ平坦であるが、礎石抜取穴は南門が浅く南面回廊が深い傾向があるため、本来南門の基壇のほうが高かった可能性がある。

基壇周囲には外装材は残存しない。北面ではその抜取痕跡も確認できておらず、北雨落溝の瓦の堆積以前に外装材は抜き取られたか、または石材の破碎片も認められないことから元来存在しなかったとも考えられる。一方、南門基壇南面では幅30cm程度の東西の溝状遺構2条を検出した。これらは、それぞれ地盤石据付掘方とその抜取痕跡とみることができる。断面調査によると、これら2条の遺構の直下に、別の2条の溝状遺構を確認して



図267 南門・南面回廊の北雨落溝（南東から）

おり、後述する南雨落溝の改修痕跡を根拠とすると、重複関係の古い方の溝状遺構が再建当初の地盤石据付掘方とその抜取痕跡であると推定できる。

再建南門・南面回廊の雨落溝 基壇の南北で確認したが、北面と南面とで様相が異なる。北雨落溝は南面回廊と南門基壇に沿う最大幅約2.3mの素掘溝。深さは北側の検出面から約50~75cm（図267）。溝内からは、軒瓦を含む鎌倉時代の多量の瓦が密集して出土したほか、炭化材や鉄釘、壁土とみられる白土付きの焼土片などが出土した。また北西入隅部では鬼瓦と鳥食瓦が近接して出土するなど、建物倒壊時の状態をある程度とめている可能性がある。廃絶時期は出土土器から南北朝期と考えられる。改修等の痕跡は認められない。なお、この北雨落溝には北（東塔側）からの溝が接続する可能性がある。

南雨落溝は、南門の東西で様相が異なる。東方では南門と南面回廊との東の取り付き部分で南に折れる。西方では断面調査と部分的な平面検出のみだが基壇に沿って参道の西端で南に折れると考えられる。東方のL字の屈曲部は南門基壇東端の延長部分にあたり、雨落溝の西岸に安山岩の亜角砾（径20~40cm）を並べて護岸とする（図268）。規模は幅約2.1m、深さ約30cm。溝内からは北雨落溝と同様に鎌倉時代の多量の瓦のほか、炭化材や鉄釘、焼土片などが出土した。この東方の南雨落溝は、鎌倉時代の瓦を含む堆積土（白色粘質土）とその上層の整地土を掘り込んでいる。南門南雨落溝の掘削が塔再建に遅れるなどした場合、整地土に鎌倉時代の瓦が混入する可能性は捨てきれないが、白色粘質土が自然堆積と考えられ



図268 南門・南面回廊の南雨落溝（南から）

ることを根拠とすれば、再建当初ここには掘り込みをもつ雨落溝が存在せず平坦面であった可能性がある。

再建南門の階段 階段の痕跡は明確ではない。しかし、基壇北辺の中央で安山岩礫（径20~30cm）を数石検出しており、この部分が階段に関わる可能性がある。一方、南辺では参道縁石の石列を検出したのみで、階段は存在しないか削平された可能性がある。

参道 南門基壇南面に取り付く。東西両縁に安山岩や花崗岩、凝灰岩の切石（長さ20~80cm）を並べて縁石とする（図269）。参道幅は東西端間で約4.5m（15尺）で、南門の中央間の規模と一致することから、再建建物の参道と考えられる。この参道は、先述の南雨落溝と同様に鎌倉時代の瓦を含む整地土の直上に構築されており、その構築時期は南門東方の南雨落溝改修時と同一時期である可能性が高い。この参道廃絶後に新たに参道がつくられる（図269）。玉石状の礫（径10~15cm）を南北に2列並べて縁石とする。参道幅は約2.3m。構築時期は不明であるが、再建基壇廃絶後のものと考えられる。

創建南門および南面回廊 南門、南面回廊とも建物に関わる痕跡は確認できていない。ただし、基壇に関しては基壇北西の断削調査により基盤層の落ち込みを確認し、南西端の断削調査では奈良時代の瓦のみを含む溝状造構を、基壇中央の断削調査では鎌倉時代の瓦を含む白色粘質土層の直下に溝状造構を確認している。これらの造構や落ち込みは確実に再建基壇を廻る痕跡であり、創建基壇に関わる可能性が高い。



図269 南門に取り付く参道（南から）

4 出土遺物

整理用コンテナ800箱分の瓦片（丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・斐斗瓦・鬼瓦・鳥衾瓦・雁振瓦・道具瓦）が出土した。大部分は鎌倉時代のもので、割合は少ないが奈良時代のものも認められる。鎌倉時代の南門、南面回廊の南北雨落溝からは倒壊にともなうと考えられる瓦が多量に出土したほか、基壇上面を覆う後世の堆積土中からも数多く出土した。そのほか整理用コンテナ4箱分の土器片（土師器・須恵器・瓦器等）や、鉄釘や鉄錠などの鉄製品も200点以上出土した。これらが多くも南北雨落溝から出土した。

5まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の再建南門および南面回廊の建物の規模をあきらかにし、基壇の平面規模や構造を検討するためのデータを得た。再建南門は桁行3間、梁行2間の礎石建物、同南面回廊は梁行2間の複廊として復元できる。これらの礎石抜取穴の配置は、江戸時代の『東大寺寺中寺外總絵図并山林』（17世紀）に描かれた礎石の配置に一致する。東塔とは異なり基壇外装は認められなかったが、南門、南面回廊の雨落溝の構造があきらかになったことは、特筆すべき成果である。その様相は南門の南北で異なっており、北面では南面回廊と南門に一連の雨落溝が設けられているのに対して、南面東半では南門と南面回廊の取り付き部分で、L字に折れることがあきらかとなった。このL字溝は、南面中央の参道とともに、再建当初ではなくやや遅れて開削されたものと考えられる。この開削の背景には、南門東方からの雨水処理に対する改善の意図があったと想定され、東塔院全体の排水計画を考える上でも重要な知見である。

一方で、未解決の課題も数多く残っている。創建期の基壇および建物に関しては、ほとんど情報が得られていない。また、創建以前の地形に関する情報も不足している。南門基壇がいかなる地形にどのように構築されたかを含めて、次年度以降の課題である。

（芝康次郎・神野 恵・南部裕樹・福田さよ子／東大寺、廣岡孝信／根考研）

註

- 1) 東大寺『東大寺東塔院跡』東大寺境内整備事業調査報告第1冊、2018。

西大寺旧境内の調査

—第594次

1 はじめに

本調査は、奈良市小坊町における倉庫の建設工事とともにう发掘調査である。南北30m、東西28mの調査区を設定し、8.4m²を調査した(図270)。調査期間は11月6日から11月7日である。西大寺薬師金堂(平城第409・422次調査)の南西方、前庭部の位置にあたると想定され、本調査区北方の調査(市SD第29次調査)では、標高約75.0mで、奈良時代および室町時代の遺構が検出されていた。

2 基本層序

基本層序は、地表から碎石（約10cm）、真砂土（約10cm）、黒褐色土（約30cm）、灰褐色砂質土（床土か、遺物をわずかに含む、約10cm）、明黄褐色粘質土（地山）。遺構検出は、明黄褐色粘質土の上面（標高約75.1m）でおこなった（図271・272）。

3 検出遺構と出土遺物

土坑SK1141 調査区西部で検出した土坑。掘方は平面円形を呈し、南北約1.4m、東西は12m分を検出し、西端のみ一部未検出だが、ほぼ円形を呈する。深さは約0.3m。底部には、幅約1cmの竹を用いた径103cmの籠が据えられた状況で残存しており、桶を据えていたものとみられる。裏込土は、灰色砂質土混じりの明黄褐色粘質土である。埋立土は暗灰褐色砂質土で、瓦片や染付・瓦質棍鉈・土釜・江戸時代後期の土師器皿などを含み、江戸時代後半に廃絶した様相を示す。後述する東西溝SD1142と重複し、これよりも新しい。

東西溝SD1142　調査区中央部で検出した素掘りの東西溝。幅約0.3m、深さ約0.1mで、東西約1.4m分を検出し、少なくとも調査区外の東方へ続く。検出した範囲では、底面の標高はほぼ水平である。埋土は灰色砂質土で、明確な流水の痕跡は認められない。奈良時代の平瓦片および古代の須恵器片を含み、中世以降の遺物は含まれないことから、古代に溝る可能性がある。前述のSKII141よりも古く、後述のSKII143よりも新しい。

小穴SK1143 調査区東部で検出した小穴。東西約05



図270 第594次調査区位置図 1:2000



図271 第594次調査区全景（北西から）

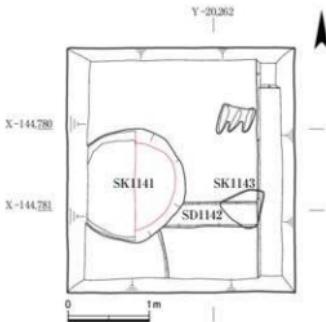


図272 第594次調査区構造図 1:60

m、南北約0.5mの不整形平面を呈する。深さは0.1m以上。前述の東西溝SD1142と重複し、これよりも古い。

4 おわりに

本調査区では、古代に溯源する可能性がある東西溝および小穴を確認したが、西大寺金堂院の前庭部の舗装などは、後世の削平によって失われたものと考えられる。一方、近世後期に廃絶した土坑の存在から、当該地域における近世以降の活動を知ることができた。（鈴木智大）

平城宮東院地区出土の建築部材

—第301次

1はじめに

本稿では、第301次調査出土の建築部材について報告する。本調査区は東院南門の南方に位置し、規模は東西56m、南北11~15m、面積約650m²で、約130点におよぶ多くの部材が出土した。これらのうち、東院南面大垣を貫く南北溝SD16040D、東院南門の南西方の東西棟掘立柱建物SB18100の柱穴、東院南門南方の二条条間北側溝に架かる橋SX18084の柱穴から出土した建築部材について報告する(図273・表40)。いずれもこれまで、その出土位置や法量などを報告するにとどまっていた(『年報2000-III』)。以下、遺構ごとに解説を加える。

2南北溝SD16040D出土部材

出土状況 SD16040は、東院南門SB16000にともなう南北道路の東側溝で、宮内より東院南面大垣を貫き、南端は二条条間北小路北側溝SD5200に接続する。その位置をほぼ変えずに掘り直しがなされ、古い方からA~Dとする。SD16040Dは奈良時代後半の遺構で、幅約70cm、深さ35cm以上である。出土部材は割裂・半裁した丸太材で、木樋の土台として、長手を東西方向に、剖削面を下面に向けて据えていた。

部材の形状と痕跡(1~3、図274・275) いずれも全長は600mm前後、幅(径)は250mm前後で、木口面は腐食が激しいが、2・3は末口をヨキで杭状に加工する。末口から約300mmの位置の剖削面に繊維方向に直交して、約50mmの段差をもつ。3は末口から121mmの位置に、長さ78mm、幅62mm、深さ54mmの納穴をもち、1・2も腐食が激しいものの同様の仕口をもつ。これらから、当該部材は、頭貫および壁小舞の仕口をもつ丸柱の頂部をヨキで切断の上、半裁し、木樋土台として転用したものと考えられる。末口の杭状加工からは、溝の側板などとして転用されたものを、再度側板に転用した可能性も指摘できる。樹種はいずれもコウヤマキであった(樹種同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社高橋教氏による。以下、同じ)。

3東西棟建物SB18100出土部材

出土状況 SB18100は東院南門の南西方に位置する、奈良時代後半の桁行7間以上、梁行2間の身舎に南庭が取り付く大型の東西棟掘立柱建物で、南面にはさらに東西4間以上の縁を設ける。身舎には床東を備える。当該部材は、身舎側柱、庇柱、床東、縁束柱の柱穴に側板として据えられていた。

部材の形状と痕跡 SB18100より出土した側板は直方材、五平材、板材など、さまざまな形状を呈し、ほぼすべてが転用材とみられる。全長は800~1,200mmのものが多く、木口を杭状に加工するものが多い。またヨキや

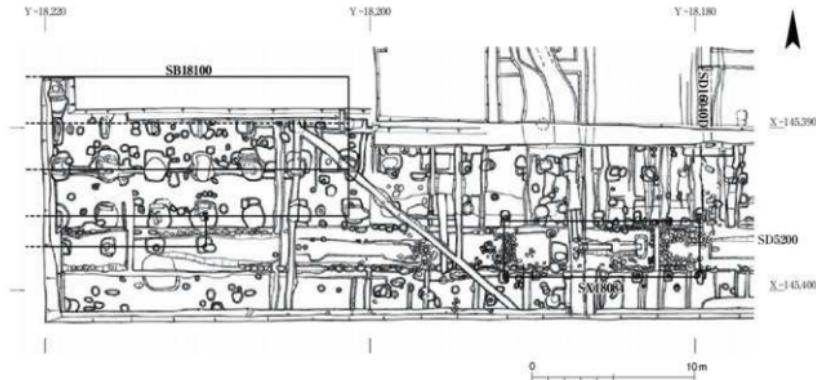


図273 第301次調査区(西半)遺構図(一部) 1:300

表40 第301次調査出土建築部材摘要一覧

番号	遺構番号	出土状況	出土柱穴	法量 (m)			木取り	樹種 (分類)	備考
				長さ	幅	高さ			
1	SD16040D	木築土台	-	585	253	145	丸太半裁	コウヤマキ	転用材
2			-	615	248	114	丸太半裁	コウヤマキ	転用材
3			-	626	247	154	丸太半裁	コウヤマキ	転用材
4	SB18100	礎板	身合柱	1,191	195	186	分割角材	ヒノキ	転用材
5			身合柱	1,020	244	102	板目	ヒノキ	転用材
6			身合柱	1,206	229	109	板目	ヒノキ	転用材
7			身合柱	1,018	231	208	芯持角材	ヒノキ	転用材
8			身合柱	1,266	151	104	分割角材	ヒノキ	転用材
9			身合柱	1,239	233	103	板目	ヒノキ	転用材
10			庇柱	1,258	194	129	分割材	ヒノキ	転用材
11			庇柱	920	325	165	半裁状	ヒノキ	転用材
12			庇柱	452	117	75	板目	ヒノキ	転用材
13			床東	967	205	117	板目	ヒノキ	転用材
14			床東	785	242	93	板目	ヒノキ	転用材
15			床東	870	242	138	板目	ヒノキ	転用材
16			床東	1,344	210	169	芯持角材	ヒノキ	転用材
17			床東	1,084	203	143	分割角材	ヒノキ	転用材
18			縁束	870	240	130	板目	ヒノキ	転用材
19	SX18084	柱根	偽脚親柱	310	310	540	芯持材	ヒノキ	-
20			偽脚親柱	316	216	582	半裁状	ヒノキ	-
21			偽脚親柱	289	238	446	芯持材	ヒノキ	-
22			偽脚	248	206	324	芯持角材	ヒノキ	-

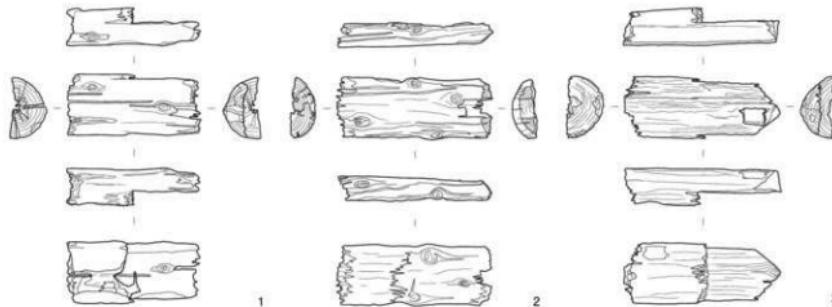


図274 南北溝SD16040D出土木築土台 1:20



図275 末口 (左: 1, 中: 3) と剖面の段差 (右: 2)

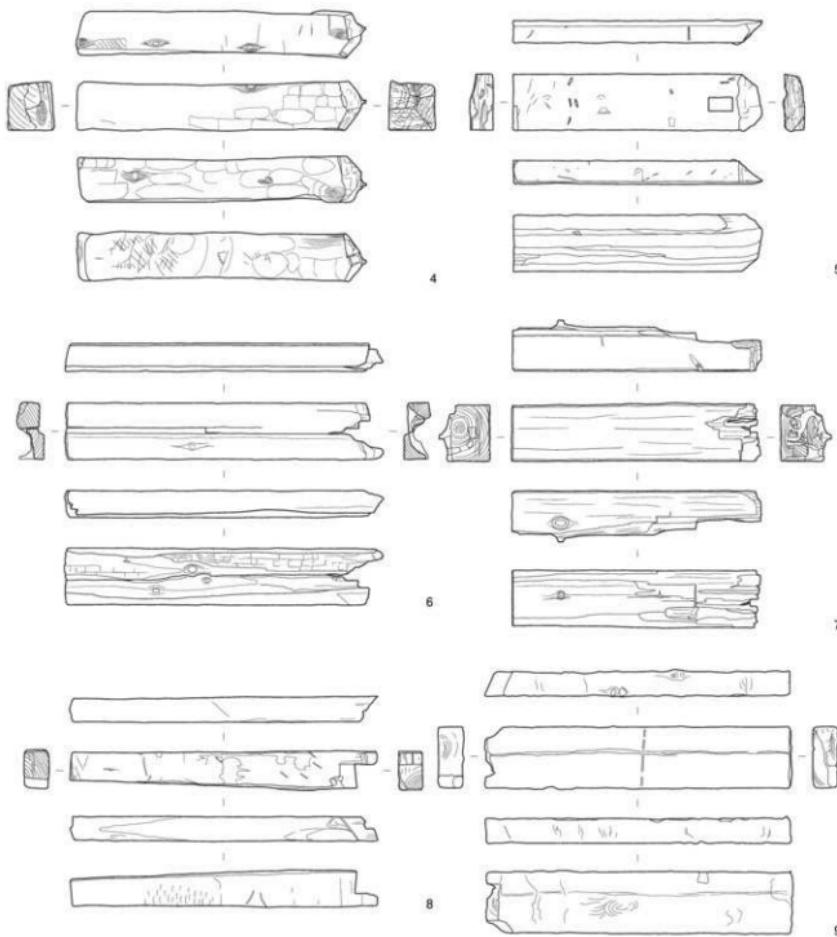


図276 SB18100出土身舎柱檻板 1:20

チョウナ、ノミ、ノコギリなどの加工痕跡が比較的明瞭に確認できた。以下では、出土場所ごとに解説を加える。

身舎柱の檻板(4~9、図276~279) 4は心去の角材で、東端となる元口(図右)をヨキで杭状に切削し、末口はヨキにより垂直に切断する。側面および上下面是チョウ

ナ(刃幅約98mm)で平滑に加工する。柱材を檻板に転用したものであろうか。

5は心去の板目材で、木表を上面として出土した。各側面は削肌で、上面および側面を比較的平滑に仕上げるのに対して、下面の加工は粗く、転用以前の二次加工と



図277 端部の杭状加工とチョウナ痕跡(4)



図278 端部の杭状加工と枘穴(5)



図279 部材中央部の段差(6)

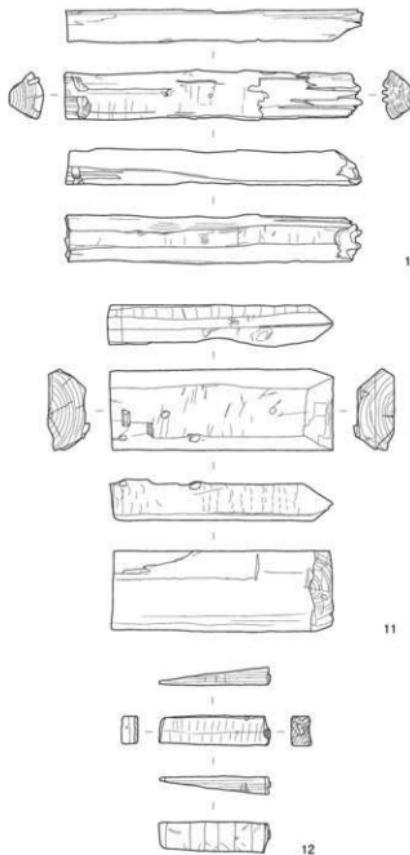


図280 SB18100出土の庇柱檻板 1:20

考えられる。東端部(図右)をチョウナ(刀幅約25mm)で杭状に加工しており、木裏の削製材の後に加えたものと判断できる。同端部より145mmのところに、長さ85mm、幅58mm、深さ65mmの枘穴をもつ。もう一方の端部はチョウナにより平滑に調整され、当初の加工と考えられる。以上のことから、転用以前は枘穴をもつ角材で、転用時に木裏面を削り、先端を杭状に切削、切断し、礎板とした工程が読み取れる。

6は心去のL字型断面をもつ材で、両側面および段差をもつ上面を平滑に仕上げる。下面は腐食が激しく、特に中央部は炭化が進む。西端部(図左)をチョウナもしくはノミによってほぼ垂直に切断する。加工が粗く二次的なものであろう。もう一方の木口は腐食が激しく、わずかに残るイキ面も、ノミもしくはチョウナによる二次加工とみられる。上面の段差は約30mmで、部材形状から当初は扉材の辺付であった可能性がある。

7は芯持の直方材で、東西両端(図左右)の木口はノコギリによって切断する。上面、南北両側面を平滑に仕上げ、わずかにチョウナによる凹凸の痕跡が確認できる。末口(図右)は腐食が激しく、加工痕跡は不明であるが、全長はおおよそ保つものとみられる。下面は末口より266mmのところに、125mmの段差を造る。下面中央部は腐食が激しいものの、両辺部は削ぎで、転用時の削裂と考えられる。段差を転用以前の加工とみれば、頭貫を受ける仕口をもった角柱の頂部を削りして切断のうえ、礎板としたものと考えられる。

9は心去の五平材で、北端の末口(図左)を斜めに切り落とす。加えて西側面に沿って枘穴を造り出し、さらにその下端34mmほどを造り出しことすると、用途は不明である。南端の元口(図右)はヨキによる切断とみられる。下面是全体に腐食が進み、加工痕跡は不明瞭ながらも、平滑に仕上げていることがわかる。下面の西辺には元口

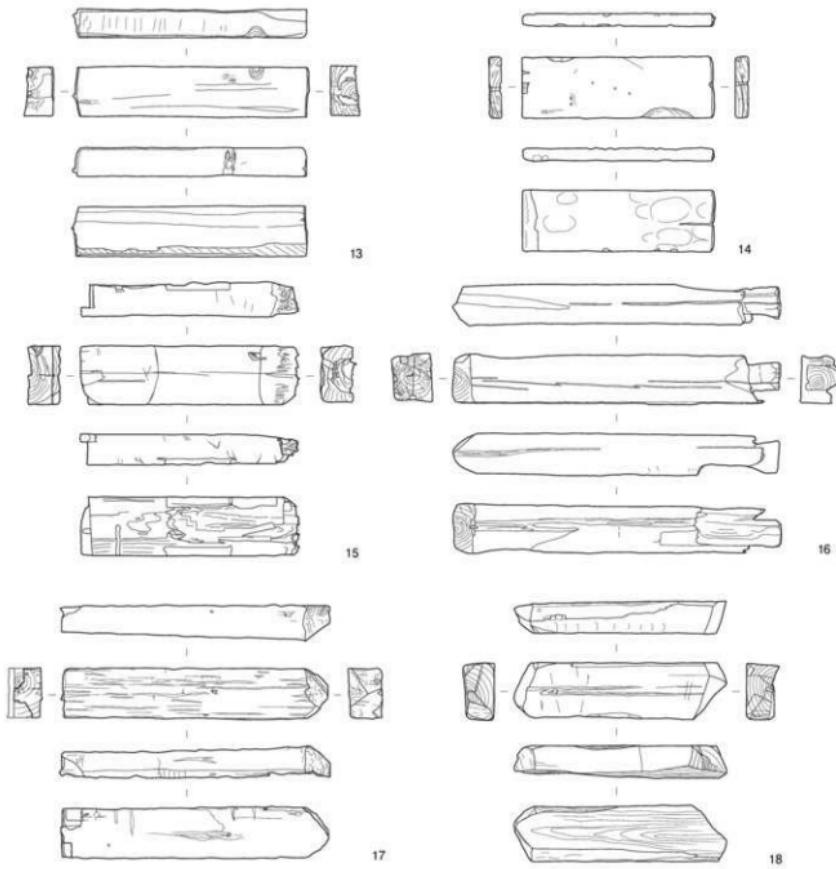


図281 SB18100出土床棟板(13~17)・縁柱下棟板(18) 1:20

から407mmのところに、楔を打ち込んだような痕跡が確認できる。上面は下面よりも腐食が進み、柱のあたりは不明瞭である。

庇柱の棟板(10~12、図280・282・283) 12を除いて、全長は身舎柱の棟板とほぼ同等の長さをもつ。

10はミカン割材で、本表を上面として出土し、円弧上をなす上面の中央部をチョウナ(刃幅約35mm)ではつり、平滑とすることで柱据付面を造る。西端部(図左)には一辺約50mmの穴を穿ち、エツリ穴とする。もう一方の端部は腐食が進むが、切断の痕跡ではなく、転用以前にすでに切損しており、丸柱を棟板として転用したものと考え

られる。

11は木表を上面として出土し、上面を平滑にして柱を据えたとみられる。西端部(図左)は、圧痕のために加工痕跡が不明瞭ではあるが、ノコギリにより垂直に切断していることがわかる。もう一方の端部は、ヨキにより上下面を枕状に切削する。上面はヨキで平滑にする。上面の西端には長さ65mm、幅28mm、深さ28mmの仕口があり、エツリ穴状ではあるが貫通せず、用途は不明である。下面是割材で、側面にはチョウナによる加工が明瞭に残る。当初、柱材であったものを、ノコギリで切断した後、チョウナで側面を調整して半裁し、ヨキで上面を平滑に



図282 底柱鍵板(10)の木口(左)と柱の据付痕跡(右)

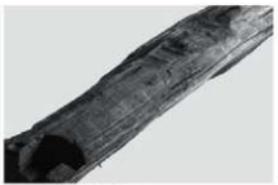


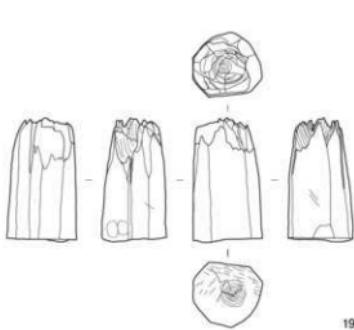
図283 東面木口の加工痕跡(11)



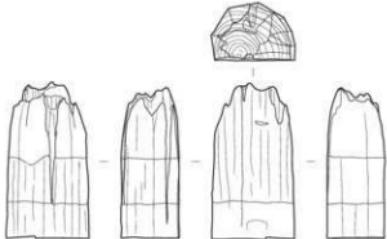
図284 床東鍵板(17)の木口の杭状加工(左)と柱の落としこみ痕跡(右)



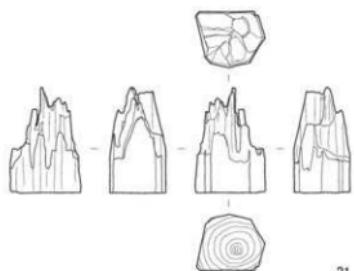
図285 下面木口の切断痕跡(21)



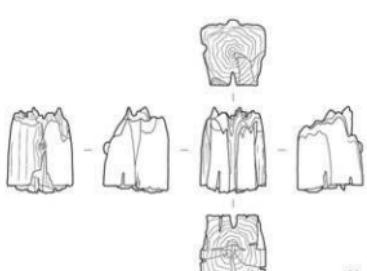
19



20



21



22

図286 SX18084出土親柱(19~21)・橋脚(22)の柱根 1:20

調整したものと考えられる。

12は楔の形状をもつ。全長は452mmで、他の礎板部材に比べて小さく、当初より礎板と柱の間に楔として用いた可能性もある。尖らせた北端部（図左）から約90mmの上下面に、使用痕跡と考えられる圧痕をもつ。側面および上下面是チョウナ（刃幅約50mm）で平滑に加工する。

床束および縁台下の礎板（13~18、図281・284） 身舎柱の礎板と同様に、端部を杭状に加工するものが多くみられる。これらにはヨキもしくはチョウナによる切断の痕跡が残り、礎板として転用時の二次加工とみられる。

15は心去の直方材である。上面北端（図左）には円弧状に痕跡が残り、柱のあたりと考えられる。下面は激しく腐食し、転用以前は地覆もしくは土台などの地面に接する部材であった可能性が考えられる。

16は芯持の直方材で、北端の元口（図左）をチョウナによって杭状に加工する。転用時の切断にともなう二次加工とみられる。末口（図右）には幅130mm、高さ107mmの出柄を造り出し、ノミによる加工痕跡が確認できる。木口を除く各面の加工痕跡は不明瞭であるものの、平滑に調整される。下面にはわずかにチョウナによる凹凸の痕跡が確認できる。部材形状から、柱の下端を切断して礎板に転用したものと考えられる。

17は芯持の直方材で、割肌面を下面とする。南端部（図右）の木口をノミもしくはチョウナで杭状に切断した後、削製したと考えられる。西面北端に円弧状の仕口をもち、柱を落とし込むものとみられる。上面は風食が大きく、当初この面が地面もしくは壁地覆にあたっていたのであろう。部材形状から当初用途は闇と考えられる。

18は心去の直方材で、上面および両側にチョウナ痕を明瞭に残す。両端部をヨキによって杭状に切断する。柱材を転用したものとみられる。

SX1804出土部材の樹種はいずれもヒノキであった。

4 橋SX1804出土部材

出土状況 SX1804は、東院南門SB1600Cの南方の二条条間北小路北側溝SD5200Bbに架けられた桁行6間、梁行1間の橋で、奈良時代末期の建物とみられる。柱間寸法は桁行の両端間を6尺、その他を7尺等間、梁行を11尺とし、SB1600Cの中央間3間に橋の桁行長さをそろえる。隅柱は横架材があたる面を平滑にした多角形断面

をもち、そのほかの柱材は角柱とする。前者が親柱、後者が橋脚にあたるものと考える。

部材の形状と痕跡（19~22、図285・286） いずれも芯持材で、末口を上方に向けて据えていた。親柱は径300mm前後の丸柱を整えて多角形断面とするのに対し、橋脚は長辺248mmとやや小さい。

親柱（19~21）の上端はいずれも腐食により切損するが、下面是ヨキもしくはノコギリによる切断痕跡が明瞭に残り、側面はチョウナによる加工痕がわずかに残る。

橋脚（22）は全体的に腐食が進み、当初の形状が不明確であるが、南側面に幅21mm、深さ61mmの板決り状の溝をもつ。ただし、腐食によるものかもしれない。

SX1804出土部材の樹種はいずれもヒノキであった。

5 種板部材と建物との関係

礎板の出土状況は既報告（「年報2000-III」）でも述べられているが、礎板部材と建物との関係について、ここで再考しておきたい。当地は泥質地であり、建物の自重による沈下を防ぐ目的として礎板が多用されたとみられる。SB18100は大型建物であるため、上部荷重の負荷が大きい身舎側柱と庇柱には複数の礎板を用いたと推察される。身舎側柱では、桁行（東西）方向に複数本の部材によって根固めをおこない、東妻柱の礎板である9のみ梁行（南北）方向に長手を向ける。庇柱の礎板は長手を桁行、短手を梁行に向けて据える。比較的荷重の少ない床束の柱穴では、梁行に長手を向けた礎板1点のみを据える。東妻柱の礎板も含めて、棟通りの礎板は梁行方向に長手を向けたと考えられる。

これらの礎板は柱の抜取時に、位置がずれた可能性があるものの、礎板の向きと建物の軸部構造に一定の規則性がみてとれ、奈良時代の建築構法の一端を推察することができる。

6 まとめ

上述の部材からは、奈良時代における礎板を据えた大型建物の建築構法や部材の転用過程、橋脚の構造などを知ることができる。それぞれの遺構ごとに一括りがある点においても、資料性が高いといえよう。

（福嶋啓人・鈴木智大）

平城京左京二条二坊の施釉瓦傳

—第279次他

1 はじめに

平城京左京二条二坊は施釉瓦傳が集中して出土する地区のひとつである。この地区ではこれまで多次にわたる発掘調査が実施され、その概報もすでに公になっているが、各調査で出土した施釉瓦傳の全貌はあきらかになっていない。近年、この地区で発掘調査が継続し、奈良時代の遺構とともに施釉瓦傳の新たな資料が増加した。本稿では、これまで出土した施釉瓦傳を整理し、関連する問題について若干の考察をおこなう。

左京二条二坊の一・二・七・八坪は平城宮東院にあたるので報告から除外する。三・四坪は平城京内だが、これまで発掘調査は実施していない。各調査における施釉瓦傳の種類と出土数は表41・図287に、施釉瓦傳が出土した場所は図288に示した。

2 施釉瓦傳の概要

五 坪 藤原麻呂郎と想定されている坪である¹⁾。この坪からは合計5点の施釉瓦傳が出土している。確認できる釉色は緑釉で、胎土は淡褐色で砂粒を少量含む。焼成温度は低い。出土地点は坪内の宅地ではなく、坪の南側に位置する二条大路北側溝SD5240、あるいは坪の東側に位置する東二坊坊間路西側溝SD5021である。

六 坪 合計12点出土している。すべて東二坊坊間路西側溝SD5760から出土している。釉色は緑釉と三彩があるが、緑釉のほうが多い。胎土は淡褐色で砂粒を少量含む。焼成温度は低い。文様は確認できる限り楕円文である。左京二条二坊は東大寺領梨原庄の一画（東大寺要録）であったことから、左京二条二坊三・四・五・六坪（東院南方遺跡）が梨原宮であった可能性が指摘されている²⁾。

十 坪 法華寺阿弥陀淨土院の場所である。坪内から合計30点出土した。釉色は三彩と緑釉があり、三彩のほうが多い。胎土は淡褐色あるいは灰白色で砂粒を少量含み、焼成温度は低い。文様は確認できる限り楕円文である。

十一坪 合計334点出土した。釉色は三彩と緑釉があり三彩のほうが多い。胎土は淡褐色で砂粒を少量含み、焼成温度は低い。文様は確認できる限り楕円文である。

十二坪 合計971点と一つの坪から出土した量としては極めて多い。この坪は平城京左京二条二坊十二坪水道局庁舎建設予定地発掘調査会が大規模な調査を実施した。釉色は三彩と緑釉があり三彩のほうが多い。胎土は淡褐色で砂粒を極少量含み、焼成温度は低い。文様は楕円文である。

十三坪 合計3点出土した。釉色は緑釉と三彩があり、胎土は灰白色で砂粒を少量含む。文様は楕円文である。

十四坪 合計78点出土した。釉色は緑釉と三彩があり、緑釉が多い。胎土は灰白色あるいは淡褐色で砂粒を少量含む。文様は楕円文である。

十五坪 合計173点出土した。釉色は三彩がほとんどである。胎土は白色、緻密で砂粒を含まない。文様は楕円文のほか、楕円文とはあきらかに異なる文様があり、暫定的に斑文とする。

法華寺旧境内 法華寺旧境内の南半は左京二条二坊九坪・十六坪、北半は左京一条二坊に当たるが、ここでは一括して扱う。合計48点出土している。釉色は三彩と緑釉があり、軒平瓦・丸瓦・平瓦の胎土は白色、緻密で砂粒を含まない。三彩の文様は斑文がある。一方、ほかの坪に比して多く出土する磚の胎土は淡褐色で砂粒を少量含む。文様は直線文と水波文がある。

3 文様構成

単色の緑釉についてはもとより色別による文様はないが、三彩は配色によって文様を描き出す。従来は、緑を地の色とし、楕円形の褐色と白（透明）色を隣合わせないように配色する楕円文が主要な文様であった（図287-1）。しかし、今回左京二条二坊の出土資料を整理する過程で、楕円文とはあきらかに異なる文様をもつ資料を十五坪と法華寺旧境内で確認した。この文様は残存状況の良好な資料がなく全容は不明だが、現状では楕円文ほど規則的な配置を確認できず、暫定的に斑文として紹介する。将来、良好な資料が出土すれば名称を再考したい。

斑文には2種類あり、一つは緑を地の色とし、不整形の白色部分をわずかに設け、柳葉状の細い褐色文をランダムに配置する（図287-2）。もう一つは地を緑色とする点は同じだが、白色と褐色部分は不整形で一部重なるように配色する（図287-3）。これらが十五坪と法華寺旧境内で目立って出土する点は特筆してよいだろう。

表41 平城京左京二条二坊出土の施釉瓦磚集計表

次数	場所	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	熨斗	圍戸	墨木先	鬼	拂	不明	合計	備考
1980	五坪			2								2	6760A
204	五坪				1							1	
223-13	五坪				1	1						2	
68	六坪				4	4	4					12	
80	十坪(阿須陀淨土院)	1	1						2			4	
281	十坪(阿須陀淨土院)			8	2	4			1	1		16	
282-6	十坪(阿須陀淨土院)									2		2	
312	十坪(阿須陀淨土院)				5				1			6	水波文跡
512	十坪(阿須陀淨土院)	1	1									2	
279	十一坪	1	1	6	30	178					3	219	6146A/6759B
281	十一坪					4	2					6	
282-10	十一坪			1	1	1						3	
282-16	十一坪	1				7				1		9	6146A
533	十一坪		2	8	46	10						66	6759B
563	十一坪				14	10						24	
571	十一坪				7							7	
628-73	十二坪	15	19	620	25	1					291	971	6739B/6760A 不明は施釉無資料
131-13	十三坪					1						1	
151-11	十三坪				2							2	
89	十四坪			5	56	5						66	
189	十四坪	1	1	1	6						2	11	6151Aor6314A/6760B
524	十四坪				1							1	
357	十五坪	2	8	10	44							64	6314E/6667D
501	十五坪		7	6	26							39	6667D
514	十五坪	19	6	42		1		1		1		70	6667D
95-1	法華寺旧境内			2								2	
98-17	法華寺旧境内			6								6	
118-9	法華寺旧境内											1	
141-9	法華寺旧境内			6							2	8	直線文跡・水波文跡
215-15	法華寺旧境内				1		1					2	
234-3	法華寺旧境内										2	2	直線文跡
363	法華寺旧境内	1										1	
430	法華寺旧境内			3								3	
442	法華寺旧境内									1		1	直線文跡
532	法華寺旧境内	1			1						15	17	直線文跡・水波文跡
547	法華寺旧境内	1								2	3	2	水波文跡
575	法華寺旧境内									2	2	2	水波文跡

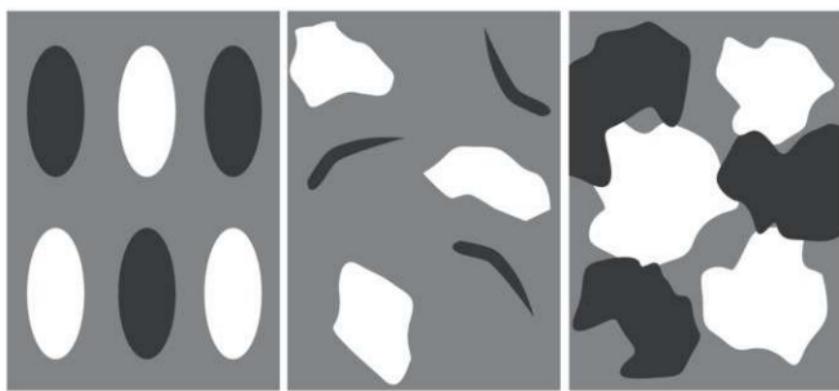


図287 三彩の文様構成模式図

磚は縁軸の単色の無文磚のほかに、複数の平行する直線を直交させる直線文と水波紋がある。これらは法華寺旧境内に集中して出土する。

4 施釉瓦磚の年代

従来、施釉瓦磚は軒瓦が出土しないかぎり、その年代をあきらかにすることは困難であった。しかし、近年、施釉軒瓦とともに施釉瓦磚資料が増加したことに加えて、遺構から施釉瓦磚の年代を限定できることが可能となってきた。

十五坪・法華寺旧境内の出土資料　十五坪では軒平瓦6667Dが多く出土した。6667Dに組み合う軒丸瓦は6314Eと考える。十五坪からは軸は残存しないが6667Dと同様の胎土の6314Eが出土している。6667Dを焼成した歌姫西瓦窯では非施釉の6314Eが複数出土している。

6667Dは唐草文や額の形態からII-2期(729~745年)に比定されている。これと組み合う6314Eも同時期であろう。東大寺前身寺院である東大寺上院地区千手堂からは施釉の6314E、同前身寺院の二月堂仏龕屋下層からは施釉の6667Dが出土している。同二月堂付近出土の二彩水波文磚が東大寺文書にある阿弥陀淨土院内の宝殿で使用されたものであれば、この建物の創建年代と同じ天平13年(741)の磚とわかる³⁾。この磚と千手堂の6314E、仏龕屋下層の6667Dは胎土が白色、緻密で砂粒を含まないという特徴をもち、同時期の所産と考える。

十五坪では6314Eや6667Dとともに三彩の南都七大寺式鬼瓦V式が出土した。この鬼瓦の胎土も同坪出土の6314E・6667Dと一致するため、同時期の瓦と考える。南都七大寺式鬼瓦IV・V式の年代は従来、天平宝字年間とされていた。近年、大安寺から出土する鬼瓦IV式の年代が天平勝宝年間頃であることが示され、それと同時期と考えられる鬼瓦V式の年代も従来より遡ることとなつた⁴⁾。したがって、十五坪および法華寺旧境内出土の6134E-6667Dの年代はII-2期~III-2期(749~757年)に限定することができる。

十一坪・十二坪の施釉瓦　この2つの坪からは合計1305点の施釉瓦が出土している。十一坪では施釉瓦の合計が334点に対して、施釉の軒丸瓦6146A、軒平瓦6759Bの合計はわずか5点(1.4%)である。同様に十二坪では、施釉瓦の合計971点に対して施釉の軒平瓦6759B、6760A

はわずか15点(1.5%)である。軒瓦とほかの施釉瓦の同時使用については疑問視せざるを得ない比率である。

十一坪の調査によると、検出した建物遺構は天平宝字6年(762)の木簡を含む土坑に壊されており、建物廃絶の時期を知る手がかりとなる。建物の所用瓦はII-1期(721~729年)の6311A・B-6664D・F、II-2期(729~745年)の6308I-6682A・B・Cであり、建物の創建年代は天平年間以降であろう。同坪から多量に出土した施釉瓦もこの時期に使用したと考えざるを得ない。一方、わずかに出土する施釉軒瓦はいずれもIV-2期(767~770年)の瓦であり、検出した建物の所用瓦ではない。十二坪も同様で、建物の創建時期は主要な軒瓦の組み合わせ6308I-6682B(II-2期)、6282-6721(II-2~III期)から、天平年間以降であり、同坪から出土する施釉の軒平瓦(IV-2期)とは時期が合わない。建物遺構の年代から、両坪から出土する1000点を超える施釉瓦の時期は天平年間から天平勝宝年間の所産であるということがきよう。

5 おわりに

施釉瓦磚の年代の検討には、数少ない軒瓦だけでは不十分で、瓦の胎土や所用建物の年代などの情報を考慮する必要がある。今回の考察で、左京二条二坊では天平年間から天平勝宝年間にかけて多量の施釉瓦磚が使用されたことがあきらかになった。この時期の施釉瓦には胎土の異なる2つのグループが存在し、分布にも違いがみられた。白色の胎土のグループは十五坪・法華寺旧境内のほか東大寺前身寺院にもみられ、十一・十二坪の淡褐色の胎土のグループとは混用しない。このような施釉瓦磚を使用した建物の性格をあきらかにすることが、つぎの課題となろう。今後は平城宮内あるいは寺院出土の資料を含めて総合的に検討することによって、施釉瓦磚に関するさまざまな課題を解決していきたい。

本稿はJSPS科研費JP15K03000の成果である。(今井晃樹)

註

- 1)『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈文研、1995。
- 2)前掲註1。
- 3)高橋照彦「考古学からみた法華堂の創建と東大寺前身寺院」『論集東大寺法華堂の創建と教学』東大寺、2009。
- 4)中井公「大安寺式」軒瓦の年代」「堅田直先生古希記念論文集」真陽社、1997。

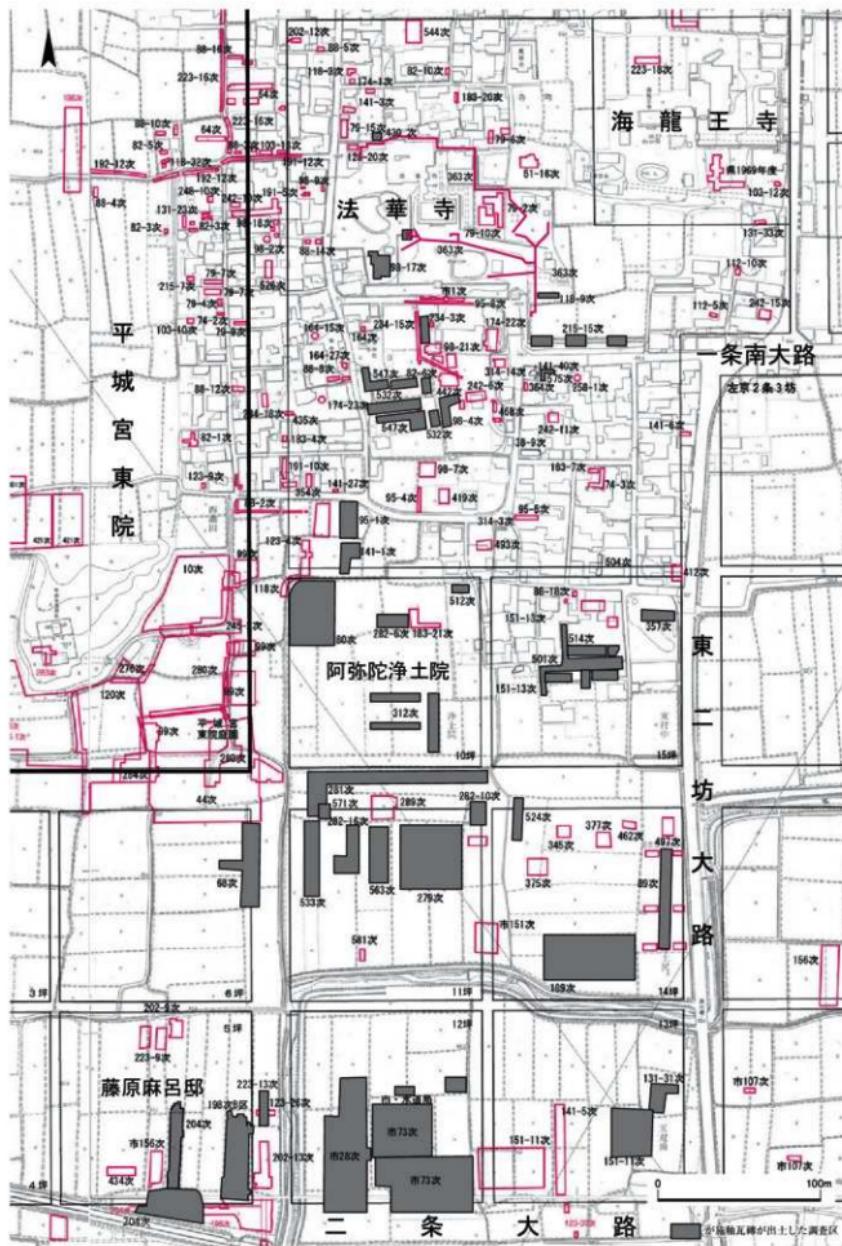


図288 施釉瓦磚の出土調査区位置図

平城宮・京出土の植物質遺物

—第184次・第198次B区・第440次他

1はじめに

平城宮・京跡の発掘調査では、木簡の削屑等の微細な遺物を回収するために、整理室での土壤水洗をおこなっている。本稿ではこれまでに土壤水洗等で回収された植物質遺物について、人為的な痕跡が残り、古代におけるものづくりの一端を示す資料と考えられるものを抽出し報告する。対象とするのは、層位的に奈良時代のものと確定できる竹および桿皮である。これらの概要について報告し、その位置づけをおこないたい。

2 資料の概要 一竹一

竹は、節を持ち、中空状の構造を持つ。報告するにあたり7点の徒手切片法による種同定をおこなったところ、ほとんどの個体がマダケもしくはハチクという結果となった¹⁾。以下に資料の概要を記す。

図289-1は、長20.5cm、復元径約2.7cmで、2輪状の節を持つ。下端には節から約2cmの位置で刃物で平らに切断した痕跡があり、上端には特に細かな加工痕が残る。潰れているため中の節が抜かれていたかは観察できない。上端の丁寧な加工から、完成品とみることもできる。図289-2は上下端とともに切断されている。長8.7cm、残存幅2.5cm。節には円孔が並び特徴的である。図289-3は、大きく捻れている。残存長5.2cm、復元径約2.8cm。下端には刃物で平らに切断した痕跡が残る。2と同じく節に円孔が並ぶ。図289-4は残存長7.3cm。2輪状の節を持つ。節より約1.1cmの位置で1の上端と同様の細かな加工による切断痕がみられる。図289-5は残存長9.2cm、6は残存長8.5cm。両者は接合し、径約2.3cmに復元できる。節は腐食が激しいが、凹凸から2輪状の節であると考えられる。図289-7は残存長6.3cm、復元径約2.7cmで2輪状の節を持つ。下端に切断痕が残る。出土遺構は、1・3~7が平城第440次調査SK19189、2が平城第198次調査B区SD5300である。

図290-1・2は、それぞれ先端が炭化している。図290-1は接合し、同一個体である。最大長7.2cmで2輪状の節を持つ。内面のみ炭化しており、上端の炭化部分

は、弧を描くように加工が施されている。下端は節から約1.5cmの位置で切断されている。図290-2は残存長3.2cmで2輪状の節を持つ。ともに先端にのみ焼跡を持つことから、使用に際し焼けたものと考えられる。出土地点は、1が平城第184次調査SE4497、2が平城第440次調査SK19189である。

3 平城宮・京における竹利用

図289-1~3・7、および図290-1の竹については、節より約1~2cmの位置で切断されている点が共通する。これらは、竹の切断に際し、節を避けて節の直下（もしくは直上）での切断が頻繁におこなわれていたことを示す。竹の切り出し、もしくは竹製品の製作に際しての意図的な加工であると認定できる。

また、径が復元できる図289-1・3・5~7については、それぞれの復元径は約2.3~2.8cmとなる。竹の種に規制されるのかもしれないが、細い径の竹を利用していたといえる。一方で、平城京から出土する木簡には「小竹」「大竹」などの表記があり²⁾、これらの径以外の竹も利用していた可能性がある。

さらに、平城京の二条大路濠状遺構SD5100からは竹材の管理用付札と考えられる木簡が見つかっている³⁾。図289-2の竹が出土した濠状遺構SD5300の木層層からも、竹材管理用と考えられる付札と隼人に関する付札が出土している⁴⁾。平城宮・京で出土している「竹」に関する木簡が二条大路の濠状遺構に集中する点やSD5300において加工された竹が出土していることは、付近で竹製品の加工がおこなわれていたことを示唆している。また付札との共伴関係から、これらの竹は現地に生えていたものではなく、材として管理されていたものである可能性が高いといえる。

図289-2や3にみられる竹の節部分の特徴的な円孔は、根付近の「支柱根」の痕跡の可能性がある。支柱根は地下茎とは別に桿の根元に生えている根で、桿を垂直に立てるための支えの役割がある⁵⁾。特徴的な円孔を支柱根の痕跡ととらえる場合、図289-2が短く切断されているのは、桿の根元は節間が短いためとも考えられる。その場合、これらの竹は支柱根のある状態で平城宮・京内に搬入されたと推測できる。このことは、木簡にみられる竹の単位に「根」があることとも整合的である。

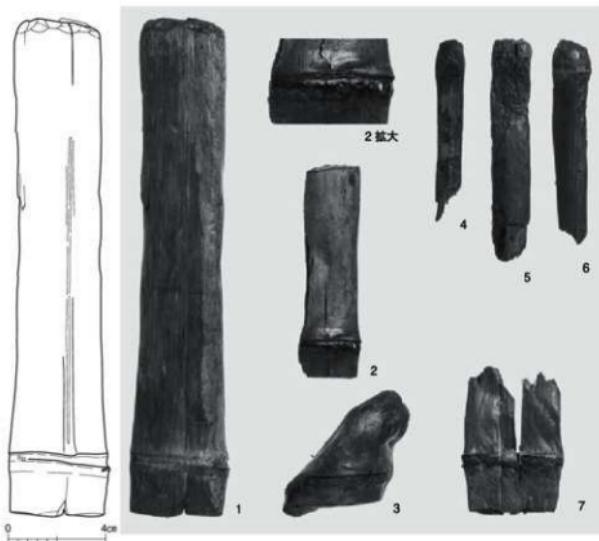
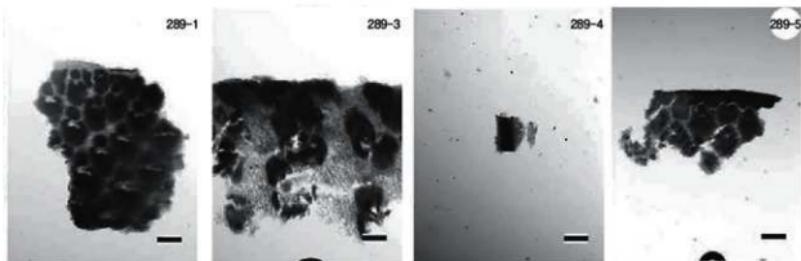


図289 平城宮・京出土竹（実測図は1：2）



図290 竹の燃えさし



289-1：マダケかハチク
289-3：マケホリ
289-4：マダケかハチク
289-5：マダケかハチク
289-6：マダケかハチク
289-7：マダケかハチク
290-1：マダケかハチク
(スケールバーの長さ：250μm)

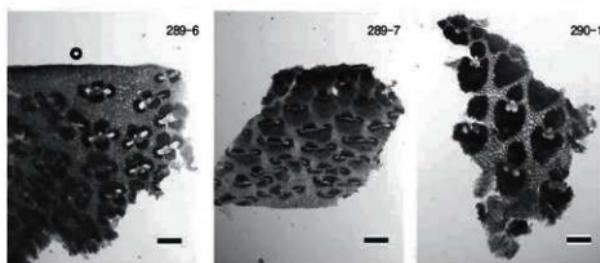


図291 出土材の光学顕微鏡写真（横断面）

4 資料の概要 一樺皮-

樺皮は主に曲物容器の縫じ合わせに用いられ、民俗例などからサクラ樹皮であることが知られている。これまでに平城宮・京跡より数百点の出土があるが、以下では良好な一括資料の例を取り上げ概要を述べる。

第440次調査SK19189 宮内のSK19189は東西約11m×南北約7mの規模の土坑で、現在までに約270点の出土がある。時期は出土木簡から宝亀初年以前である⁶⁾。樹皮には幅5.7cmの幅広のものから幅0.3~0.5cmのものがあり、樹皮素材を紐状に加工している様子が窺える。

第524次調査SD10580 京内のSK10580は条坊側溝の内側にめぐる性格不明の溝もしくは土坑である。時期は出土木簡の内容から奈良時代前半で首皇子に関わる官司が推定されており、漆容器として使用された須恵器平瓶、榎板残材などの出土から木工にかかわる工房が併設されていた可能性が推測されている⁷⁾。樺皮は約60点出土しており、表面の加工が進んでいない幅3.7cmの幅広のものから幅0.3cmの紐状のものがある。樹皮素材を紐状に加工している様子が窺える。

5 平城宮・京における樺皮利用

出土資料から、主に曲物の縫紐に用いられる樺皮が宮内や京内で樹皮紐に加工されていることが推測できる。文献史料からは若陶司や大膳職などの官司に所属している工人は曲物を製作していたと考えられており⁸⁾、宮・京内から製作工程のわかる樹皮紐が出土することは、奈良時代においても宮内における曲物製作がおこなわれたことを示唆する。また、木工にかかわる工房の存在が推測される遺構とともに樹皮紐が出土することは、工房内で曲物製作をおこなっていたことを指摘できる。

6 おわりに

これまでに平城宮・京跡で出土しており、かつ遺構、層位で奈良時代のものであると確定できる植物質遺物について報告をおこなった⁹⁾。竹は初めて材の同定をおこない、竹の加工が平城宮内でおこなわれていることを出土資料から示すことができた。さらに、樺皮から平城宮・京内における曲物容器製作を指摘した。今後も資料の蓄積をおこない随時報告をおこなっていきたい。(浦 鶴子)



図292 SK19189出土の樺皮



図293 SD10580出土の樺皮

註

- 1) ブラバロ・ラボ小林克也氏の同定による。端部に欠損等がある部分から切片採取をおこなった。
- 2) 煙中夥子「長屋王邸の「竹」—タケ進上木簡から考える古代のタケの用途—」『古代文化』第65巻4号2013。
- 3) 前掲註2。
- 4) 「平城木簡概報29」37頁下段459。
- 5) 内村悦三「タケ・ササ園芸—種類・特徴・用途」創森社、2005。別種の竹の可能性もある。図289-3は同定には至らなかった。
- 6) 「紀要2009」、現在も土壤水洗中である。
- 7) 「紀要2015」。
- 8) 古尾谷知浩「古代の木器生産」「日本史研究」日本史研究会656、2017。
- 9) なお、本報告にはJSPS科研費JP16K16951の成果の一部を利用している。

BULLETIN
Nara National Research Institute
for Cultural Properties
2018

C O N T E N T S

I Research Reports	1
A Consideration of the Design of Eaves Edge Small Metal Fittings for the South Gate: Research for Reconstructing the First Imperial Audience Hall Compound, Part 24	3
Regarding the Manufacturing Technology of Eaves Edge Small Metal Fittings: Research for Reconstructing the First Imperial Audience Hall Compound, Part 25	6
A Consideration of the Method of Construction for Corridor Corners: Research for Reconstructing the First Imperial Audience Hall Compound, Part 26	8
Research Method and History of Remodeling of Traditional Houses in Bhutan	10
Research and Restoration of Western Prasat Top: Reconstruction of the Northern Sanctuary	12
Research on the False Door of the Northern Sanctuary at Western Prasat Top: A Study of the Standing Buddhas	14
Towards the Exhibit of Wall Paintings from the Fayaztepa Buddhist Site, Uzbekistan (2017)	16
Establishment of a Cultural Heritage Information Research Base through Multinational Collaboration	18
Release of the "Wooden Tablet Database" (a New Database for Wooden Tablets)	20
Development of Acid-Free Paper Containers for Storing Wooden Tablet Shavings	22
Multilingualization of the Kitara Tumulus Mural Paintings Preservation Center and a Report on the Trends of Foreign Visitors	24
Diversifying the Utilization of Cultural Properties: The Case of Asuka Historical Museum	26
Dissemination of Information about the Results of Research on Cultural Properties	28
Investigation of Meiji Era Land Registration Maps of Asuka Village	30
A Study about the Garden of the Painter Claude Monet	32
Views of the Scenery from Building Interiors in Japanese and Korean Gardens and Scenic Places	34
On the Tea House Gansuitei of the Daijō-in Garden in the Edo Period	36
Traditional Streetscape and City Planning in an Edo Period Post Station: A Case Study of the Traditional Streetscape at Yakage-shuku Post Station in Okayama Prefecture	38
Investigation of Traditional Buildings in the Josai Area, Tsuyama City	40
The Presentation of Old Documents Owned by a Family of Businesslike Post in Kōfukuji Temple	42
A Study of Old Books Labeled <i>Myōhōshō</i> , Owned by Kōfukuji Temple	44
Regarding Differences between Nigatsu and Katsuo	46
Haniwa Collected at the Base of a Projection of the Uwanabe Tomb	48
A Reexamination of Pottery Excavated from the Secondary Ground Preparation Layer of the Fujiwara Palace State Halls Compound	50
Reconstructive Research on the Serpentine Iron Object from the Pagoda's Central Shaft Foundation Stone at Asukadera Temple	52

A Study of the Gold and Silver Products from the Pagoda's Central Shaft Foundation Stone at Asukadera Temple	54
Non-destructive Investigation of Copper Products Recovered from Ancient Temple Sites	56
Ceramic Inkstones Reused as Tableware at the Nara Palace	58
Regarding the Earthquake Traces Found in the 552nd Excavation of the Nara Capital Site	60
Structural Investigation of Ancient Lacquer Brushes unearthed in the ruins of the Nara Palace and Capital Sites (2)	62
Wooden Human Figurines Made from the Same Piece of Timber	64
Dendrochronological Analysis of Wooden Tablets Excavated from the Nara Capital Site (2): Follow-up Report on Shavings Recovered in the 524th Excavation	66
Scientific Analysis of Multilayered Glass Beads Unearthed from the Tsuzuyama Minami Tomb in Osaka	68
A Three-Dimensional Measurement of the Sarcophagus of the Karatoyama Tomb, Fujiidera City ..	70
Survey of Submersed Stones Remaining at Osaka Castle Wall Stone Quarry Sites	72
Application of 3D Simultaneous Localization and Mapping (SLAM) Technology for Measuring Archaeological Sites in Wooded Areas	74
"Same-Mold Tiles" and "Different-Mold Tiles" : Three-Dimensional Measurements and Examinations of Tōdaiji-Style Eave-End Roof Tiles	76
II Excavations at the Asuka and Fujiwara Palaces and Other Sites	79
1 Excavations at the Fujiwara Palace Site	81
Excavation in the Outer Circumferential Area of the Fujiwara Palace Site (Nos. 191, 192-7) ..	82
Excavation of the Northeastern Corner of the Imperial Audience Hall Compound (No. 195) ..	86
2 Excavations in the Fujiwara Capital Site	87
Excavation of Sixth Street (No. 188-16)	88
Excavation in West Second Ward on Seventh Street, and the Shibu Site (No. 192-2)	89
Excavations in West First Ward on Second Street, and the Daigo Site (Nos. 192-4-6)	95
3 Excavations in and around the Asuka Area	101
Excavation at the Northern Outer Wall of Yamadadera Temple (No. 188-11)	102
Excavations to the North of Asukadera Temple (Nos. 188-19, 192-1, -9)	106
Excavations of Yamadamichi (Nos. 193, 194)	110
Excavation to the South of Daikandaiji Temple (No. 196)	145
Pottery Excavated from the Phase B Ground Preparation Layer and Ditch SD640 at the Ishigami Site (Ishigami Site Nos. 3-5, 10-12)	146
Pottery Excavated from SG100, a Pond at the Sakatadera Temple Site (Sakatadera Temple No. 1) ..	154

III Excavations at the Nara Palace and Other Sites	167
1 Excavation at the Nara Palace Site	169
Excavation of the Eastern Palace Sector (No.584・587・593)	170
Excavation of the Former Imperial Audience Compound (No.585)	198
2 Excavations in the Nara Capital Site and at Nara Temples	211
Excavation in Block11, East Second Ward on Second Street (No. 581)	212
Excavation in Block10, East Second Ward on First Street (No. 582・583)	214
Excavation in Block4, West Second Ward on First Street (No. 588)	220
Excavation in Nakayama tile kiln (No.586)	222
Excavation in East Pagoda Compound Remains, Tōdaiji Temple (No. 589)	224
Excavation of the Former Precinct of Saidaiji Temple (No. 594)	228
The Building Wooden Components excavated from the East Palace Sector of the Nara Palaces (No. 301)	229
The glazed roof tiles excavated from East Second Ward on Second Street (No. 279)	236
Plant Remains excavated from the Nara Palace and the Nara Capital Site (No.184・198B・440)	240

奈良文化財研究所紀要
2018

発行日 2018年6月30日

編集発行 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

奈良市佐紀町247番1
〒630-8577 TEL 0742-30-6753
e-mail jimu@nabunken.go.jp
URL <http://www.nabunken.jp/>

印刷・製本 能登印刷株式会社

BULLETIN
Nara National Research Institute
for Cultural Properties
2018

Independent Administrative Institution
National Institutes for Cultural Heritage
Nara National Research Institute for Cultural Properties
247-1, Saki-chō, Nara-shi, 630-8577, JAPAN
<http://www.nabunken.jp/>